平成23年度

市原市内遺跡発掘調査報告

能満遺跡群（のうまん） 地楽寺（じらくじ）地区第２地点
能満遺跡群（のうまん） 二階台（にかいだい）地区第２地点
椎津尾崎（しいづおざき）遺跡 第２地点
島原（しまばら）遺跡
棗塚（なつめづか）遺跡 第５次
海士（あま）遺跡群 海士（あま）地区
二日市場（ふつかいちば）遺跡 第２地点
姉崎東原（あねさきひがしはら）遺跡 Ｅ地点
菊間藩庁（きくまはんちょう）跡
山倉前畑（やまくらまえはた）遺跡 第２地点

２０１２

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれています。そのため、有史以来多くの人々が、この地で営みを紡いできました。「王賜」銘鉄剣をはじめ、史跡上総国分尼寺跡や鳳来寺観音堂など、市域はこれら先人の足跡を今に伝える貴重な文化遺産の宝庫です。

本市は、昭和30年代後半から湾岸の工業地帯が発展してきたことにより、それまで農業・漁業を中心としてきた社会経済構造が大きく変化し、人口の増加と都市化が急速に進展しました。そして、これに起因する開発と文化財保護との調整が大きな課題となり、先人達の残した文化財を保護・保存するために、各種の調査を実施しています。

本報告書は、平成23年度に国及び県の補助を受けて実施した、個人住宅の建設等に伴う遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの人々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願います。

終りに、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導並びにご協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成24年3月

市原市教育委員会
教育長　山崎 正夫

例　言

1　本書は、国庫および県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した、市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部の埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　本報告書所収の調査は下記の通り（調査順）であるが、その掲載順序は前後している。所在地などの諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。

(1) 椎津尾崎遺跡 第 2 地点（調査コード　セ 475）　確認調査　33.0 ㎡／ 330.0 ㎡
　調査期間：平成 23 年 4 月 15 日～ 4 月 28 日　調査担当：髙橋康男

(2) 能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点（調査コードセ 477）　確認調査　36.0 ㎡／ 357.98 ㎡・本調査 12.0 ㎡
　調査期間：平成 23 年 4 月 18 日～ 5 月 10 日　調査担当：牧野光隆

(3) 能満遺跡群 二階台地区第 2 地点（調査コードセ 478）　確認調査　50.0 ㎡／ 496.04 ㎡・本調査 54.5 ㎡
　調査期間：平成 23 年 4 月 18 日～ 5 月 10 日　調査担当：牧野光隆

(4) 棗塚遺跡 第 5 次（調査コード　セ 476）　確認調査　33.0 ㎡／ 331.35 ㎡
　調査期間：平成 23 年 4 月 18 日～ 4 月 22 日　調査担当：鶴岡英一

(5) 海士遺跡群 海士地区（調査コード　セ 483）　確認調査　20.0 ㎡／ 206.0 ㎡
　調査期間：平成 23 年 5 月 9 日～ 5 月 16 日　調査担当：髙橋康男

(6) 二日市場遺跡 第 2 地点（調査コード　セ 484）　確認調査　5.7 ㎡／ 57.0 ㎡
　調査期間：平成 23 年 6 月 14 日　調査担当：田所真・田中清美

(7) 姉崎東原遺跡 E 地点（調査コード　セ 485）　確認調査　24.0 ㎡／ 244.79 ㎡
　調査期間：平成 23 年 7 月 26 日～ 7 月 29 日　調査担当：近藤敏

(8) 菊間藩庁跡（調査コード　セ 487）　確認調査　16.5 ㎡／ 165.42 ㎡
　調査期間：平成 23 年 9 月 7 日～ 9 月 9 日　調査担当：田所真

(9) 島原遺跡（調査コード　セ 488）　確認調査　70.0 ㎡／ 706.0 ㎡・本調査 27.0 ㎡
　調査期間：平成 23 年 9 月 12 日～ 9 月 14 日　調査担当：木對和紀

(10) 山倉前畑遺跡 第 2 地点（調査コード　セ 490）　確認調査　57.0 ㎡／ 570.83 ㎡
　調査期間：平成 23 年 12 月 12 日～ 12 月 16 日　調査担当：櫻井敦史

4　本書内の作図・本文執筆は、(1) 及び (5) を田所が、その他は各調査担当者が行い、編集その他作業を牧野が担当した。

5　調査に際しては基準点測量を実施していない。そのため、図中に示す座標値 (平面直角座標第Ⅸ系・日本測地系) 及び北方位は、地形図等から求めたものであり、厳密なものではない。また、各遺跡全体図中に 1 点のみ世界測地系変換座標 (TKY2JGD ver.1.3.79 による) を記した。水準については、近隣の既知点より求めて使用した。

6　本年度は、郡本遺跡群第 15 次 (確認調査)・第 16 次（確認調査・本調査）も実施したが、平成 24 年 2 月末からの調査であるため、来年度の整理報告とする。

本文目次

1　調査遺跡の位置 ……1
2　能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点 ……2
3　能満遺跡群 二階台地区第 2 地点 ……9
4　椎津尾崎遺跡 第 2 地点 ……17
5　島原遺跡 ……20
6　棗塚遺跡 第 5 次 ……22
7　海士遺跡群 海士地区 ……27
8　二日市場遺跡 第 2 地点 ……29
9　姉崎東原遺跡 E 地点 ……31
10　菊間藩庁跡 (菊間遺跡群北野地区)……33
11　山倉前畑遺跡 第 2 地点 ……35
12　出土遺物観察表 ……39

挿図目次

第 1 図　調査遺跡位置図 …… 1
第 2 図　能満遺跡群周辺地形図 …… 2
第 3 図　能満遺跡群地楽寺地区第 2 地点全体図、1 トレンチ実測図・出土遺物 …… 3
第 4 図　4 トレンチ実測図・出土遺物 …… 4
第 5 図　2・3 トレンチ（本調査範囲 SI02）実測図（1） …… 5
第 6 図　2・3 トレンチ（本調査範囲）実測図（2）、SD01 出土遺物 …… 6
第 7 図　SI02 出土遺物分布図・出土遺物（1） …… 7
第 8 図　SI02 出土遺物（2） …… 8
第 9 図　能満遺跡群二階台地区第 2 地点全体図 …… 9
第 10 図　3 トレンチ実測図・出土遺物 …… 10
第 11 図　4・5 トレンチ実測図・出土遺物 …… 11
第 12 図　本調査区域実測図 …… 12
第 13 図　本調査区域出土遺物分布図、出土遺物（1） …… 14
第 14 図　本調査区域 (SI01~04) 出土遺物（2） …… 15
第 15 図　本調査区域 (SD01・02) 出土遺物（3） …… 16
第 16 図　椎津尾崎遺跡・島原遺跡周辺地形図 …… 17
第 17 図　椎津尾崎遺跡第 2 地点全体図 …… 18
第 18 図　1・2 トレンチ実測図・出土遺物 …… 19
第 19 図　島原遺跡全体図 …… 20
第 20 図　2 トレンチ実測図、1・2 トレンチ出土遺物 …… 21
第 21 図　棗塚遺跡周辺地形図 …… 22
第 22 図　棗塚遺跡第 5 次全体図、1 トレンチ出土遺物 …… 23
第 23 図　1・2 トレンチ実測図 …… 24
第 24 図　海士遺跡群・山倉前畑遺跡周辺地形図 …… 27
第 25 図　海士遺跡群海士地区全体図、土層断面図 …… 28
第 26 図　二日市場遺跡第 2 地点全体図、トレンチ土層断面図 …… 29
第 27 図　二日市場遺跡周辺地形図 …… 30
第 28 図　姉崎東原遺跡周辺地形図 …… 31
第 29 図　姉崎東原遺跡 E 地点全体図、トレンチ土層断面図・出土遺物 …… 32
第 30 図　菊間藩庁跡周辺地形図 …… 33
第 31 図　菊間藩庁跡全体図、1・2 トレンチ土層断面図・出土遺物 …… 34
第 32 図　山倉前畑遺跡第 2 地点全体図 …… 36
第 33 図　トレンチ土層断面図・出土遺物（1） …… 37
第 34 図　出土遺物（2） …… 38

図版目次

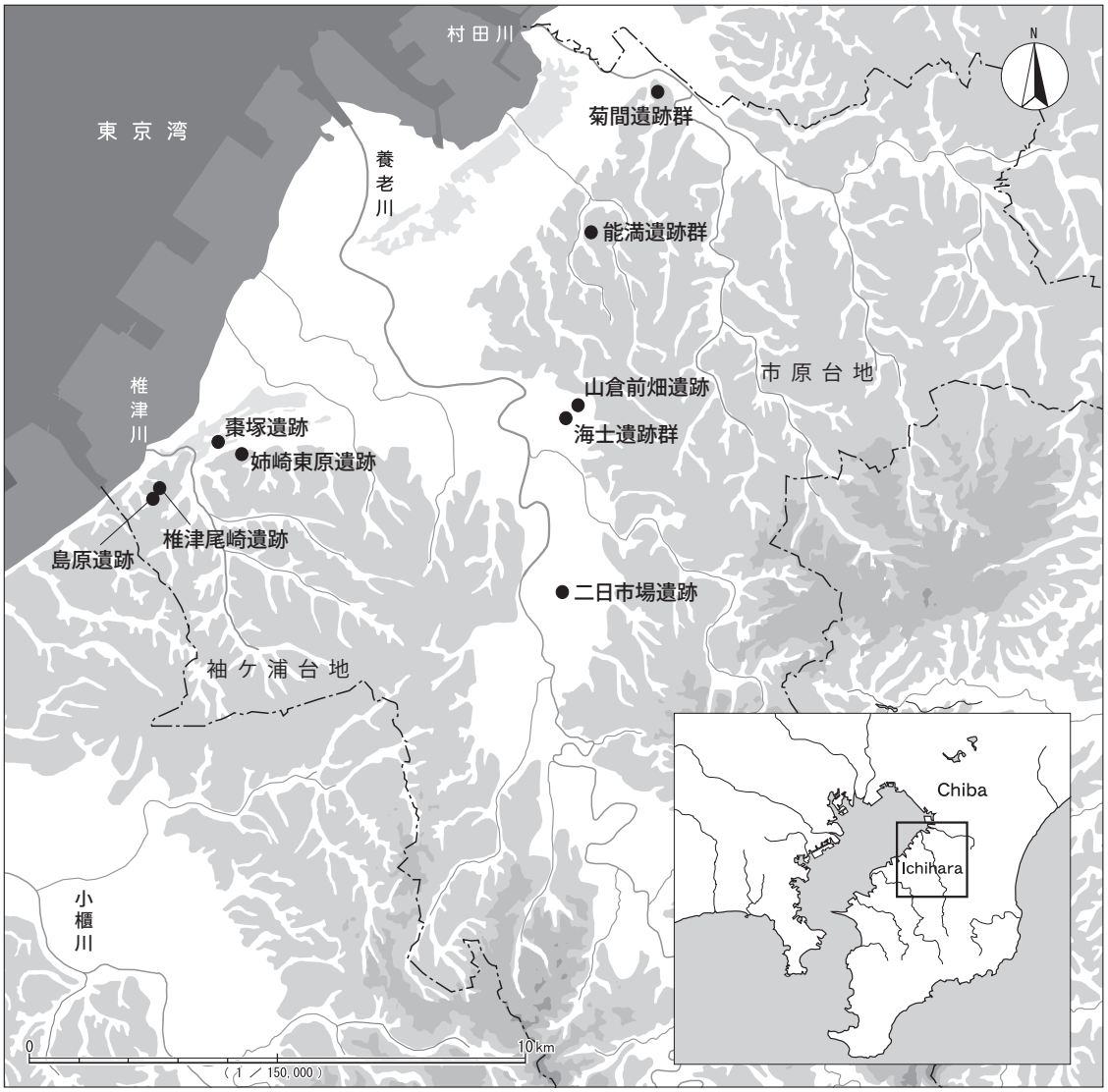
図版 1　能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点
図版 2　能満遺跡群 二階台地区第 2 地点
図版 3　能満遺跡群 二階台地区・椎津尾崎遺跡第 2 地点・島原遺跡
図版 4　島原遺跡・棗塚遺跡第 5 次
図版 5　海士遺跡群海士地区・二日市場遺跡第 2 地点・姉崎東原遺跡 E 地点
図版 6　姉崎東原遺跡・菊間藩庁跡
図版 7　山倉前畑遺跡第 2 地点
図版 8　能満遺跡群・椎津尾崎遺跡・棗塚遺跡・菊間藩庁跡・山倉前畑遺跡出土遺物
図版 9　山倉前畑遺跡・能満遺跡群地楽寺地区出土遺物
図版 10　能満遺跡群地楽寺地区・二階台地区出土遺物
図版 11　椎津尾崎遺跡・島原遺跡・棗塚遺跡出土遺物
図版 12　棗塚遺跡出土貝類、姉崎東原遺跡・菊間藩庁跡・山倉前畑遺跡出土遺物

1　調査遺跡の位置

平成 23 年度は、能満遺跡群・椎津尾崎遺跡・島原遺跡（椎津）・棗塚遺跡（姉崎）・海士遺跡群・二日市場遺跡・姉崎東原遺跡・菊間藩庁跡・山倉前畑遺跡の 9 遺跡 10 地点の発掘調査を実施した。

市原市は、南北に約 35km と縦長の行政区画を有し、養老川が南北を縦貫する。その養老川下流域が開析した台地の右岸を市原台地、左岸を袖ケ浦台地と通称する。東京湾岸の埋立地は、京葉臨海工業地帯の一角を担い、流通網の大動脈である国道 16 号線が走る。やや内陸に入った旧海岸線沿いの砂堆上に JR 内房線が敷設され、北から八幡宿･五井･姉ヶ崎の 3 駅を擁する。そのような環境から、市内北部域の市街化区域には人口が集中し、都市化が進んできた。

今年度報告する 10 地点は、主に個人住宅等の建設に伴う調査であり、市域北半部に集中している。位置的には、養老川右岸の市原台地上に 3 地点、袖ケ浦台地上の椎津・姉崎に 3 地点、その台地をおりた砂堆上の棗塚遺跡､その二つの台地を分断する養老川の沖積地及び段丘面に 3 地点となる。いずれも埋蔵文化財の密度が高い地域であり、能満は中世国衙推定地としても注目されるエリアである。二日市場は、上総国分寺以前の廃寺跡の存在が知られる。



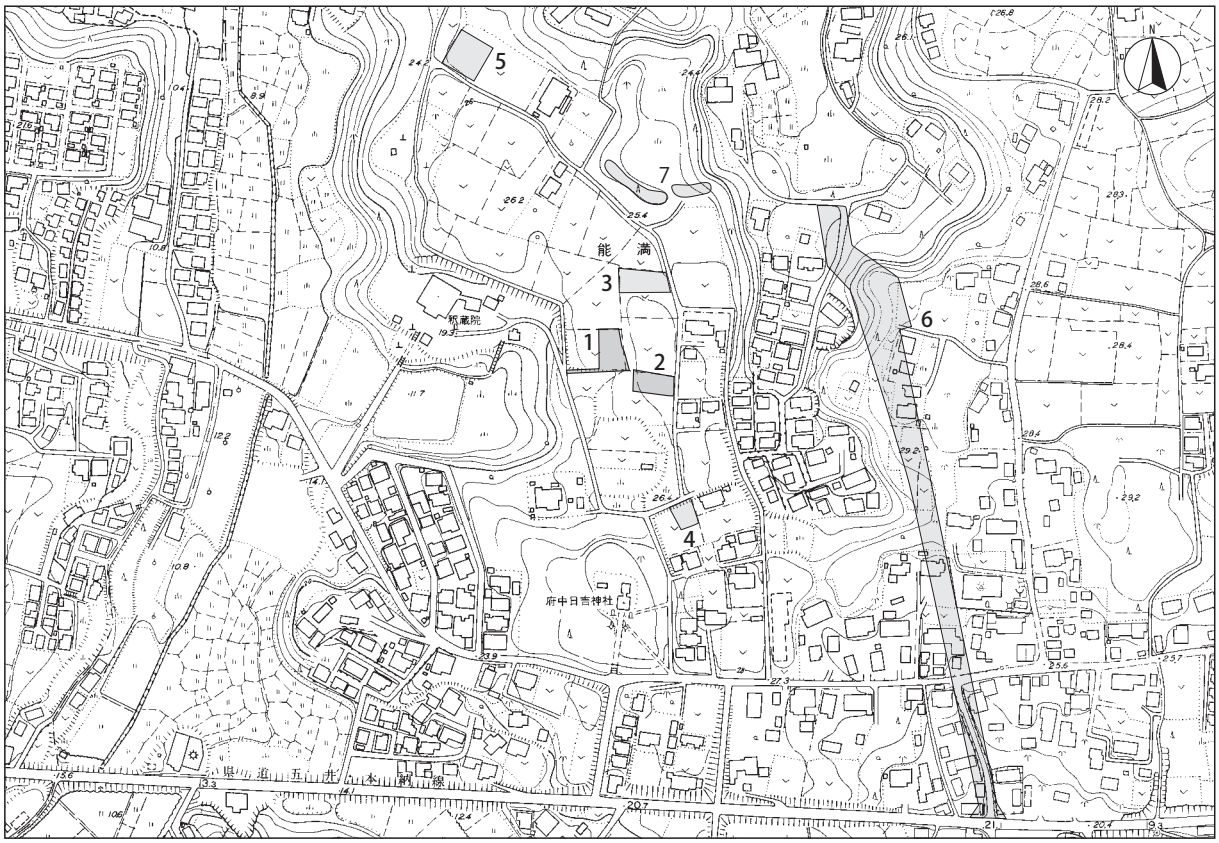
第1図　調査遺跡位置図

2　能満遺跡群 地楽寺地区第２地点 （遺構：図版１／出土遺物：図版８～10）

遺跡の位置と歴史的環境　東京湾旧海岸線から南東に 3.2km の距離にあり、新田川の開析谷に東西を挟まれた標高 26 m前後の市原台地上に、調査地点は所在する。能満遺跡群は、広域に広がる複合遺跡として南北 1.6km、東西 1.0km にわたって包蔵地として周知されている。そのなかで、今回調査区 (第 2 図 2) は中央部西寄り付近に位置し、能満城跡としても括られている。

付近では、平成 16 年度に地楽寺地区として調査を実施し (第 2 図 4)、古墳時代前期前半の竪穴建物跡 1 軒を検出した (大村直 2006「能満遺跡群地楽寺地区」『市原市文化財センター年報平成 17 年度』)。その同一小字内であるため、今回は「第 2 地点」とした。北に 60 mと近接する地点 (同図 3) でも調査が行われ、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴建物跡 5 軒が確認されている (牧野光隆 2001『平成 12 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会)。

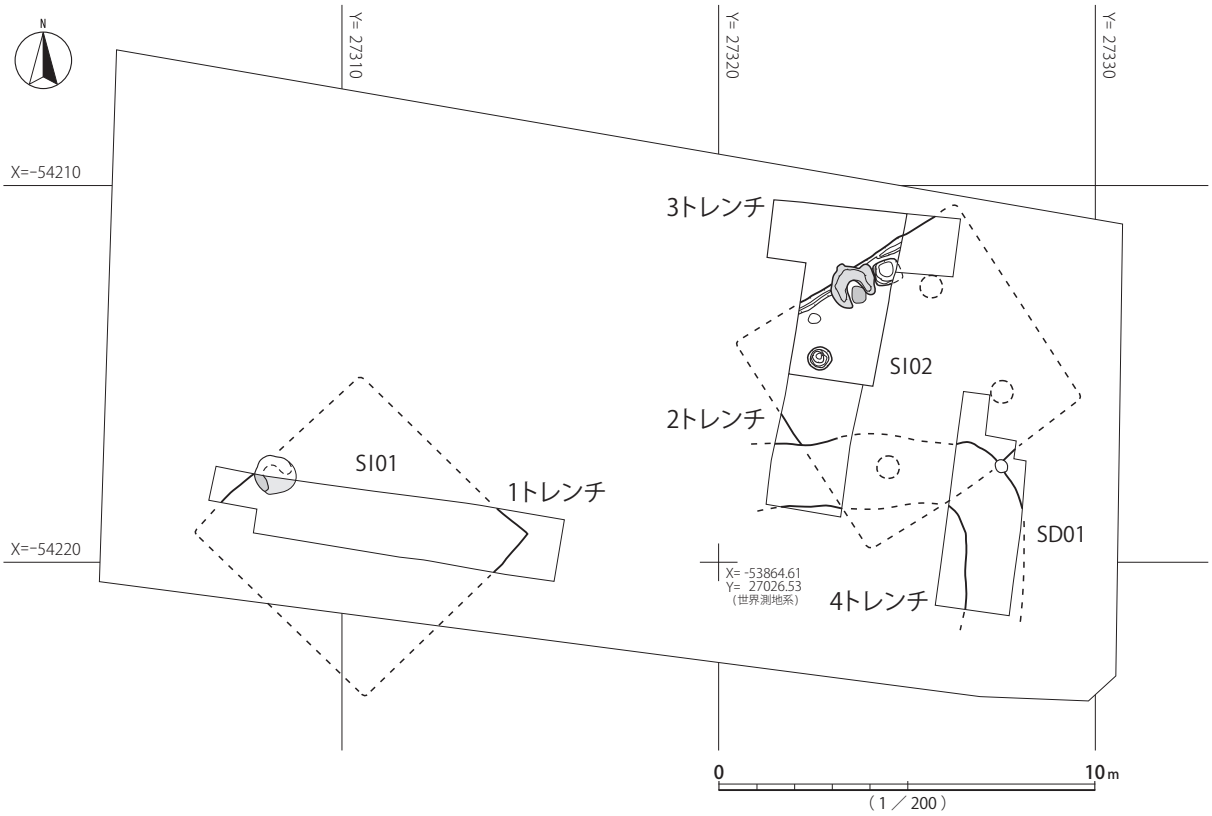
調査区西側の谷に降りた中腹には、永正 10 年 (1513) からの中世文書群が発見された釈蔵院があり、南方 150 mには、15 世紀に遡る社殿が現存する府中日吉神社がある。また、調査区北方 100 mには「城山」と呼ばれる字名があり、数十メートルに渡って高さ 3 mほどの土塁が残り (第 2 図 7) 能満城跡の主郭とも言われる。東側の谷を挟んだ台地上には、市道の調査 (同図 6) によって中世居館跡の存在が判明している (近藤敏 2004 ～ 2006「能満城跡遺跡」『市原市文化財センター年報』)。周囲の字名と土地利用状況については第 2 図 5 の調査報告である『市原市能満遺跡群天王辺田地区』(田所真 2011 市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 18 集) に詳しい。

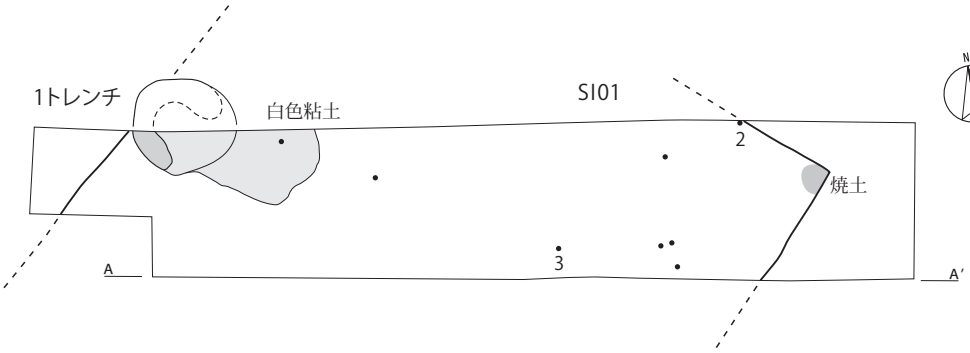


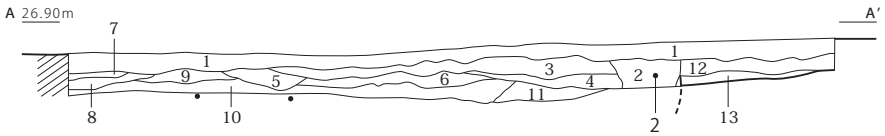
(市原市基本図 1/2500、昭和 55 年測図より)

0　200 m
（1／5,000）

第2図　能満遺跡群周辺地形図

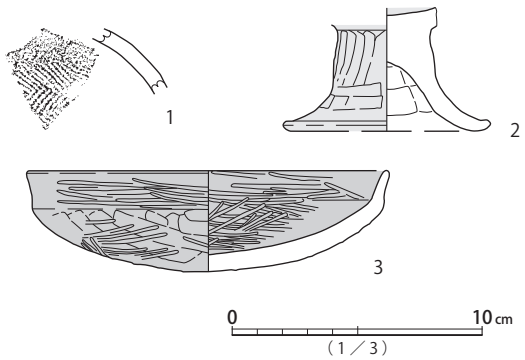




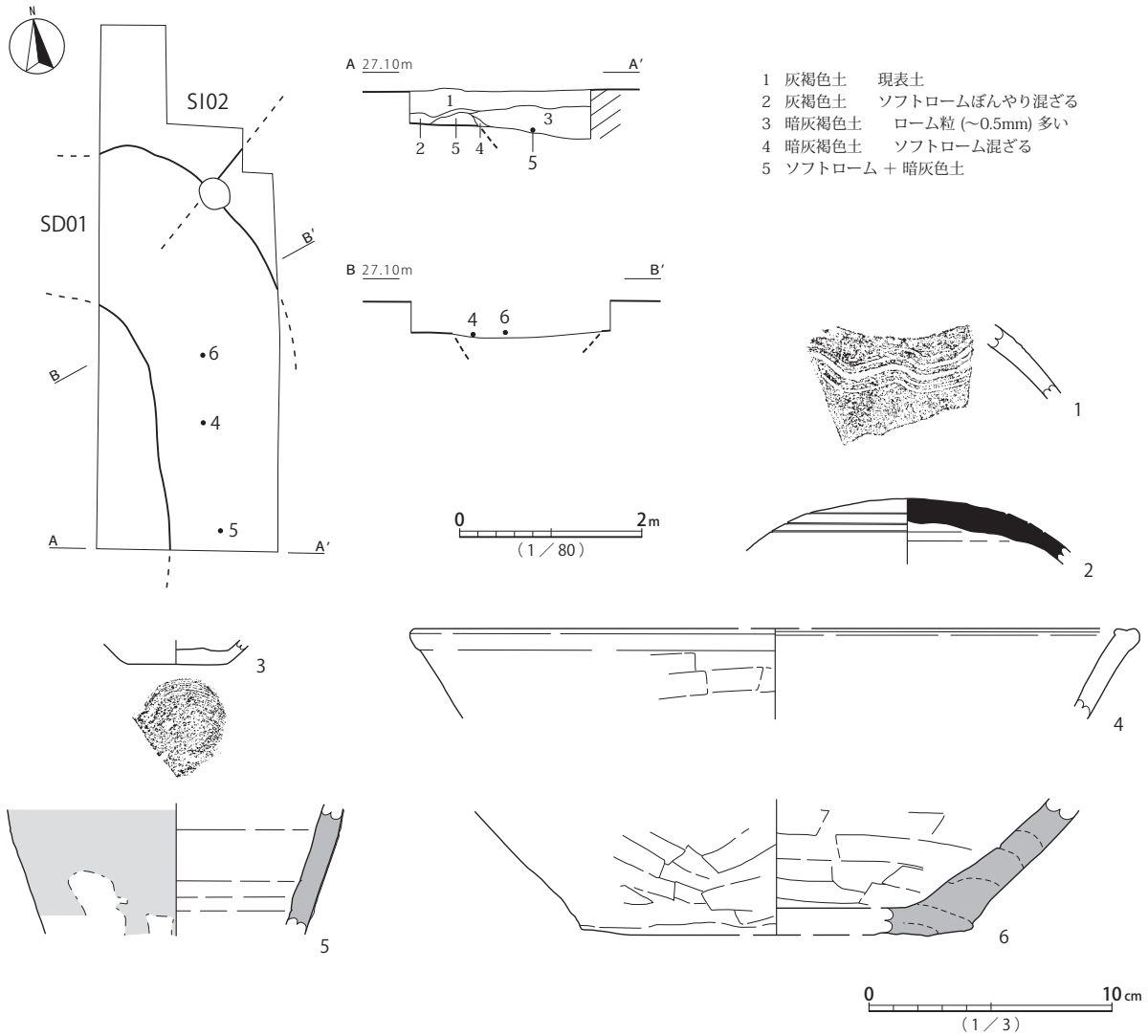


1 トレンチ　南東から

1　暗灰褐色土　　現表土
2　黒灰色土　　ローム粒多い　近現代の耕作によるものか
3　暗灰～黒灰色土　　ローム粒 (～8mm) 多い
4　暗灰～黒灰色土　　ロームブロック (～50mm) 多量
5　暗灰褐色土　　白色粘土ブロック (～30mm・カマド構築材か)　ローム粒少量
6　暗灰褐色土　　ローム粒 (～3mm) 多い
7　暗灰褐色土　　混ざりなし
8　暗灰褐色土　　ローム粒 (～3mm) 少ない　ソフトローム混ざる
9　暗灰褐色土　　焼土粒 (～5mm)・ローム粒 (～3mm) 少ない
10　暗灰褐色土　　6層より明色　ローム粒～ブロック (～50mm) 多い
11　黒灰色土　　ローム粒 (～8mm) 多い　焼土粒 (～5mm) 少ない
12　暗灰褐色土　　混ざり少ない
13　暗灰褐色土 ＋ ソフトローム　　ローム漸移層



第3図　能満遺跡群地楽寺地区第2地点全体図、1トレンチ実測図・出土遺物



第4図　4トレンチ実測図・出土遺物

調査概要　個人住宅建設に起因する確認調査および本調査を実施した。北西に近接する二階台地区第2地点 (第2図1) は、同時期に計画された個人住宅の建設に伴う調査であるため、2地点の調査は同時並行で行った。2トレンチの一部は雨水槽、3トレンチの一部は浄化槽の設置のため、本調査とした。

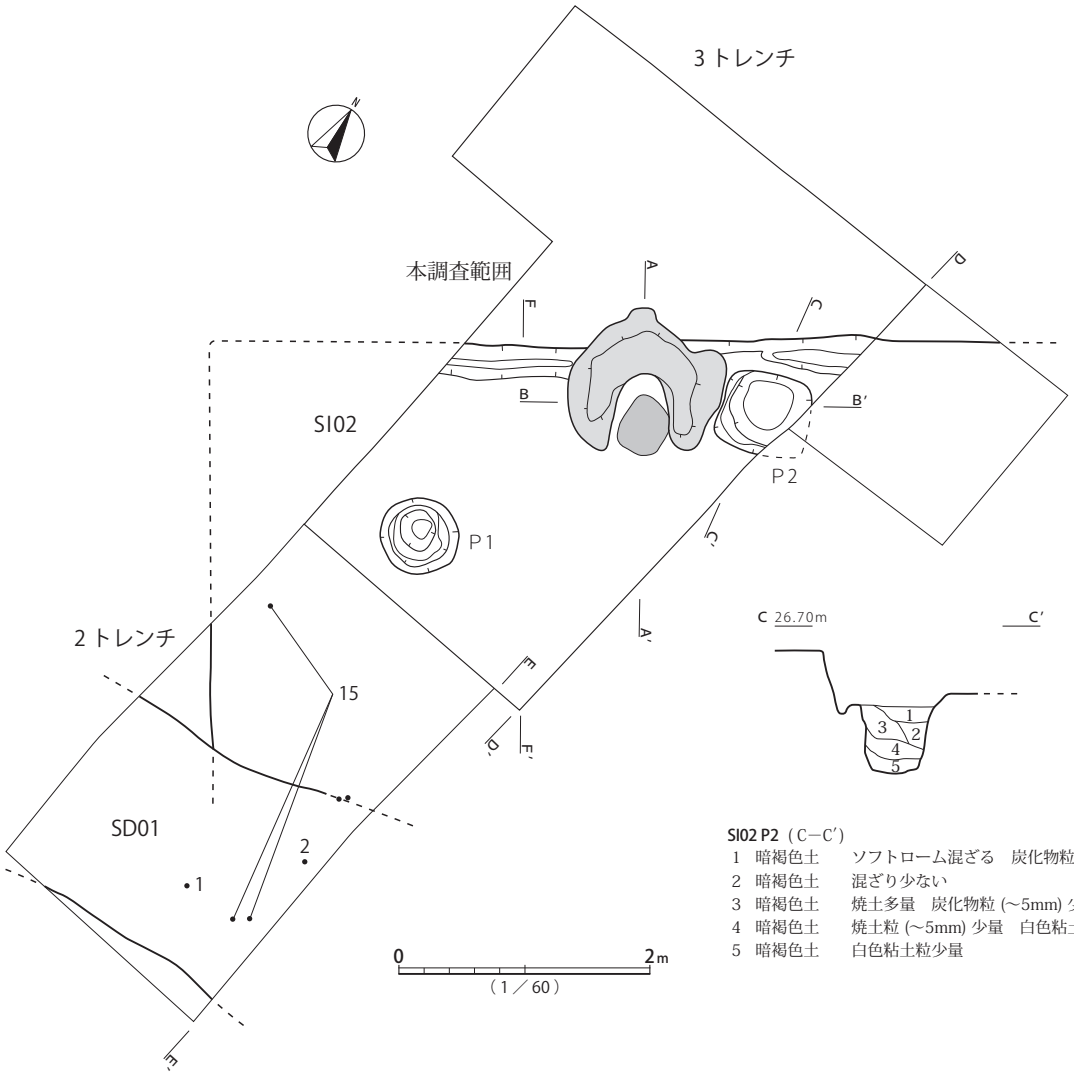
調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物跡2軒 (SI01・02)、中世の溝跡1条 (SD01) を確認し、そのうち SI02 の一部を本調査した。

遺構と遺物　1トレンチでは竪穴建物跡 SI01 を確認した。竪穴の南東隅と北壁に据えられたカマドとみられる白色粘土の分布範囲を確認した。

竪穴規模は6.4 m四方と推定され、推定主軸方位N-45°-Wである。床面標高は25.83 m前後を測り、確認面からの深さは 40 ～ 45 ㎝程度と推定され、全体的に遺存状況は良好である。

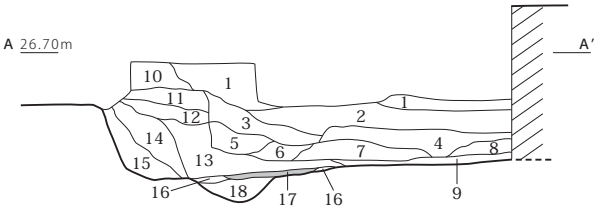
出土遺物は、第3図2の赤彩の土師器高杯は短脚であり、3の黒色処理ミガキを施した土師器杯は覆土下層からの出土であり、器高が低くなる時期のものである。それらの特徴から、古墳時代後期でも6世紀後半～末頃の所産とみられる。

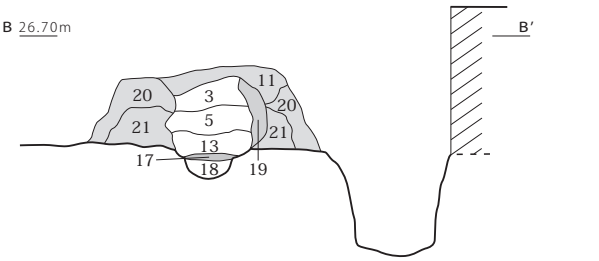
2トレンチと4トレンチにおいて、L字状に掘られた溝跡 (SD01) を確認した。2トレンチで確認したほぼ東西軸の溝跡が4トレンチで南に方向を変える。溝の確認面幅は 1.6 m～ 1.9m である。確



SI02 P2（C—C′）

1　暗褐色土　　ソフトローム混ざる　炭化物粒 (～3mm) 少量
2　暗褐色土　　混ざり少ない
3　暗褐色土　　焼土多量　炭化物粒 (～5mm) 少量
4　暗褐色土　　焼土粒 (～5mm) 少量　白色粘土混ざる
5　暗褐色土　　白色粘土粒少量



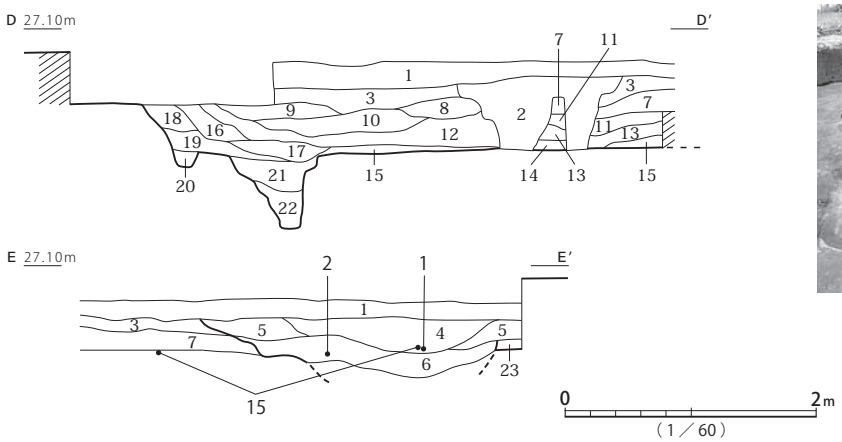


SI02 カマド（A—A′・B—B′）

1　明褐～褐色土　　しまりなし
2　暗褐色土　　ローム粒 (～8mm) 多い　橙色粒 (～2mm) 少量
3　灰白色土　　白色粘土粒・炭化物粒多い　カマド天井の崩落土
4　暗褐色土　　ロームブロック (～20mm) 2層より多い
5　暗褐～黒褐色土　　6層より混ざり少ない
6　暗褐～黒褐色土　　炭化物・焼土・焼土ブロック・白色粘土など混ざる
7　暗褐色土　　焼土多量　カマドから流出か
8　暗褐色土　　ロームブロック (～40mm) 混ざる
9　暗灰褐色土　　炭化物多い　床面直上土
10　明褐色土　　白色粘土主体　焼土混ざる
11　灰白色土　　白色粘土主体　カマド天井の残存部分か
12　明褐色土　　白色粘土・焼土多い
13　暗灰褐色土　　炭化物多量
14　明褐色土　　白色粘土ブロック・焼土ブロック多量　ロームブロック (～50mm) 含む
15　明褐色土　　白色粘土ブロック・焼土粒多量
16　褐色土　　焼土・炭化物粒多量
17　火床面
18　暗灰褐色土　　カマド部分の掘り形充填土
19　明赤褐色土　　カマド内面の側壁が火を受け赤化している
20　灰褐色土 ＋ 白色粘土
21　白色粘土主体　　カマド左右ソデ基部

0　1m
（1／40）

第5図　2・3トレンチ（本調査範囲SI02）実測図（1）



SI02 カマド付近遺物出土状況 南西から

SI02・SD01　(D−D′・E−E′)

1　灰褐色土　　現表土
2　黒褐色土　　ローム粒・ブロック多い　しまり弱い　近現代の耕作か
3　暗褐色土　　ローム粒 (〜5mm) 多い　中世前後か
4　灰褐色土　　ローム粒 (〜5mm) 少量
5　暗灰褐色土　　混ざり少ない
6　暗灰褐色土　　5層よりやや暗色　ローム粒 (〜3mm) 少量
7　暗褐色土　　ローム粒 (〜5mm) 多い　黒灰褐色土ブロック (〜10mm) 少量
8　暗褐色土　　ソフトロームぼんやり混ざる　白色粘土少量
9　暗褐色土　　ロームブロック (〜30mm) 数点
10　褐色土　　他層より明色　ローム粒 (〜3mm)・橙色粒・白色粘土粒 (〜5mm) 混ざる
11　暗褐色土　　ソフトローム多い　ロームブロック (〜20mm) 少量
12　褐色〜暗褐色土　　ローム粒〜ブロック (〜20mm) 多い　橙色・白色粒・炭化物粒 (〜10mm) 少量
13　黒褐色土　　ローム粒〜ブロック (〜15mm) 少量
14　暗褐色土　　ソフトローム多く混ざる
15　暗褐色土　　焼土含む　床面直上土
16　暗褐色土　　11層に類似　ソフトローム混ざる　黒褐色土ブロック (〜50mm) 少量
17　暗褐色土　　20層より暗色　混ざり少ない
18　暗褐色土　　ローム粒 (〜5mm) 多い　ソフトローム混ざる
19　暗褐色土　　ローム粒 (〜5mm)・焼土粒 (〜3mm) 多い
20　暗褐色土　　ソフトローム多い　壁周溝覆土
21　暗褐色土　　ローム粒 (〜3mm) 多い　SI02 P2覆土上層
22　暗褐色土　　ローム粒 (〜8mm) 多い　SI02 P2覆土下層
23　暗褐色土 ＋ ソフトローム　ローム漸移層

2トレンチSD01出土

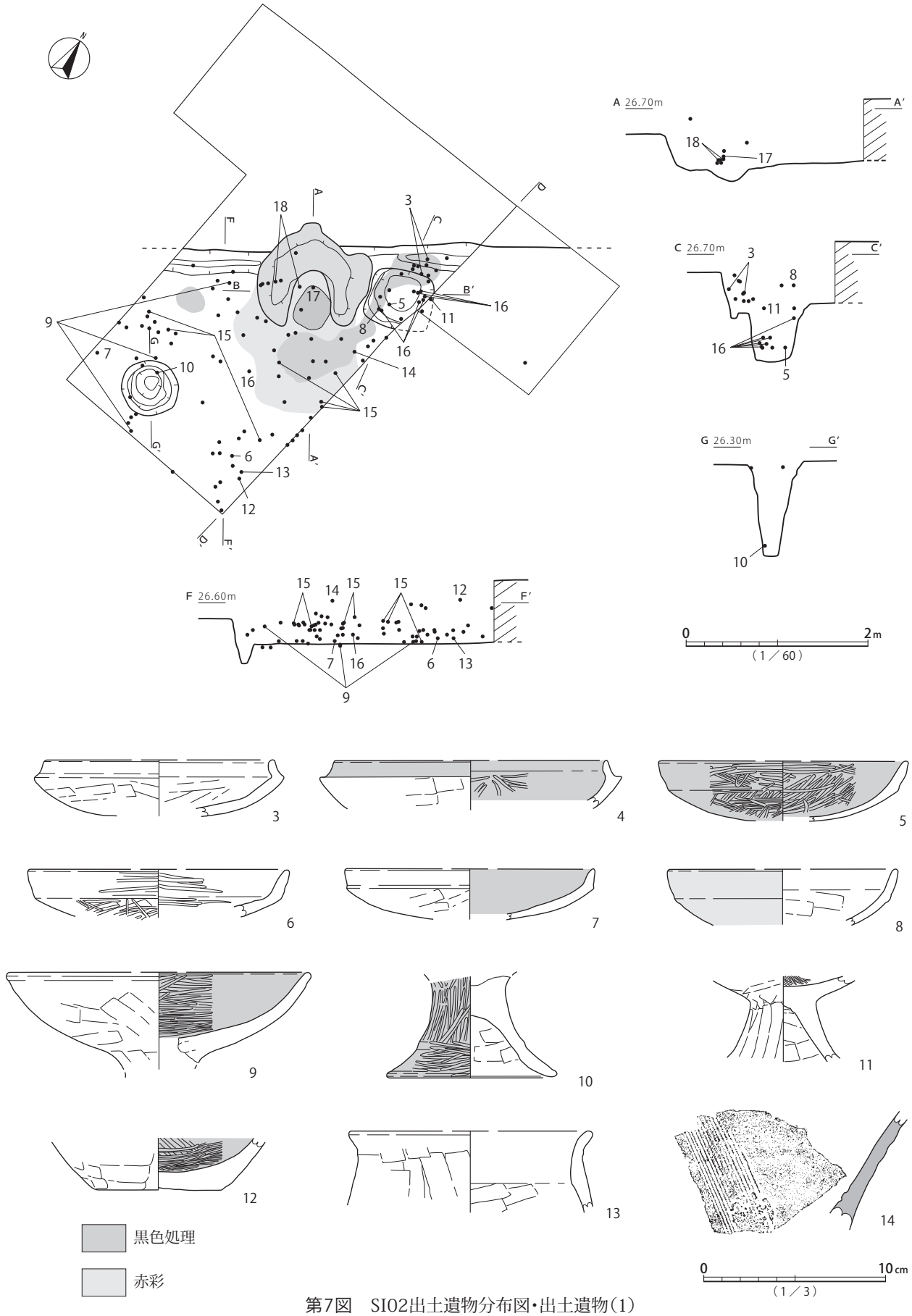
第6図　2・3トレンチ(本調査範囲)実測図(2)、SD01出土遺物

認面からの深さは最大46㎝前後であり、底面は幅1m前後の平坦面になるとみられる。第4図3〜6、第6図1・2のような中世土器および陶磁器類が出土したことから、中世後半期の溝跡とみられる。

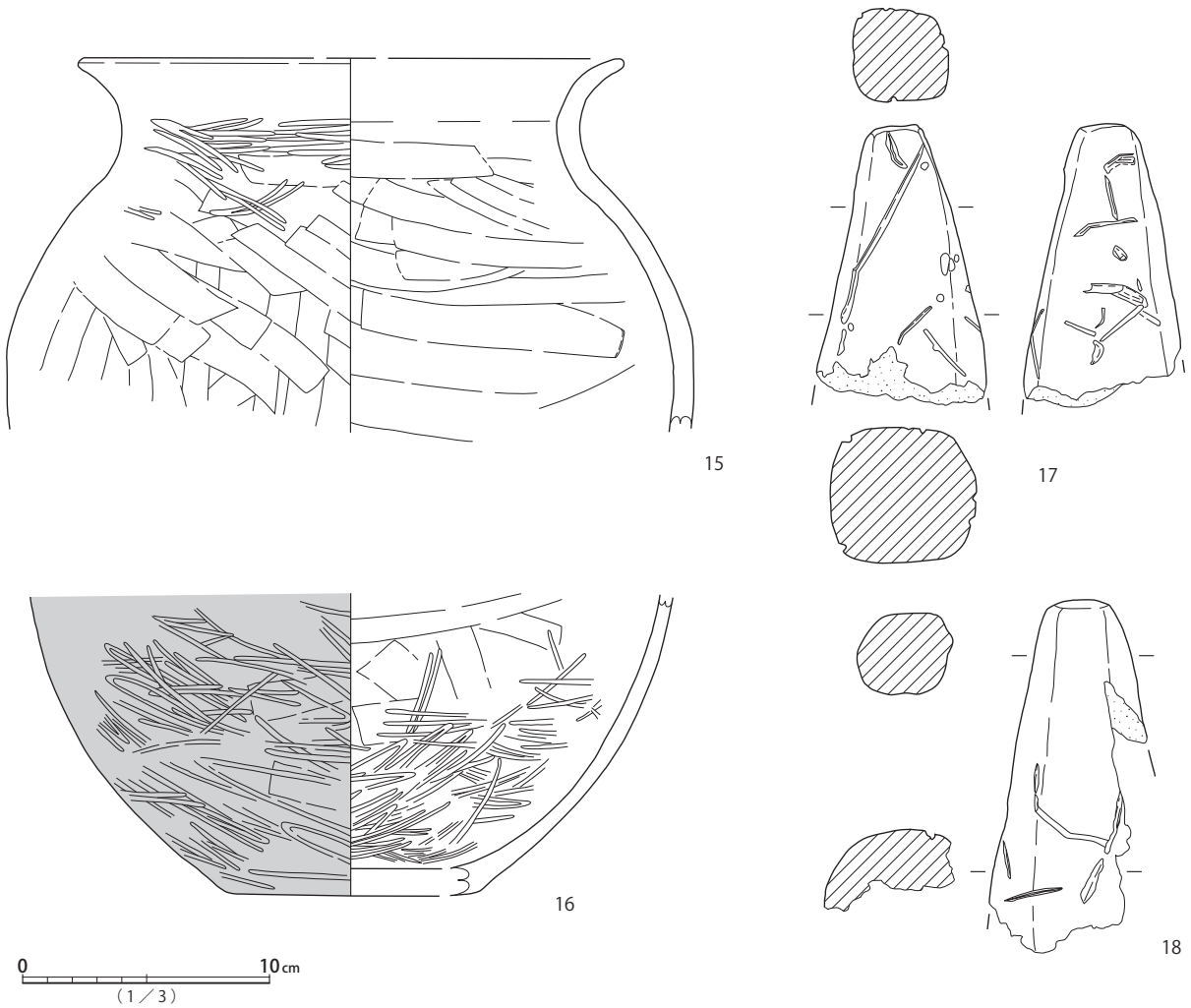
2・3トレンチは前述のように本調査部分を含んでおり、当初は設計図面の位置通り、トレンチの間に1mほどの隔たりがあったが、ちょうどその部分にSI02竪穴建物跡のカマド部分があたることが確認されたため、工事影響範囲も考慮し、つなげて本調査することとした(第5図)。

SI02は4トレンチの北寄りにも南東壁のプランが確認されており、その主軸長が6.5mであることがわかる。また、2トレンチで確認された南西壁と本調査部分の柱穴P1の位置から対称的に推定すると、副軸規模は7.0mであると想定される(第3図全体図参照)。主軸方位はN-33°-Wであり、SI01より軸はやや北に振れる。確認面からの深さは29〜40㎝であり、床面標高は26.1m前後である。

竪穴北西壁にカマドを設置し、その向かって右脇に方形のいわゆる貯蔵穴(P2)を掘り込む。カマドの両脇には、幅19〜30㎝・深さ3.1〜15.8㎝の壁周溝が巡る。床面はしっかり硬化している。



第7図　SIO2出土遺物分布図・出土遺物（1）



第8図　SI02出土遺物(2)

カマドの規模は、ソデの先端から煙道の先端までが 1.17 m、左右のソデ外側間 1.25 mである。火床面は 48 × 40 ㎝の大きさで検出された。カマド内部の燃焼室の奥行きは 80 ㎝、幅は 50 ㎝ほどと推定される。土製の支脚 2 個体 (第 8 図 17・18) が、カマド内部から出土している。18 は破損しており、その破片が燃焼室内と左ソデの内部から出土した。カマドを作り替えた時に、古い支脚がソデの内部に入り込んだ状態と考えられ、カマドを改修したものと見受けられる。

白色粘土を主体に構築されたカマドは、遺存状態が非常に良好であったが、天井かけ口部分は平面的にも確認できなかった。手前の天井部分は崩壊し、奥部分の天井部は落ちないまま埋没したという状況が想定される (第 5 図の土層断面図参照)。

P2 は穴の南東隅が調査範囲外であったため完掘にいたらなかったが、上面規模は 69×66 ㎝で、床面からの深さは 59.7 ㎝である。西側および南側の上面には浅い段が巡っており、蓋をするための蓋受けであった可能性がある。覆土には、第 7 図 5 の土師器杯と第 8 図 16 の土師器甕が含まれていた。主柱穴と想定される P1 は、床面からの深さ 102.5 ㎝と深くしっかりした掘り形である。底面付近から第 7 図 10 の高杯脚部が出土している。柱アタリは観察されなかった。

出土遺物 (第 7 図 3 ～第 8 図 18) からは、概ね古墳時代後期 6 世紀末頃の様相がみられる。第 7 図 3 ～ 8 の土師器の模倣杯は、器高が低く浅い傾向にあり、5 ～ 8 は口縁部が開く。9 の高杯の杯部も浅い。12 と 14 は覆土の上層出土であり、14 は錆釉が施釉された瀬戸産のすり鉢である。

3　能満遺跡群 二階台地区第２地点 （遺構：図版２・３／出土遺物：図版８・10）

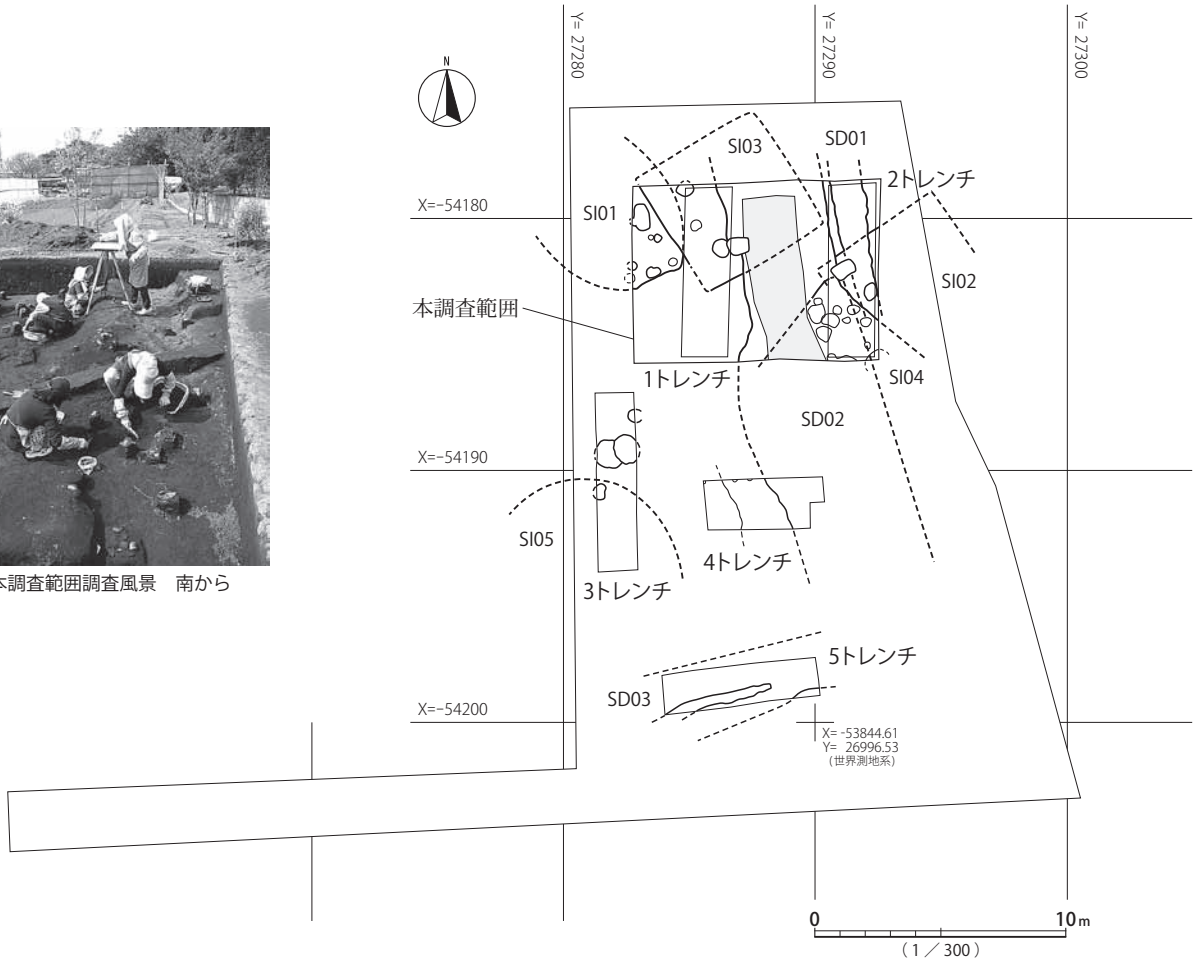
遺跡の位置　調査区は、前述の地楽寺地区第２地点の北西に近接する (第２図地形図内１)。付近には中世の面影が色濃くみられるが、平成 12 年度に調査を行った第１地点 (同図３) では、前述のとおり弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡でもあることが確認されている。

調査概要　個人住宅建設に伴い確認調査・本調査を実施した。調査は同時期に実施した地楽寺地区第２地点と併行して行った。母屋の基礎部分は土壌改良工事を行うとのことから、1・2 トレンチを設定し、遺構が確認されたため、影響範囲全体について本調査を行った。ただ、検出した溝跡が改良範囲よりも深いことが判明したため、基礎への影響を考慮し、改良範囲である現地表から 90 ㎝程度までの調査とし､それより下層は調査未了部分として残存することとした (第 12 図グレー範囲)。また、3 トレンチの北半は浄化槽設置部分にあたるため、本調査とした。

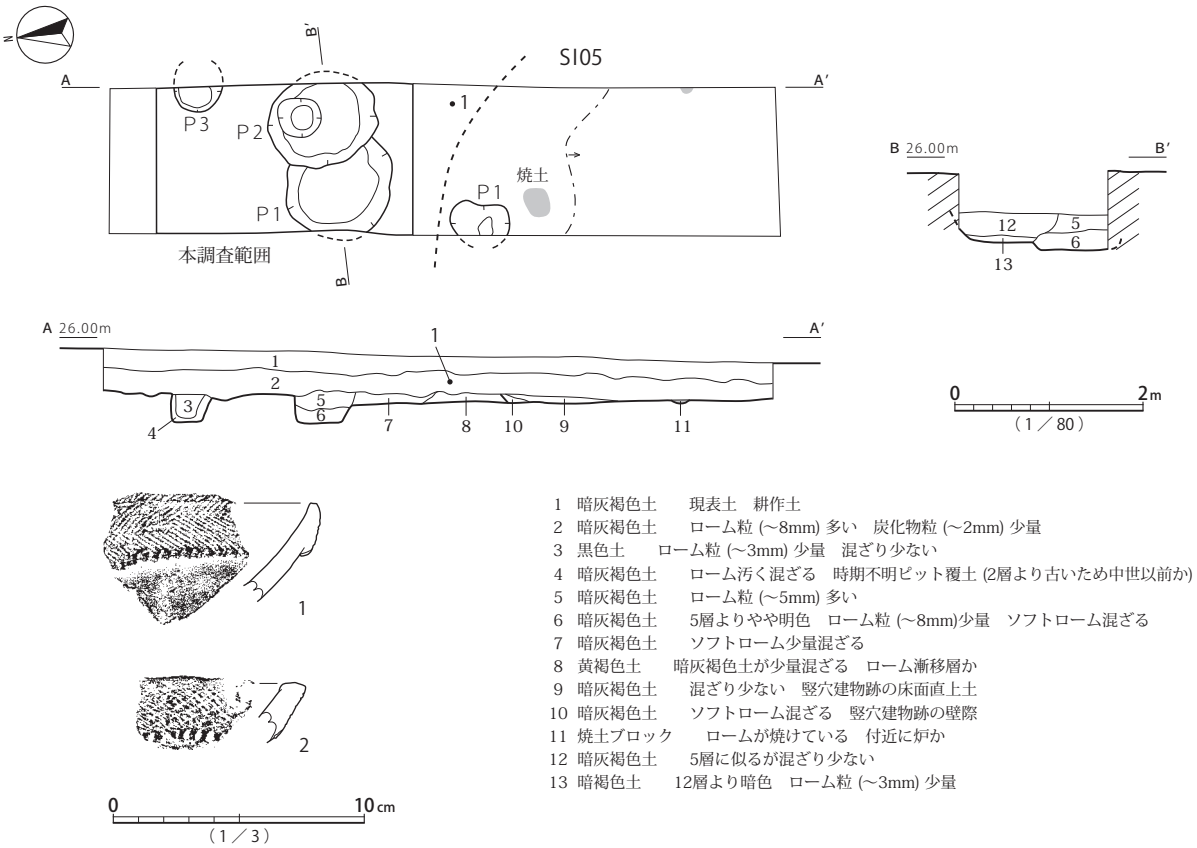
調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物跡２軒、古墳時代後期の竪穴建物跡３軒、中世の溝跡１条、中近世の溝跡１条、近世の溝跡１条 (SD01・覆土に富士宝永火山灰を含む) を検出した。

遺構と遺物　３トレンチでは、弥生時代後期の竪穴建物跡 (SI05)1 軒と時期不明のピット３基 (P1 ～ P3) が確認された。このうち、トレンチの北１／３は浄化槽設置部分として本調査範囲であり、ピット３基は本調査とした。SI05 は確認面がほぼ床面付近であり、覆土はほんの一部分にわずかの厚みしか残存していなかった｡竪穴の壁はトレンチ壁面の土層断面でわずかな立ち上がり部分に想定した。

本調査範囲調査風景　南から



第9図　能満遺跡群二階台地区第2地点全体図



1 暗灰褐色土　現表土　耕作土
2 暗灰褐色土　ローム粒 (～8mm) 多い　炭化物粒 (～2mm) 少量
3 黒色土　ローム粒 (～3mm) 少量　混ざり少ない
4 暗灰褐色土　ローム汚く混ざる　時期不明ピット覆土 (2層より古いため中世以前か)
5 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い
6 暗灰褐色土　5層よりやや明色　ローム粒 (～8mm)少量　ソフトローム混ざる
7 暗灰褐色土　ソフトローム少量混ざる
8 黄褐色土　暗灰褐色土が少量混ざる　ローム漸移層か
9 暗灰褐色土　混ざり少ない　竪穴建物跡の床面直上土
10 暗灰褐色土　ソフトローム混ざる　竪穴建物跡の壁際
11 焼土ブロック　ロームが焼けている　付近に炉か
12 暗灰褐色土　5層に似るが混ざり少ない
13 暗褐色土　12層より暗色　ローム粒 (～3mm) 少量

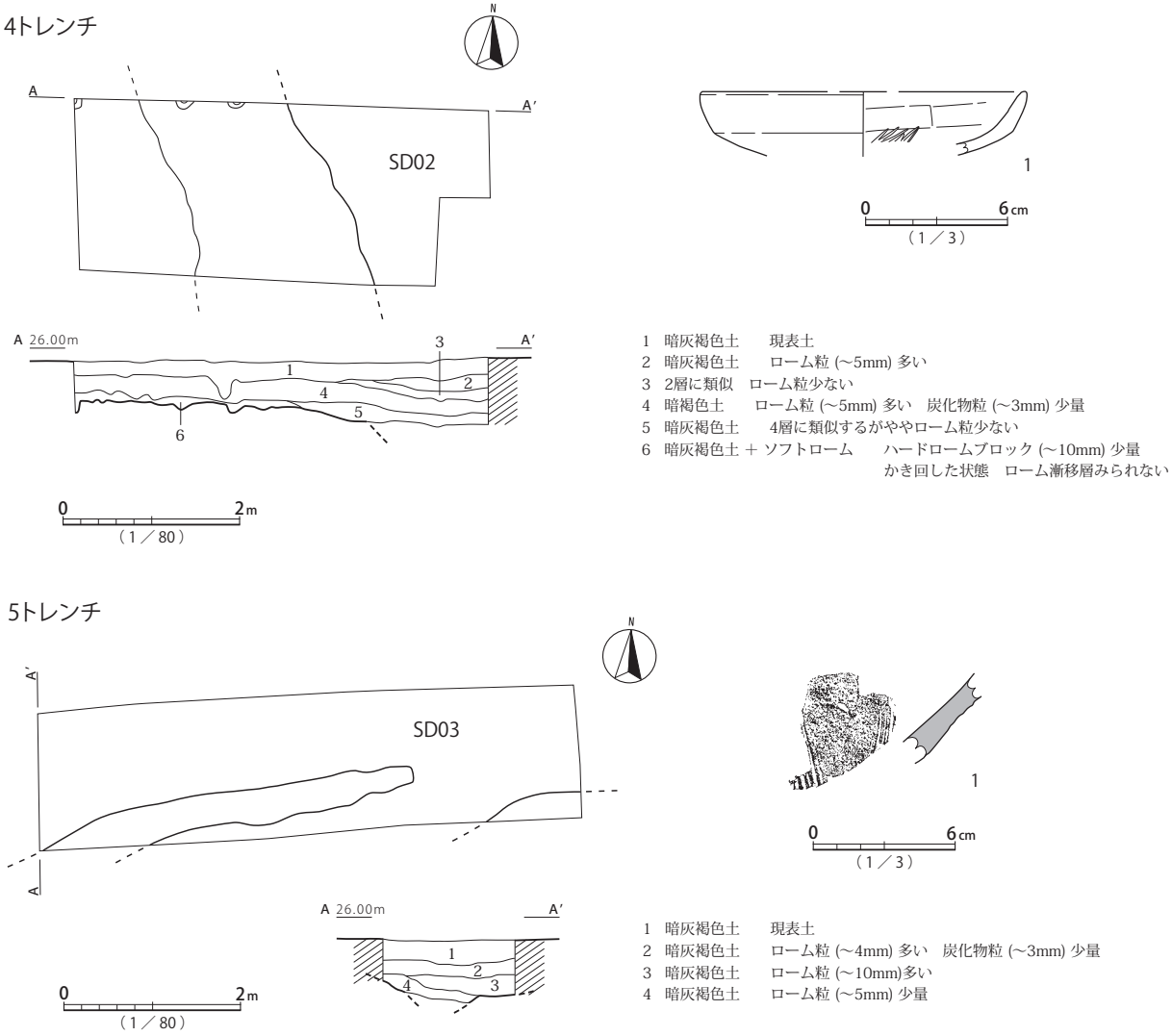
第10図　3トレンチ実測図・出土遺物

床面標高は 25.35 m前後である。ピットは 1 基のみ確認され、床面からの深さは 17.1 ㎝である。明確に SI05 に伴うと判断できる出土遺物はないが、第 10 図 1・2 などの弥生土器小片が多くみられたため、弥生時代後期の竪穴建物跡と考えておく。ピット 3 基は時期を推定する出土遺物もなく時期不明としておくが、土層的には中世もしくはそれ以前とみられる。

4 トレンチでは溝跡 (SD02) を確認した。北側の本調査範囲中央を走る SD02 溝跡の南側部分であろう。本調査範囲において確認したプランと合わせて計測した軸方位は N－14°－W である。このトレンチでは溝の東端は確認できなかったため、溝の上面幅は不明である。確認面からの深さは推定 106 ㎝前後であり、底面の標高は 24.29 m前後とみられる。溝の掘り込まれる肩からさらに西側はボコボコとした不整地状態であり、土層断面をみてもローム漸移層が観察されない。溝に向かってゆるやかに落ち込むこのエリアは、溝となんらかの関係がある部分とみられる。

5 トレンチでは SD02 と交差する軸向きの溝跡 (SD03) を確認した。溝は二手に分かれるように確認されたが、南側は極めて浅いため 1 本の溝跡の底面である可能性も考えられる。溝の上面幅は 1.2 m以上であり、確認面からの深さは 27 ～ 39 ㎝である。SD03 の軸方位は SD02 と同じく西向きで表記すると N－103°－W となる。つまり、89° 差で SD02 とほぼ直角に交差するものである。ただ、覆土はやや灰色味があり近世に近い印象がある。出土遺物もあまりなく、図示できたのは第 11 図 1 のすり鉢小片のみである。5 トレンチ東端からは、不整形のピットが確認された。SD02 の想定通過ルート西肩にも近く、覆土観察からも、関係する不整地面の一部と考えられる。

本調査区域の遺構と遺物　建物基礎の工事影響範囲における本調査では、竪穴建物跡 4 軒 (弥生後期 1・古墳後期 3)・溝跡 2 条 (中世 1・近世 1)・土坑 2 基 (中世) を調査した。SD02 溝跡の造成や維持に関係するとみられる広範な土の移動があったと想定され、ほぼ調査区域全面に及んでいるものと



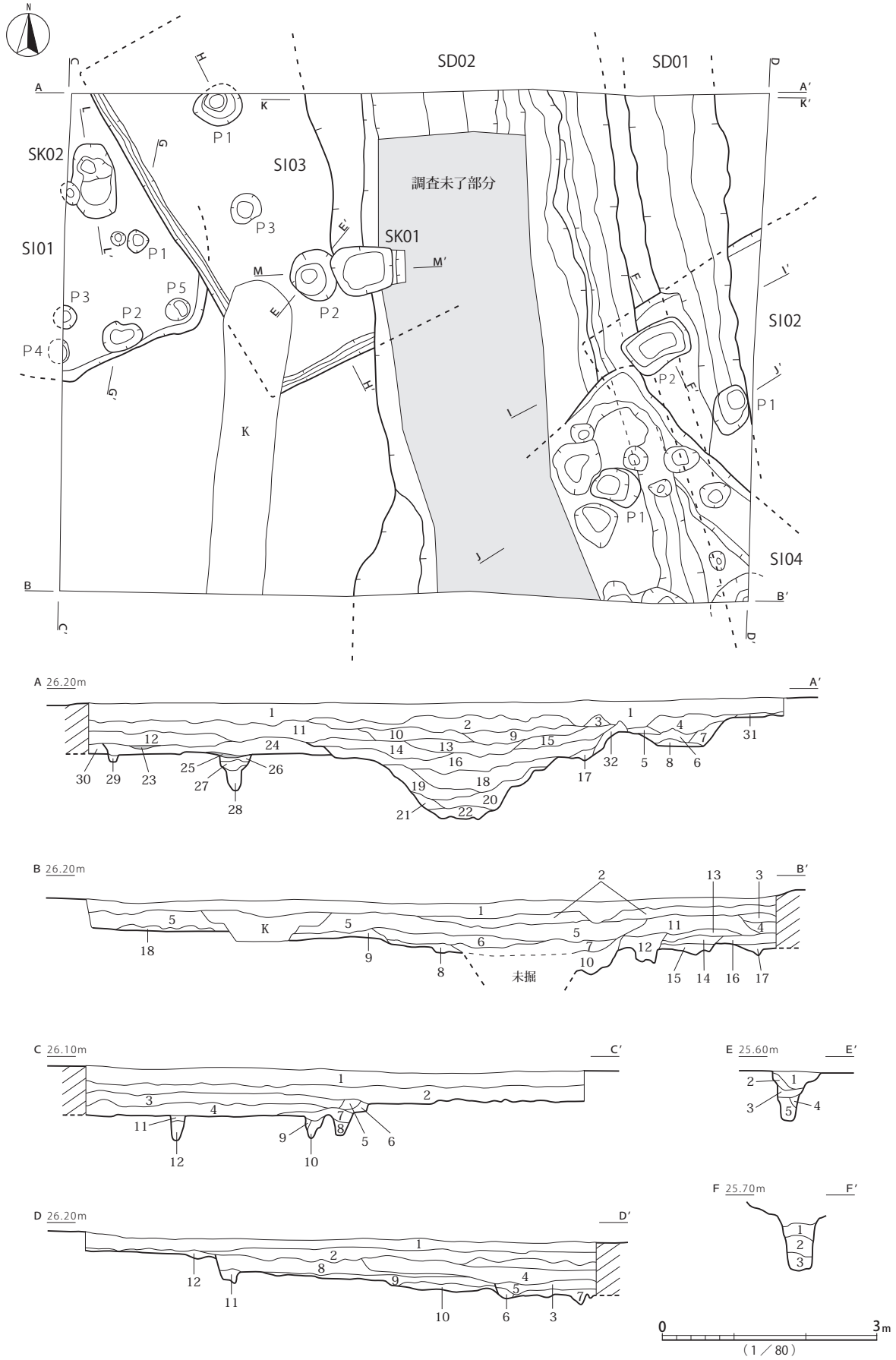
第11図　4･5トレンチ実測図･出土遺物

みられる。そのため、中世以前の各遺構の覆土は薄く、遺存状態は悪かった。

SI01 は調査区域西端にかかっており、部分的に SI03 と SK02 に壊されている。床面標高は 25.25 m前後。各ピットは、P1 が深さ 51.0 ㎝で柱穴とみられ、P2 は 22.4 ㎝で貯蔵穴、P3 は 29.5 ㎝で出入り口ピットと想定される。他に、P4(深さ 28.6 ㎝)、P5(同 14.3 ㎝) が検出された。

出土遺物は少なく、弥生土器片がみられた。第 13 図 2 は甕の頸部付近であり、特徴的なオオバコ類の穂を原体に用いた連続圧痕がみられる。第 14 図 3 は小形の鉢であり、文様はみられないがその形状や胎土から弥生時代後期の所産と判断される。2・3 ともに床面付近から出土した。

SI03 は東側半分を中世の SD02 溝跡に壊されており、竪穴の壁もほぼ確認できなかった。推定される規模は 5.6 × 5.3 mほどであり、主軸方位は N－32°－W である。北壁にカマドが設置されているものと想定されるが、A－A'土層断面には白色粘土は顕著にはみられなかった。その土層断面において、最大で22㎝ほどのSI03覆土とみられる層を確認した。床面標高は25.26 m前後であり、幅12～20㎝・深さ 0.7 ～ 15.4 ㎝の壁周溝が巡る。主柱穴のうち 2 基が検出されており、P1 は深さ 50.5 ㎝、P2 は 66.4 ㎝を測る。柱痕や柱アタリは観察されなかった。P3 の深さは 21.8 ㎝である。出土遺物は第 14 図 11 ～ 13 である。古墳時代後期 6 世紀後半～末頃のものとみられる。同時に調査した地楽寺地区



第12図　本調査区域実測図

A－A′

1 灰褐色土　ローム粒 (～3mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 多い
現表耕作土
2 暗灰褐色土　9層・10層より暗色　ローム粒 (～5mm) 多量
橙色粒・炭化物粒 (～3mm)・
白色粘土粒 (～8mm・付近のカマド構築材か) 少量
3 暗灰褐色土　ソフトローム混ざる　4・5層に類似　SD01に関係か
4 暗灰褐色土　黒灰褐色土とソフトロームが汚く混ざる
ローム粒 (～8mm) 少量
5 暗黄灰褐色土　ソフトロームに暗灰褐色土混ざる
6 暗灰褐色土　ソフトローム少量
富士宝永火山灰の小規模水平堆積が含まれるため
18世紀初頭には埋まりかけていたことがわかる
7 暗灰褐色土　4層に近い　ロームブロック (～15mm) やや多い
8 暗灰褐色土　混ざりない　SD01の底土
9 暗灰褐色土　ローム粒 (～8mm) 少量
10 暗灰褐色土　11層に類似するが混ざり少ない
11 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い
橙色粒 (～3mm)・炭化物粒少量
12 暗灰褐色土　11層に類似するがより暗色　混ざり多い
13 灰褐色土　他層より明色 (ソフトロームぼんやり含むためか)
ローム粒 (～3mm) 多い　炭化物粒少量　SD02覆土上層
しまり強いが路面ほど硬化していない
14 灰褐色土　13層に類似　混ざり少ない
15 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 少量　混ざり少ない
16 暗灰褐色土　ローム粒 (～8mm) 多い　ロームブロック (～15mm) 数点
17 暗灰褐色土　16層より暗色
18 暗灰褐色土　他層より暗色　ローム粒 (～10mm) 多い
19 暗灰褐色土　18層より明色　ローム粒 (～8mm) 多い (18層より少ない)
20 暗灰褐色土　ソフトロームぼんやり混ざる
ロームブロック (～30mm) 少量
21 暗灰褐色土　20層と似るが混ざり少なく暗色
22 暗灰褐色土　20・21層と類似
ソフトローム多くロームブロック (～50mm) 多い
SD02底土
23 24層 ＋ 焼土
24 暗褐色～黒褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い
ロームブロック (～15mm) 少量　SI03覆土
25 赤褐色土　焼土 ＋ 焼土ブロック (～15mm)
26 24層に類似　混ざり少ない
27 暗褐色土　ローム粒 (～8mm)・炭化物粒・焼土粒多い
28 暗褐色土　ロームブロック (～20mm) 多い　SI03柱穴P1覆土下層
29 24層 ＋ ロームブロック・ソフトローム
30 暗褐色土　ローム粒～ブロック (～10mm)・ソフトローム混ざる
SI01覆土
31 暗灰褐色土　混ざり少ない
32 黄灰褐色土　ソフトロームと灰褐色土混ざる

B－B′

1 灰褐色土　ローム粒 (～3mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 多い
現表耕作土
2 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 少量
3 暗灰褐色土　黒灰褐色土とソフトロームが汚く混ざる
ローム粒 (～8mm) 少量　SD01覆土上層
4 暗灰褐色土　ソフトローム少量　SD01覆土下層
5 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い　橙色粒 (～3mm)・炭化物粒少量
2層と類似　調査区全体に広がる土層
6 暗灰褐色土　5層と類似するがやや暗色
7 暗灰褐色土　6層より暗色　ローム粒少量　混ざり少ない
8 暗灰褐色土　ロームブロック (～20mm)多い　ソフトローム混ざる
9 暗灰褐色土　8層と類似　ローム汚く混ざる
10 黒褐色土　ローム粒 (～5mm) 少量　混ざり少ない
11 暗褐色土　5～10層より暗色　ローム粒 (～10mm) 多い
橙色粒 (～8mm)・炭化物粒 (～5mm) 少量
SD02よりは古いが中世か
12 黒褐色土　ローム粒～ブロック (～30mm) 多い　橙色粒 (～2mm) 少量
SD02東肩に掘られた穴か
13 暗褐色土　ローム粒 (～3mm) 少量　橙色粒 (焼土か) 少量
14 暗褐色土　13層よりやや明色　13層 ＋ ソフトローム
15 黒褐色土　ソフトローム・ローム粒 (～10mm) 多い　しまり強い
16 暗褐色土　ローム粒 (～10mm) 多い　橙色粒 (～5mm) 少量
SI04床面直上土
17 黄褐色土　ロームブロック (～20mm) 多量　SI04床面及び床下充填土
18 黄褐色土　ソフトローム　5層が入り込む

C－C′

1 灰褐色土　ローム粒 (～3mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 多い
現表耕作土
2 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い　橙色粒 (～3mm)・炭化物粒少量
3 暗灰褐色土　2層に類似するがより暗色　混ざり多い
4 暗褐色土　ローム粒～ブロック (～10mm)・ソフトローム混ざる
SI01覆土
5 暗灰褐色土　3層 ＋ 焼土
6 暗灰褐色土　ソフトローム混ざる
7 暗灰褐色土　混ざり少ない　床面直上土
8 暗灰褐色土　ロームブロック (～20mm) 多い
9 暗褐色土　ソフトローム多く混ざる
10 暗灰褐色土　ローム粒 (～8mm) 少量　混ざり少ない
11 暗褐色土 ＋ ロームブロック　SI01床面
12 暗褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い　床下ピット

D－D′

1 灰褐色土　ローム粒 (～3mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 多い
現表耕作土
2 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多量　橙色粒・炭化物粒 (～3mm) 少量
3 暗灰褐色土　黒灰褐色土とソフトロームが汚く混ざる
ローム粒 (～8mm) 少量　SD01覆土上層
4 暗灰褐色土　ソフトローム少量　SD01覆土下層
5 暗褐色土　ローム粒 (～10mm) 多い　橙色粒 (～5mm) 少量
SI04床面直上土
6 暗褐色土　5層 ＋ ロームブロック (～15mm) 多い　SI04壁周溝覆土
7 黄褐色土　ロームブロック (～20mm) 多量　SI04床面及び床下充填土
8 暗褐色土　ローム粒 (～5mm) 多量　橙色粒 (～3mm) 多め　SI02覆土
9 黄褐色土　ロームブロック ＋ ソフトローム　SI04の硬化した貼り床
10 暗褐色土　ローム粒～ブロック (～15mm) 多い　SI04床下充填土
11 暗褐色土　ローム粒 (～3mm) 少量　混ざり少ない　SI02壁周溝覆土
12 黄褐色土　ソフトロームに暗褐色土が入り込む

E－E′

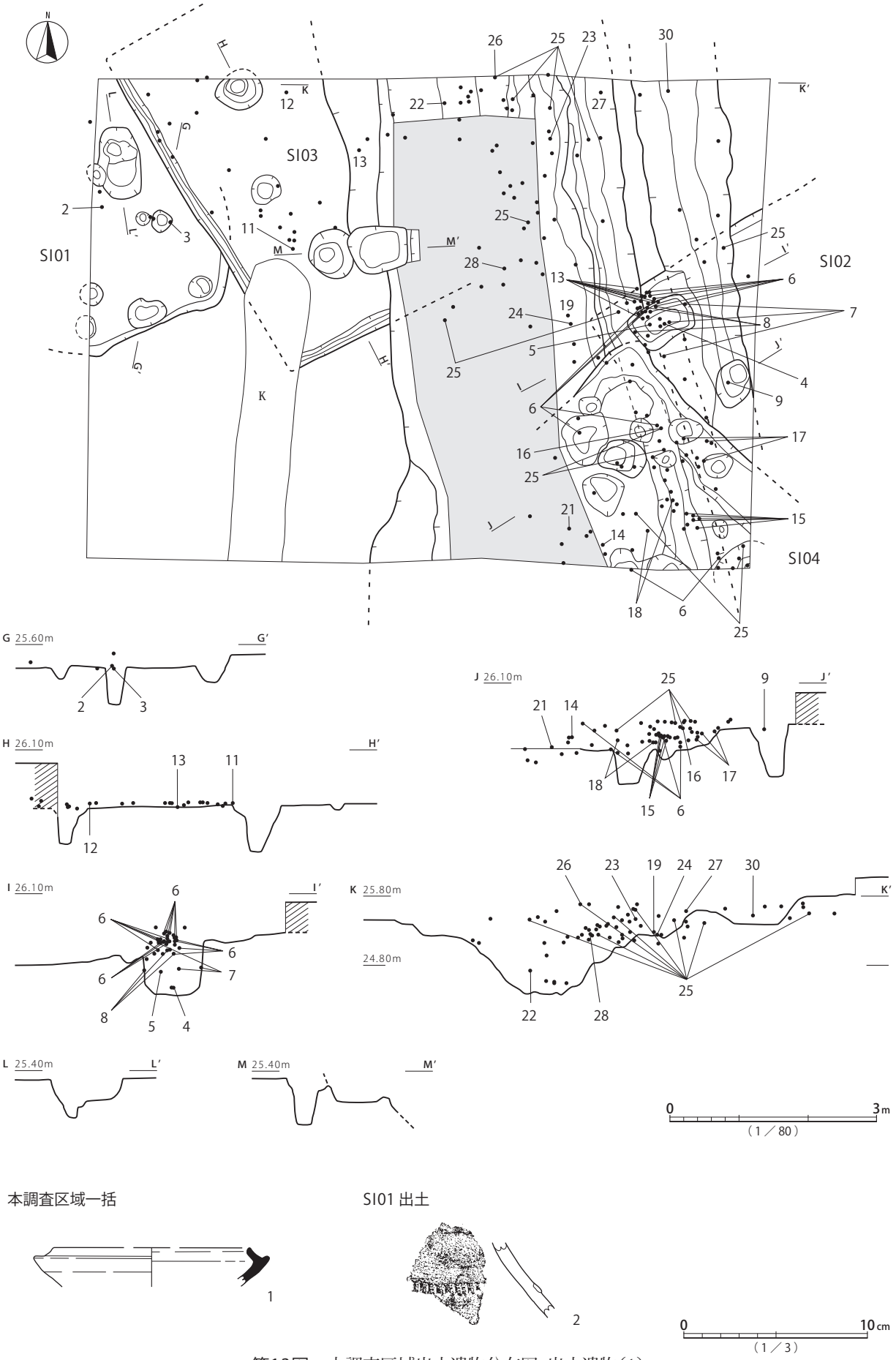
1 暗灰褐色土　ローム粒 (～5mm) 多い　柱痕みられない
2 暗灰褐色土　ローム粒～ブロック (～20mm) 多量
3 暗灰褐色土　混ざり少ない
4 暗灰褐色土　ロームブロック (～15mm) 数点
5 暗灰褐色土　ロームブロック (～15mm) 少量　混ざり少ない

F－F′

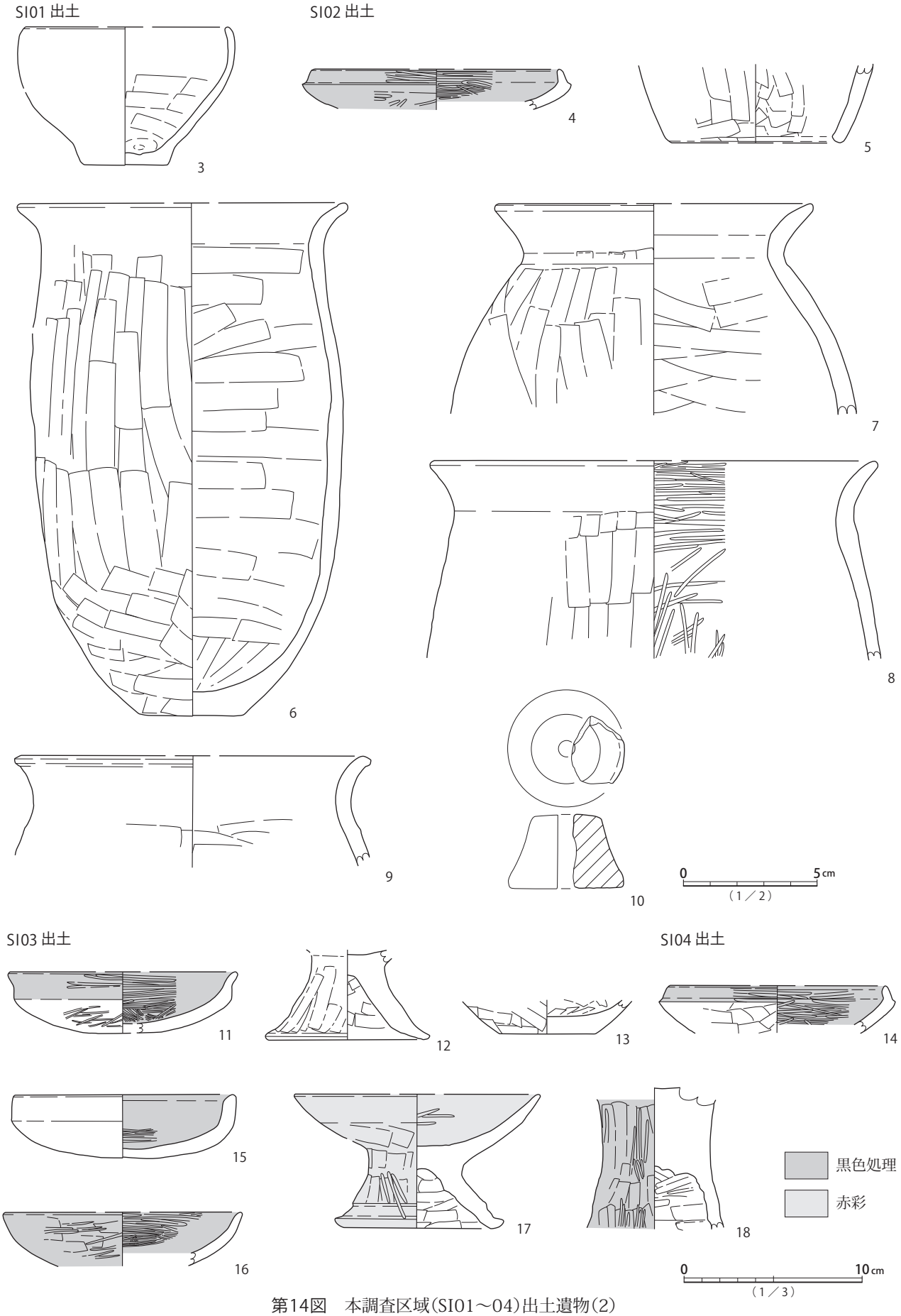
1 暗褐色土　ローム粒 (～5mm) 多量　橙色粒・
白色粘土粒 (～3mm) 多い
2 暗褐色土　ローム粒（～8mm）・白色粘土粒（～8mm）多い
橙色粒（～8mm・焼土）少量
3 暗褐色土　上層より暗色　ロームブロック (～15mm)・
白色粘土粒 (～10mm) 多い

本調査範囲調査風景　南東から

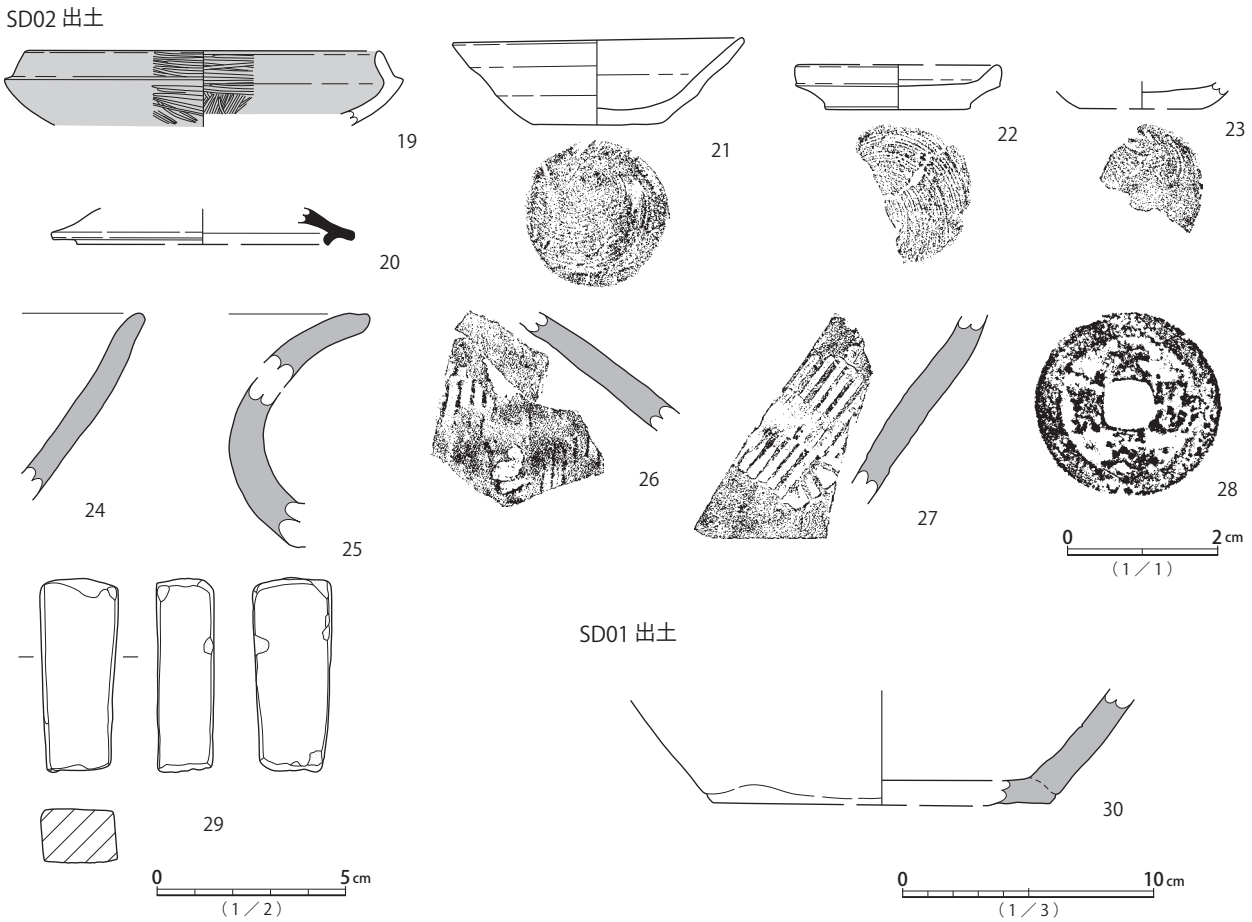
本調査範囲北壁土層断面　南東から



第13図　本調査区域出土遺物分布図、出土遺物(1)



第14図　本調査区域（SI01～04）出土遺物（2）



第15図　本調査区域(SD01・02)出土遺物(3)

第 2 地点の SI02 と主軸方位がほぼ同じであり、遺物の時期も近いものとみられる。

SI02 と SI04 は、覆土の上部は SD02 と SD01 の影響を受けており、確認面や覆土の掘り下げ時には 2 軒のプランが判別できなかった。新旧関係も不明である。SI02 にはしっかりした貯蔵穴 (P2) があり、その付近に遺物が集中していた。調査区域北東隅にはソフトロームが高めに残っており、その部分にかかるわずかな壁が残存している。その壁高は 16.7 ㎝であり、床面標高は 25.50 m前後である。

柱穴 P1 は、上部を SD01 に壊されているが、床面からの深さ 77.5 ㎝である。貯蔵穴 P2 は、上面規模 90 × 59 ㎝、深さは 84.4 ㎝である。P2 覆土には第 14 図 4 ～ 8 の遺物が含まれていた。

SI04 の床面は判別できず、床下の充填土を掘りぬいた掘り形プランからみて、SI04 の存在を把握した。第 12 図の SI04 部分に示したピット群の小さいものは床下の掘り形である。P1 はやや方形の平面形をもつ柱穴で、深さは 52.7cm である。P1 の西側の 2 つのピット状の穴は、その覆土観察から、SD02 の肩に分布する不整地面の一部とみられる。出土遺物については、垂直分布 (J－J’) にみられるように、中世の遺物 (第 15 図 21・25 など) がかなり下層まで入りこんでおり、古墳時代後期の遺物についても、原位置であるとは断定できない。

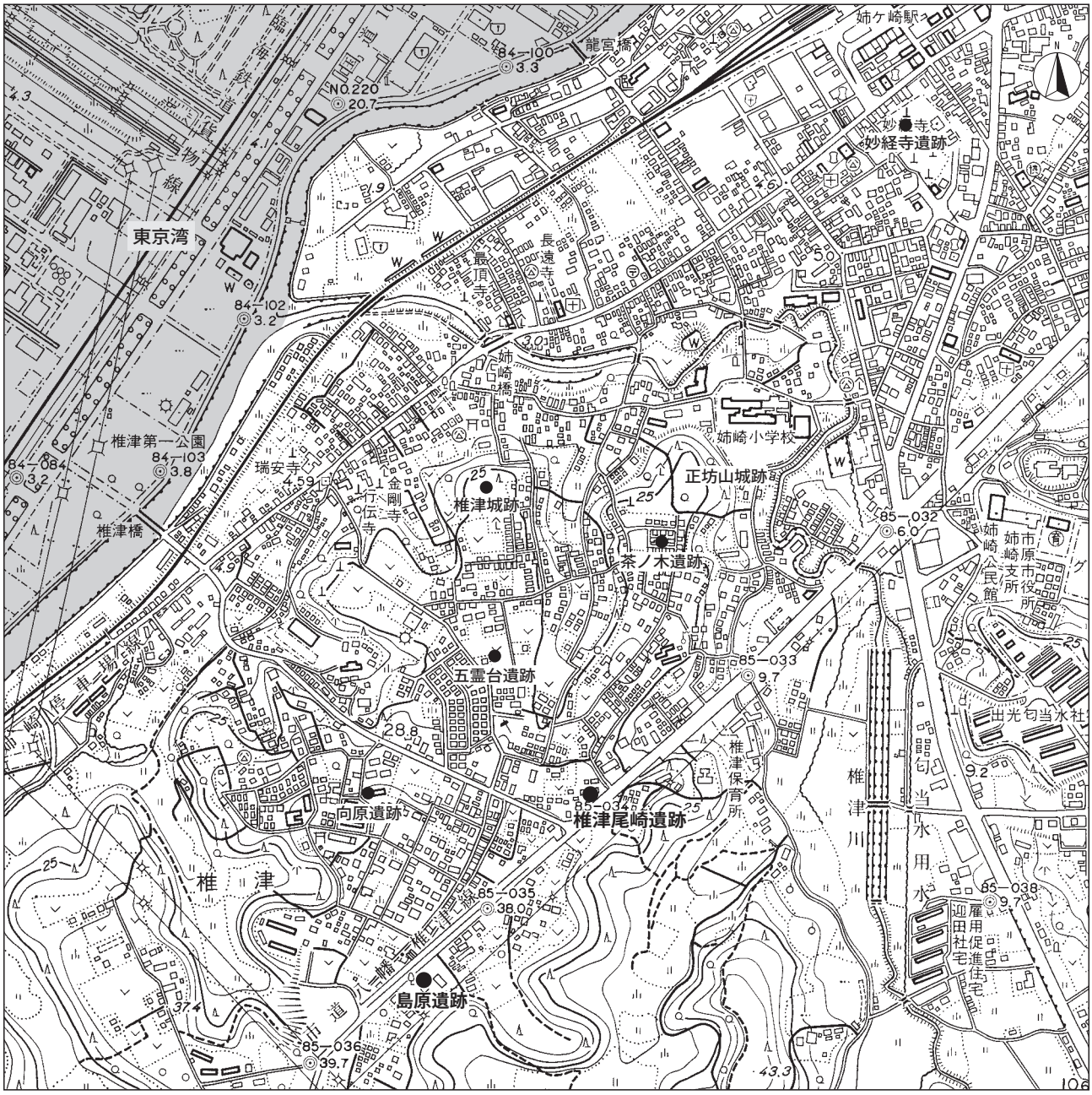
SD02 は、確認面上面幅 4.13 ～ 5.1 mを測る。前述のように軸方位は N－14°－W の振れを有する。サブトレンチで確認した底面の一部は、幅 0.55 mの平坦面であり、底面標高は 24.375 m、東肩部分からの深さは最大 1.19 mとなる。4 トレンチの底面は 24.3 m程度であり、この 2 カ所の数値だけみると、12 mの距離で約 8cm の比高差は誤差の範囲と思われ、傾斜をもたない溝と想定される。

SD02 溝跡中央部分の覆土の大半は残存しているため、今後の取り扱いに留意する必要がある。

4　椎津尾崎遺跡 第2地点　（遺構：図版３／出土遺物：図版８・11）

遺跡の位置と周辺の調査状況　遺跡は、椎津の海岸線より南東に直線距離で 0.8km ほど入った洪積台地上南端部に位置している。地形的には、樹枝状に北へ延びる数条の開析谷の谷頭部にあたっており、扇状に広がる台地の要に立地している。水系は、不入斗あたりを水源とする椎津川水系である。調査地点の標高は、30 m前後。南西に隣接して広がる椎津向原遺跡に向かって、緩やかな上り傾斜となっている。広義には、戦国期の中世城跡（椎津城跡）の城域南端に接続しており、望陀と市原とを結ぶ、街道沿いにあたっていたものと考えられている。

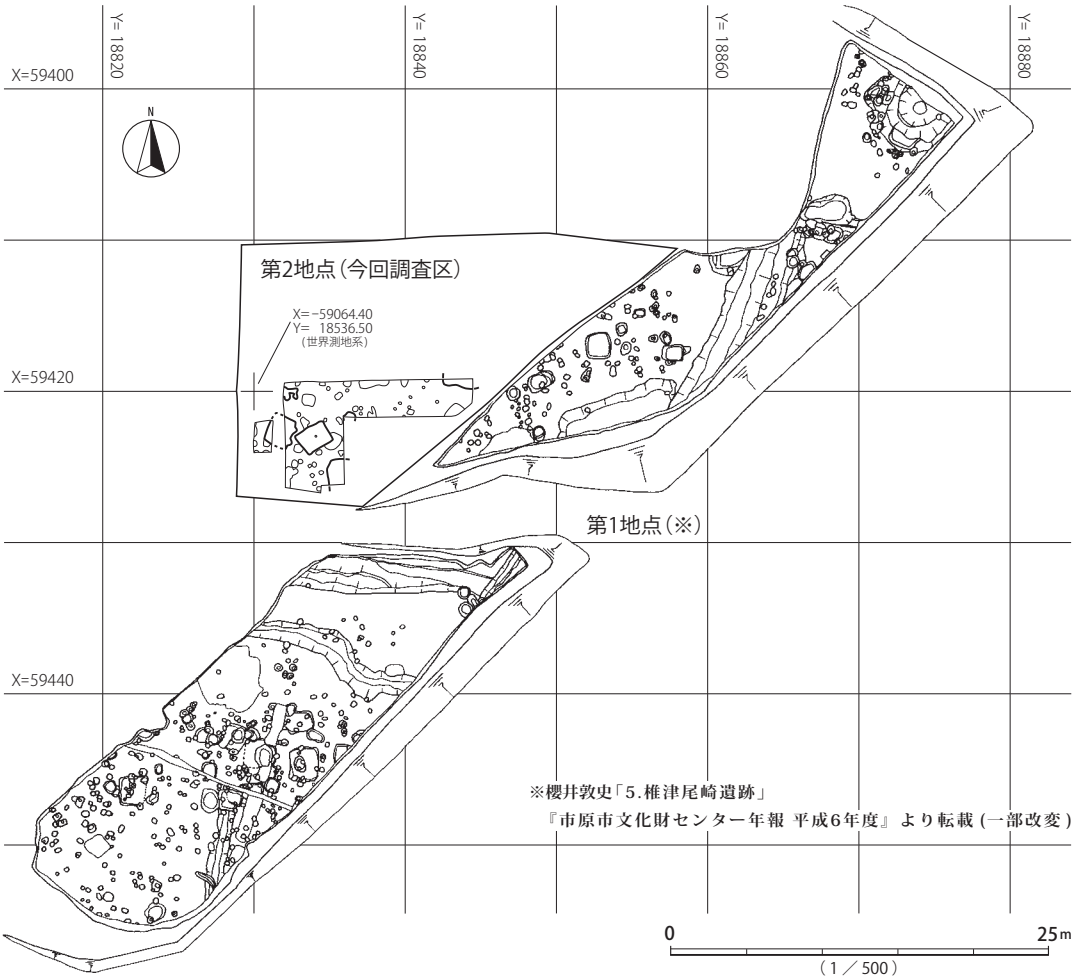
椎津尾崎遺跡では、今回の調査を含めて、これまでに二度の発掘調査が行われている。一度目は、



（市原市地形図 1/10000、平成７年より）

0　500m
（1／10,000）

第16図　椎津尾崎遺跡・島原遺跡周辺地形図



第17図　椎津尾崎遺跡第2地点全体図

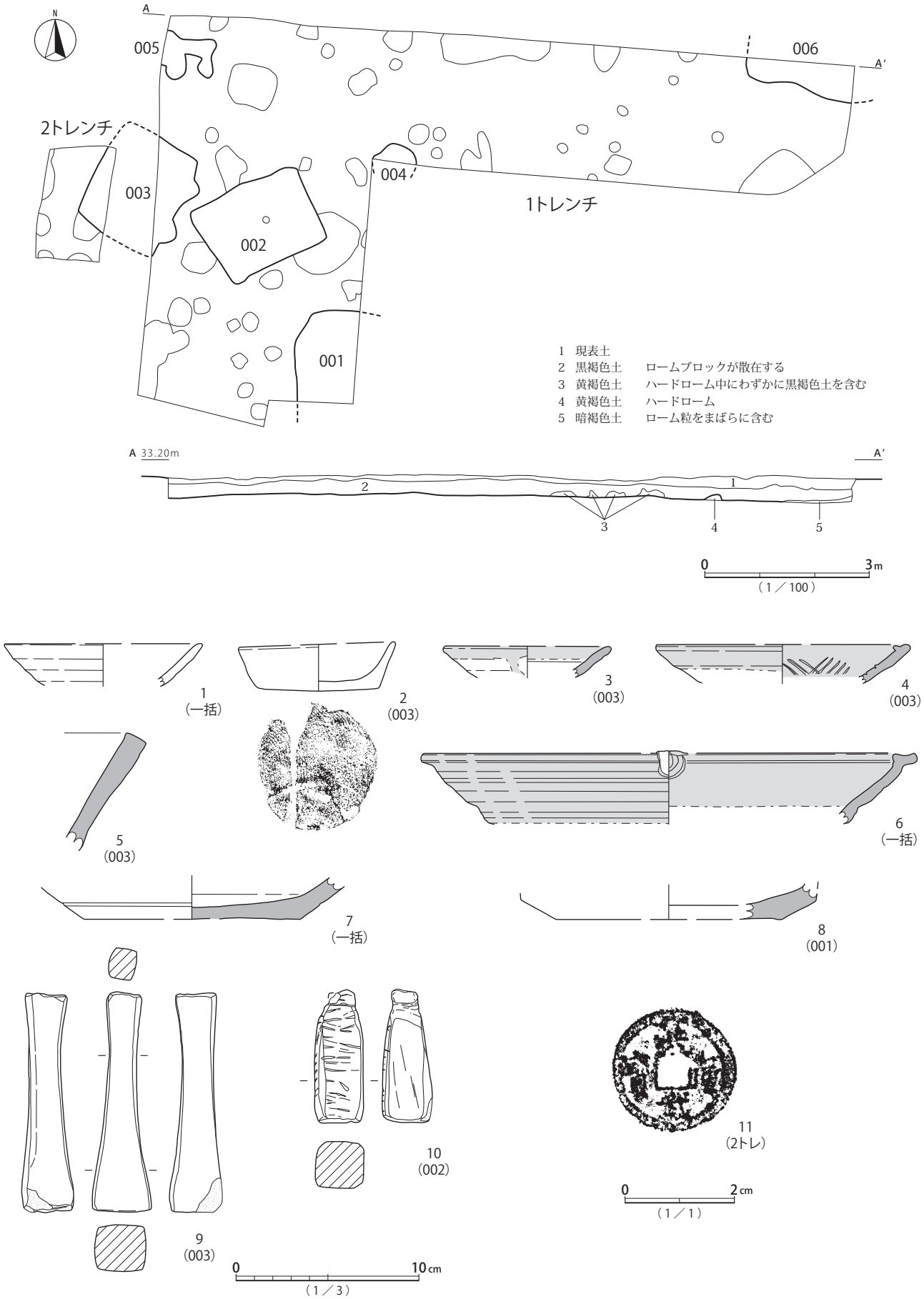
平成 6 年 7 月 1 日～ 10 月 6 日に実施した八幡椎津線建設工事に伴う埋蔵文化財調査で、1,000 ㎡の本調査を行っている。本報告では、この地点を「第 1 地点」と呼称したい。

第 1 地点の調査では、平安時代の井戸状遺構 1 基、中世の地下式土壙 2 基、方形竪穴遺構 7 基、土坑 24 基、溝状遺構 4 条のほか、多数のピットが検出されている。また、出土遺物には、瀬戸美濃系陶器 24 点、常滑製品 20 点、中国輸入磁器 2 点、南伊勢系土器 1 点などが見られ、特に、方形竪穴状遺構の床面から 13 世紀前葉の同安窯系青磁皿片が出土している。当時の調査成果では、方形竪穴状遺構がピット群に先行して作られていることが確認されている。

発見された遺構と遺物　今回調査した第 2 地点は、第 1 地点のほぼ中央において西側に隣接する部分である。第 1 地点においては方形竪穴状遺構とピット群が集中していたため、第 2 地点でも同様の成果が想定された（第 17 図参照）。

確認調査の結果は、ほぼ想定どおりであり、方形竪穴状遺構 4 基と不整形土壙 2 基およびピット群の存在が明らかとなった。この内の方形竪穴状遺構については、第 1 地点に比較して集中化の傾向が窺われている。遺構の主軸方位には、第 1 地点で検出された南北方位の遺構に加えて、002 遺構・003 遺構のように東に大きく振れているものも認められている。また、ピット群との切りあい関係では、方形竪穴状遺構が先行する傾向を踏襲していることが確認されている。

中世陶磁器のほか、第 18 図 9・10 の砥石や 11 の古銭（「洪武通宝」）が出土している。



第18図　1・2トレンチ実測図・出土遺物

5　島原遺跡　（遺構：図版３・４　／出土遺物：図版 11）

遺跡の位置　JR 内房線姉ヶ崎駅から南に 1.7km 下った標高 40m 前後の舌状台地最奥部に位置し、東西方向から谷津が入り込む舌状台地の最狭地点が今回の調査地点である（第 16 図参照）。

調査概要　個人住宅建設に先行する確認・本調査で、市道八幡椎津線から入り込む進入路削平範囲と浄化槽設置範囲については本調査の対象範囲とし、それ以外の範囲については確認調査を実施した。

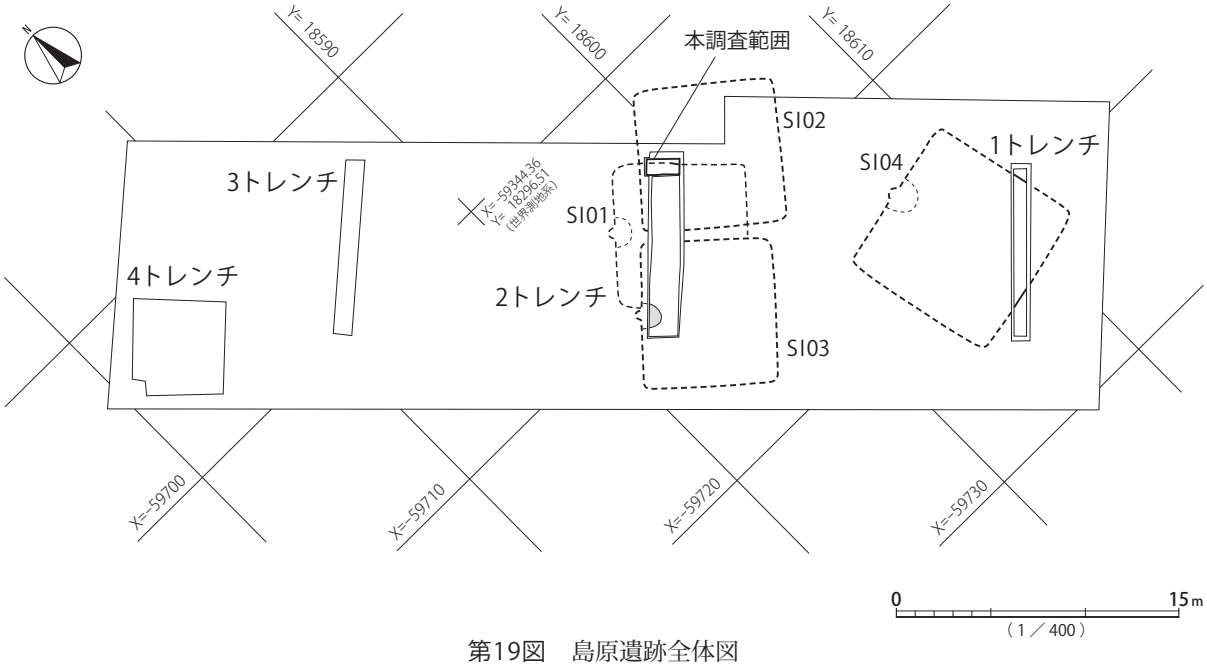
調査対象面積は 706 ㎡であり、確認調査対象面積は 70 ㎡、浄化槽設置範囲と進入路削平範囲の本調査対象面積は 27 ㎡である。そのため対象地に対し東西方向に 4 本のトレンチを設定して調査を実施し、この内西側の 4 トレンチは、進入路削平範囲に相当する。

結果として、３・４トレンチからは何の遺構も検出されなかったことから、進入路部分の本調査の実施は行わなかった。１・２トレンチからは７～８世紀に亘る竪穴住居跡が 4 軒検出されたことから、浄化槽設置範囲に対して本調査を実施した。

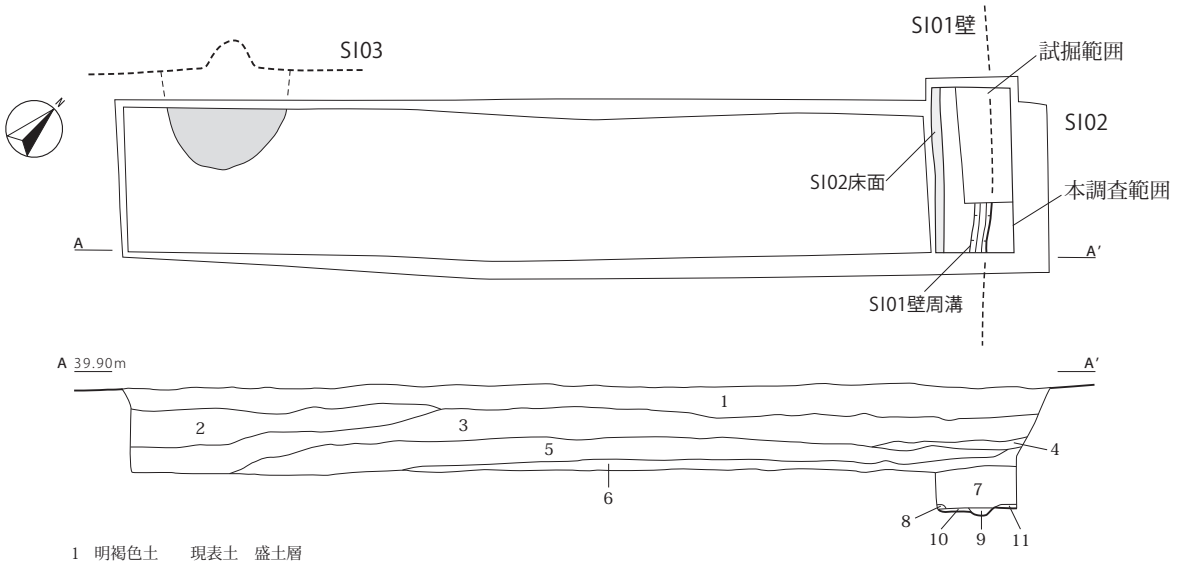
遺構と遺物　１トレンチからは 1 軒の大形竪穴住居跡を検出した。図化できた遺物は 1 点であるが、遺構規模から考えて古墳時代後期の所産と考えられる。

２トレンチからは少なくとも３軒の竪穴住居跡を検出した。SI03 は、カマドの検出により第 19 図全体図および第 20 図に示した遺構プランのような状況と想定される。このカマド付近より第 20 図３の土師器甕の口縁部をはじめとする多くの遺物が検出されており、８世紀後半を主体とする竪穴住居跡とおもわれる。

浄化槽設置範囲の本調査範囲の大半は、試掘のトレンチによって既に削平されていた。土層断面と床面や壁周溝の検出から、少なくとも２軒の竪穴住居跡が想定される。SI01 と SI02 は重複関係にあり、SI02 の方が新しいものとみられる。この本調査範囲から出土した遺物の図化は第 20 図 2 と 14 の 2 点であり、14 は試掘時に検出された敲石・くぼみ石である。

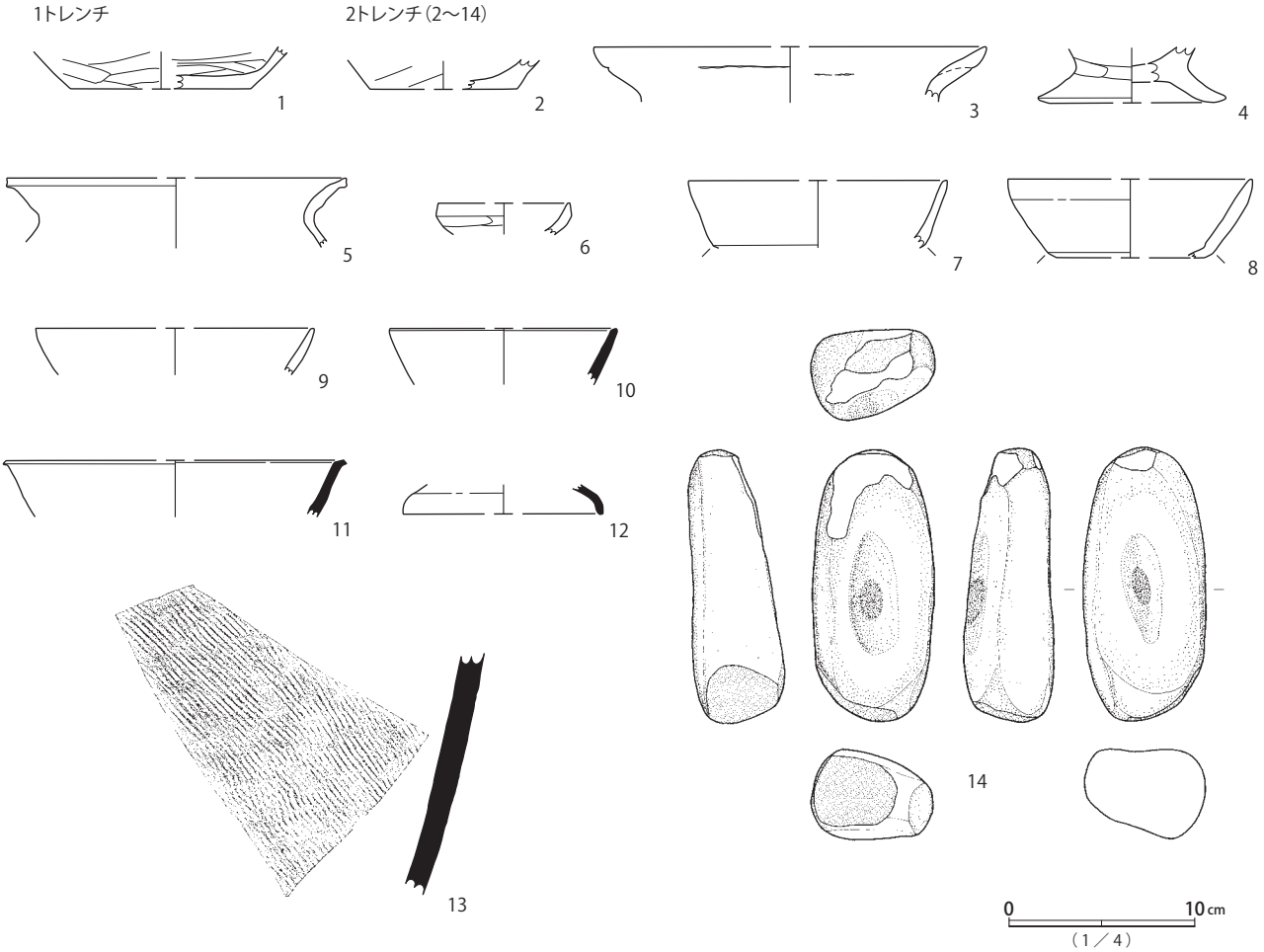


第19図　島原遺跡全体図



1　明褐色土　　現表土　盛土層
2　暗褐色土　　ローム粒霜降り状に含む　ややしまる
3　黒褐色土　　有機質土主体　ローム粒 (～5mm) 含む　しまり強い
4　黒褐色土　　有機質土主体　混ざり少ない
5　暗褐色土　　有機質土中に焼土粒・炭化物粒・粘土粒含む　しまりあり
6　暗褐色土　　５層よりやや明色　焼土粒・炭化物粒含む　しまりやや弱い　遺物多量に含む
7　暗褐色土　　SI02覆土　有機質土層中に焼土粒・炭化物粒・粘土粒・ローム粒含む　しまりあり
8　黄褐色土　　SI02貼り床　ローム粒～ブロック多量　硬化
9　暗褐色土　　SI01壁周溝覆土　ローム粒～ブロック含む
10　暗褐色土　　SI01床面直上土層　ローム粒～ブロック (～10mm) 含む　しまり強い
11　明褐色土　　ソフトローム層

0　3m
（1／80）



第20図　2トレンチ実測図、1・2トレンチ出土遺物

6　棗塚遺跡 第５次　（遺構：図版４／出土遺物：図版８・11・12）

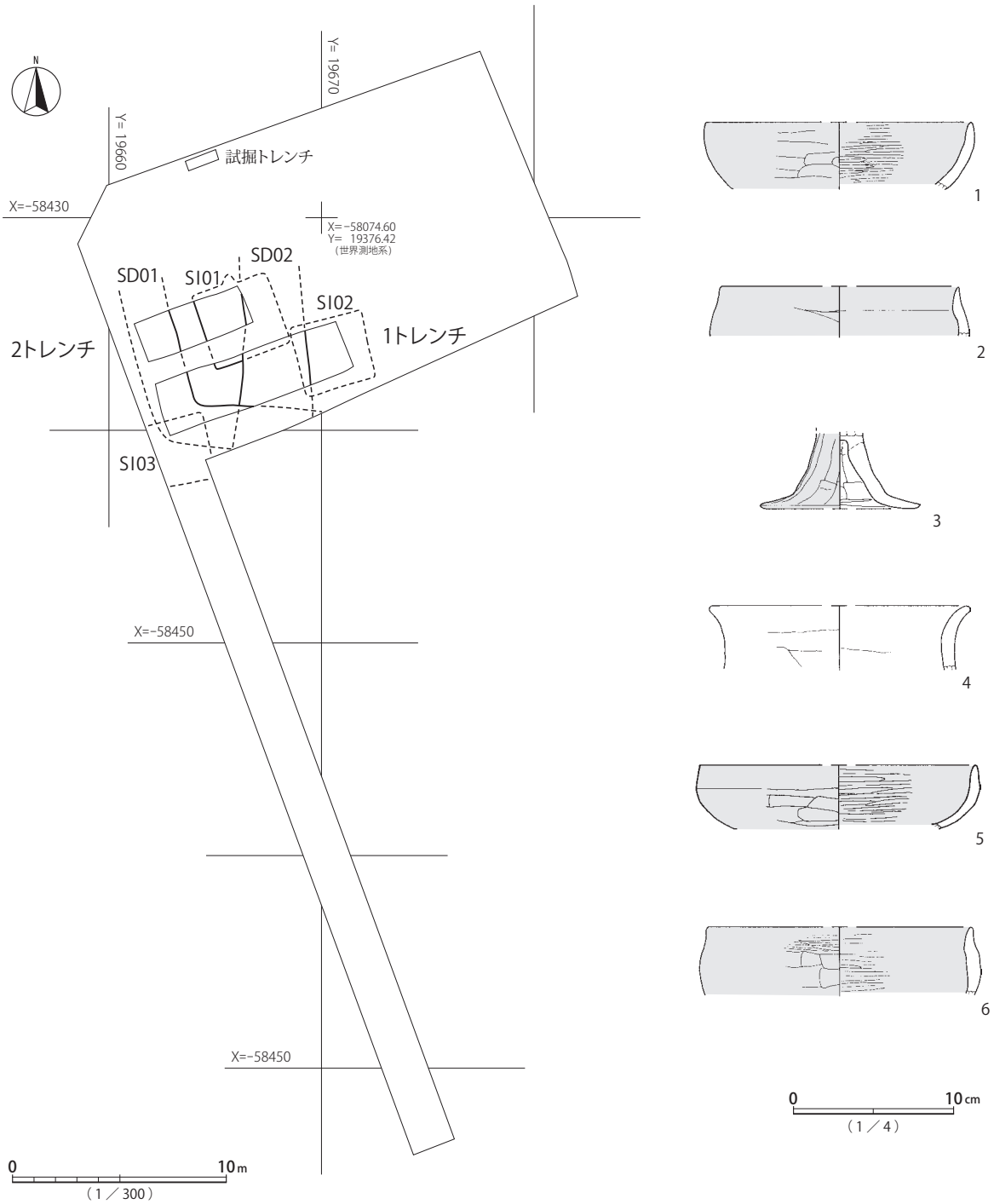
遺跡の位置と周辺の遺跡　遺跡は東京湾に面した標高６～７ｍを測る砂堆列上に立地する。調査区の北東側では、平成８・９年度に都市計画道路建設、平成17・18年度に個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、室町時代後半期を主体とする貝塚・墓を含む土坑群・道路跡・溝跡・鍛造剥片などが検出されている。

遺跡周辺は「上海上国造」とその前身豪族の奥津城と捉えられている姉崎古墳群の範囲にあり、南側台地上には前期の姉崎天神山古墳（県指定）・釈迦山古墳、後期の山王山古墳（消滅）・原１号墳（消滅）・鶴窪古墳（市指定）、東側砂堆列上には中期の姉崎二子塚古墳（県指定）といった大型前方後円墳が所在する。また近年になって、姉崎上野合遺跡・妙経寺遺跡・山新遺跡などの砂堆上の遺跡に、墳丘部が失われた古墳が多数存在することが明らかになってきている。

調査概要　個人住宅建設に伴い、対象面積331.35㎡のうち33.0㎡について確認調査を行った。調

（市原市基本図より）

第21図　棗塚遺跡周辺地形図

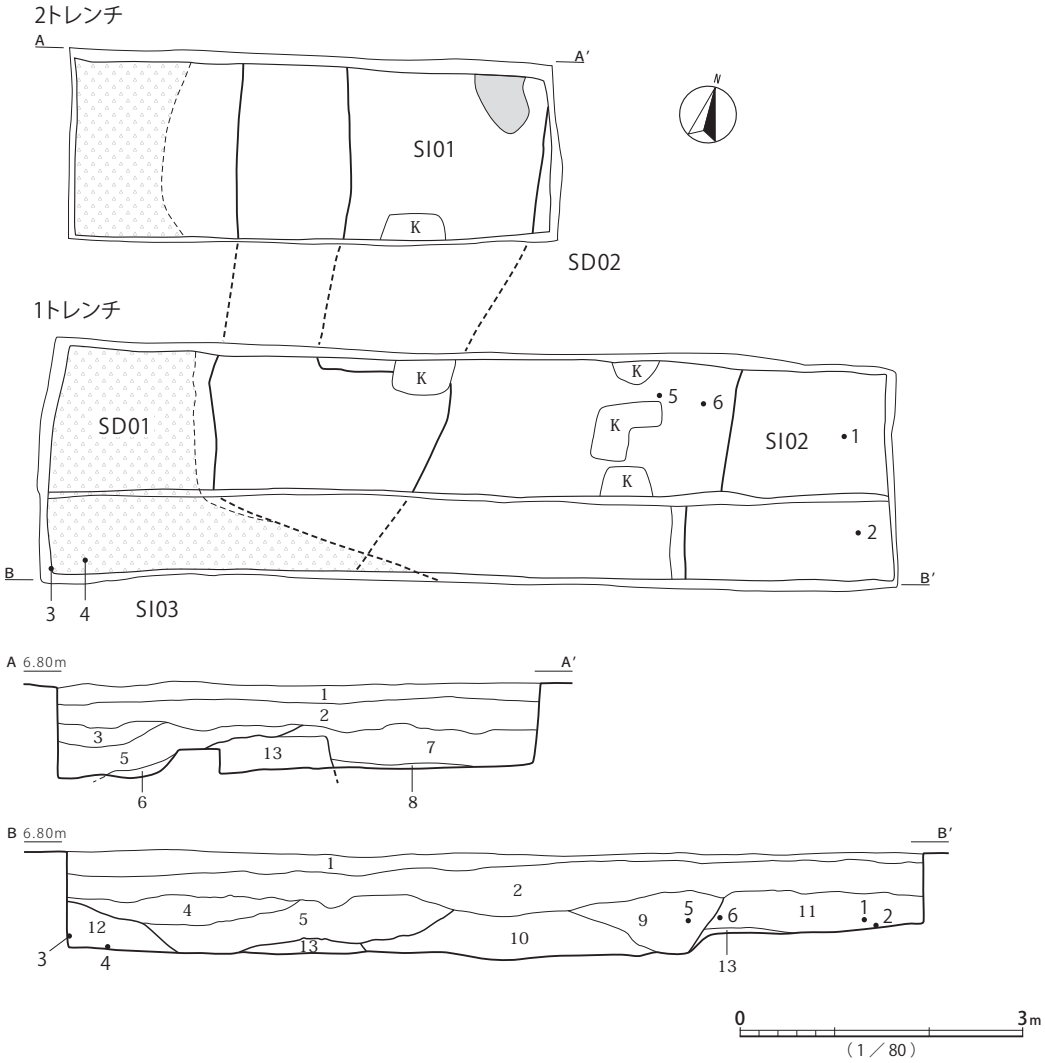


第22図　棗塚遺跡第5次全体図、1トレンチ出土遺物

査は、9 m× 2.5 mと 5.25 m× 2 mの確認トレンチ各 1 本を、住宅基礎部分を避けて設定して行った。なお、掘削時に湧水が認められたため、確認トレンチの長軸一辺に排水用のサブトレンチを設け、水中ポンプによる吸水を行いつつ調査を実施した。

調査区には、地表面全体に約 20cm の山砂が敷かれ、この下に約 30cm の建築廃材を含む盛土層が確認された。これらは既存住宅を撤去した際の撹乱・整地層と考えられる。遺構確認面は、やや赤みを帯びた粗い褐色砂層で、現地表面下約 60cm から検出された。

調査の結果、古墳時代後期竪穴建物跡 3 軒（SI01~03）、中近世と思われる溝跡 2 条（SD01・02）



1	10YR6/4	にぶい黄橙色砂	山砂を主体とする。盛土。
2	10YR3/3	暗褐色土	やや粗い焼土粒・炭化粒・ハードローム粒を少量含み、上層に建設廃材が混じる。砂質を帯び、しまり強い。盛土。
3	—	—	大小ハマグリ・シオフキを主体とする純貝層。SD01覆土。
4	7.5YR3/2	黒褐色土	破砕貝を含む混貝土層。SD01覆土。
5	7.5YR3/1	黒褐色土	ハードローム粒・粗い炭化粒をわずかに含む。やや砂質を帯びる。SD01覆土。
6	10YR2/3	黒褐色土	褐色砂を斑上に少量含み、炭化粒もわずかに混じる。SD01覆土。
7	7.5YR2/2	黒褐色土	炭化粒・褐色砂をわずかに含む。SI01覆土。
8	10YR3/3	暗褐色土	褐色砂を斑上に少量含む。SI01覆土。
9	10YR2/3	黒褐色土	褐色砂をわずかに含み、ハードローム粒もわずかに混じる。SD02覆土。
10	10YR3/3	暗褐色土	褐色砂を少量含み、ハードローム粒・炭化粒もごくわずかに混じる。SD02覆土。
11	10YR2/2	黒褐色土	褐色砂をごくわずかに含む。SI02覆土。
12	10YR2/1	黒色土	炭化粒を少量含む。砂質弱く、粘性あり。SI03覆土。
13	10YR4/4	褐色砂	やや赤みを帯びる砂層。地山。

第23図　1･2トレンチ実測図

が検出された。

遺構と遺物　SI01 は 2 トレンチ東側を中心に位置する。2 トレンチ北壁寄りにはカマドの構築材と考えられる砂質粘土と焼土がわずかに分布し、1 トレンチ北壁寄りからは方形を呈する遺構コーナー部が検出された。主軸方位は N－11°－W 程度を測るものと思われる。図示にいたる遺物はないが、土師器の細片が出土している。

SI02 は 1 トレンチ東側、SI03 は 1 トレンチ西側から検出された。SI02 は SD02、SI03 は SD01 に大きく切られ、限られた範囲での検出のため、詳細は不明である。地山の褐色砂層を掘り込み、覆土

Tab.1　貝層サンプル内容物集計

遺構	採取法	時期	総乾重量（g）	フルイ水洗後残留物重量　（g）				土壌重量(g)	混土率（%）
				10㎜	4㎜	1㎜	計		
SD01	一括	中近世？	58,900	15,924	6,268	2,619	24,811	34,089	57.9%
			分析対象	3,035	1,255	609	4,899		
			比率	19.1%	20.0%	23.3%	19.7%		

Tab.2　貝類出土量集計

種　名		数量	個体数	比率
イボキサゴ		271	271	34.3%
マルタニシ		4	4	0.5%
ウミニナ科		3	3	0.4%
ツメタガイ		3	3	0.4%
アラムシロガイ		2	2	0.3%
サルボウガイ	L	1	3	0.4%
	R	3		
シオフキガイ	L	246	246	31.2%
	R	227		
マテガイ	L	1	2	0.3%
	R	2		
カガミガイ	L	19	19	2.4%
	R	9		
アサリ	L	39	39	4.9%
	R	31		
ハマグリ	L	197	197	25.0%
	R	181		
		合計	789	100.0%

Tab.3　主要貝計測値集計

ハマグリ（左殻）

楯面長(mm)	個体数
−7.0	1
− 8.0	0
− 9.0	1
− 10.0	5
− 11.0	9
− 12.0	8
− 13.0	20
− 14.0	14
− 15.0	10
− 16.0	10
− 17.0	5
− 18.0	9
− 19.0	4
− 20.0	3
− 21.0	4
− 22.0	2
− 23.0	1
− 24.0	0
− 25.0	1
試料数	107
平均	13.82
標準偏差	3.33

推定殻長(mm)	個体数
− 20.0	0
− 25.0	1
− 30.0	5
− 35.0	12
− 40.0	24
− 45.0	22
− 50.0	15
− 55.0	13
− 60.0	7
− 65.0	4
− 70.0	3
− 75.0	0
− 80.0	1
− 85.0	0
試料数	107
平均	45.54
標準偏差	10.15

シオフキガイ（左殻）

殻長（mm）	個体数
− 20.0	0
− 25.0	0
− 30.0	4
− 35.0	11
− 40.0	27
− 45.0	24
− 50.0	5
− 55.0	1
− 60.0	0
− 65.0	0
− 70.0	0
− 75.0	0
− 80.0	0
− 85.0	0
試料数	72
平均	39.03
標準偏差	5.03

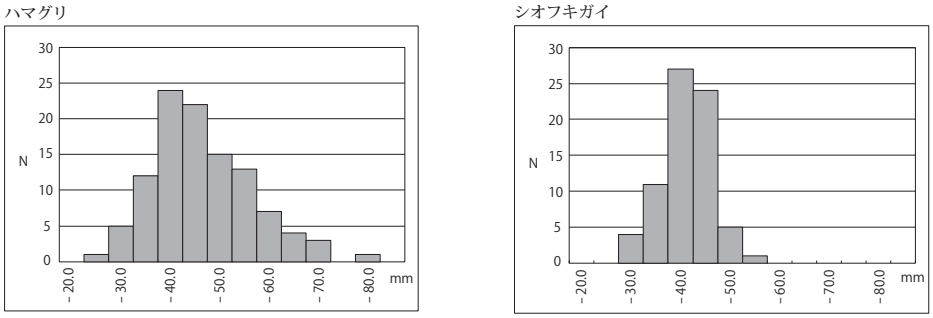


Fig.1　ハマグリ・シオフキガイ（左殻）殻長分布

中から土師器破片が出土することから、何らかの遺構であることは間違いなく、ここでは竪穴建物跡と判断した。第 22 図 1・2 は SI02 からの出土、3・4 は SI03 からの出土である。

SD01 は両トレンチ西側から検出され、SI03・SD02 を切って構築される。覆土上層にハマグリ・シオフキを主体とする純貝層が形成される。N−15°−W 程度を測り、南北に延びる溝跡は、貝層の分布と土層断面の観察から、1 トレンチ内でほぼ直角に東方向に折れるものと考えられる。なお、今回の調査に先立ち、ふるさと文化課文化財保護係による試掘が行われており、調査区北側の試掘トレンチからも貝層が検出されていることから、これと接続する可能性がある。

SD02 は両トレンチ東側から検出された。断面逆台形を呈し、遺構確認面における幅は約３ｍを測る。ほぼ南北に延び、SI01・SI02 を切って構築され、SD01 に切られる。

SD01・02 ともに覆土中に含まれる遺物は土師器細片のみで、古墳周溝等の可能性も考えられたが、これらの遺物は重複する竪穴建物から混入したものと判断した。積極的な根拠は乏しいが、現状では

中近世の区画溝と考えておきたい。なお、SD01・02 ともに、覆土中に宝永火山灰 (1707 年降灰) の堆積は確認できない。

検出された竪穴建物跡は、いずれも 5 世紀末から 6 世紀初頭頃に形成されたものと考えられる。これまでの周辺遺跡調査では、カマド出現以前の古墳時代集落跡が見つかっていたが、今回の調査により、引き続き低地に集落を形成していたことが明らかとなった。さらに海岸寄りの砂堆上に位置する妙経寺遺跡からは同時期の円墳 1 基が検出されていることから、調査区周辺にも未周知の古墳が存在する可能性がある。

動物遺存体

SD01 から検出された貝層については、排水用サブトレンチ設定時にサンプル採取を行い、10mm・ 4 mm・ 1 mm の各メッシュ寸法の試験用フルイを用いて、水洗選別を実施した。採取した貝層サンプルの重量は 58,900 g、水洗作業による土壌除去後の重量は 24,811 g である。時間の都合上、分析作業は水洗後重量の 20％を目安として行った（Tab.1）。

貝類の集計は、 4 mm メッシュ面上に分離された資料まで行い、腹足類（巻貝）では軸部を完存するもの（マルタニシは殻頂部）、二枚貝類では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝類は左右殻の出土数量の多い方をもって出土個体数（最小個体数）とした。ハマグリ、シオフキの 2 種は殻長計測を行ったが、ハマグリについては久保（1988）の方法に従って楯面長の計測を行い、西野（2004）によって示された計算式（殻長＝楯面長× 2.99 ＋ 1.4）をもとに殻長の復元推定を行った。

分析の結果、腹足綱（巻貝） 5 種・二枚貝綱 6 種の計 11 種の貝類が同定されたほか、脊椎動物骨として軟骨魚綱 1 種が同定された（Tab.2）。

唯一検出された脊椎動物骨は軟骨魚綱の脊椎骨で、 1 mm メッシュ面上から抽出された。神経・血管棘の離脱痕が大きいことからサメ類に由来するものと思われるが、直径 2.2mm の微細資料であることから、利用されたものかは明らかでない。

貝類はシオフキとハマグリが主体で、ほぼ内湾砂泥底の干潟に生息する種のみで構成されているが、唯一マルタニシが淡水域生息種となっている。市内では、マルタニシは弥生時代以降の貝層からのみ出土し、生息域の特徴から水田耕作との関連性が考えられる。

ハマグリの殻長復元推定値、シオフキの殻長計測値ともに 35 ～ 45mm 階級幅に明確なピークを持ち、採集具の条件等、何らかの選択性が働いていた可能性がある。なお、平成 18 年度調査区の中世後期に形成された貝層においても、ほぼ同様の大きさが中心であった（高橋 2007）。

なお、今回は 1mm メッシュ面上に分離された微小貝類の集計を行わなかったが、開放地生息種のオカチョウジガイ類、ヒメコハクガイ類、ベッコウマイマイ類によって構成されることが確認され、調査区周辺がかなり開けた環境にあったことが考えられる。

参考文献

久保和士　1988 「ハマグリの殻長推定に関する一試論」『古代文化』40-5 （財) 古代學協會
小橋健司　2000 「2. 姉崎棗塚遺跡 (2 次)」『市原市文化財センター年報　平成 9 年度』(財) 市原市文化財センター
高橋康男　2007 「2　棗塚遺跡」『平成 18 年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
西野雅人　2004 「3　動植物遺体」『市原市市原条里製遺跡 (蛇崎八石地区)・仲山遺跡』(財) 市原市文化財センター
西野雅人　2006 「6　棗塚遺跡」『平成 17 年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
蜂屋孝之　2000 「6. 姉崎棗塚遺跡」『市原市文化財センター年報　平成 8 年度』(財) 市原市文化財センター

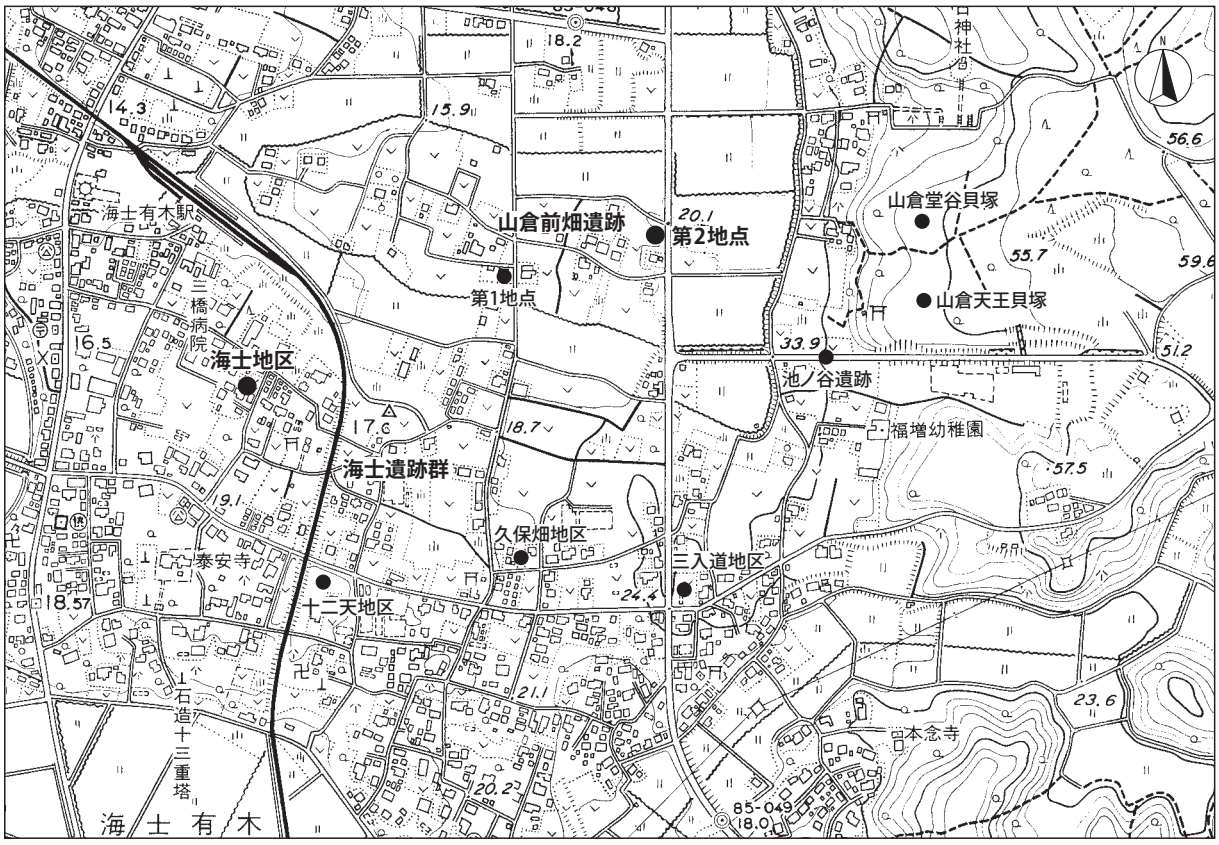
7　海士遺跡群 海士地区　（遺構：図版 5）

遺跡の位置と周辺の調査状況　海士遺跡群海士地区は、市内を南から北へ貫流する養老川の下流域右岸、標高 18m の洪積台地上に立地している。調査時点での現状は、宅地内の畑地であった。

大字「海士」の周辺は、『和名類聚抄』に見える古代「市原郡海士郷」の候補地の一つに比定されており、昭和 58 年に発掘調査を実施した池ノ谷遺跡では、井戸遺構や小鍛冶遺構が検出されたほか、陰刻花紋を有する緑釉陶器、井戸祭祀に用いられた合せ口の土師器坏などが発見されている（『池ノ谷遺跡・福増遺跡』1985 財団法人市原市文化財センター）。また、池ノ谷遺跡に程近い字「揚崎」付近からは、小金銅佛が 1 点表採されており、池ノ谷遺跡南西側に平安時代を中心とする郷クラスに係る何らかの施設が置かれていた可能性が窺われている。更に、字「堂道」付近においても緑釉陶器や灰釉陶器の散布が確認されており、集落への普及が一般的には考えにくい嗜好品の搬入が認められる地域として注目されてきた。このような中、海士遺跡群では、これまでに池ノ谷遺跡を含めて 6 地点での発掘調査が行われ、面的な広がりの中で、その内容を伺うことができるようになってきている。

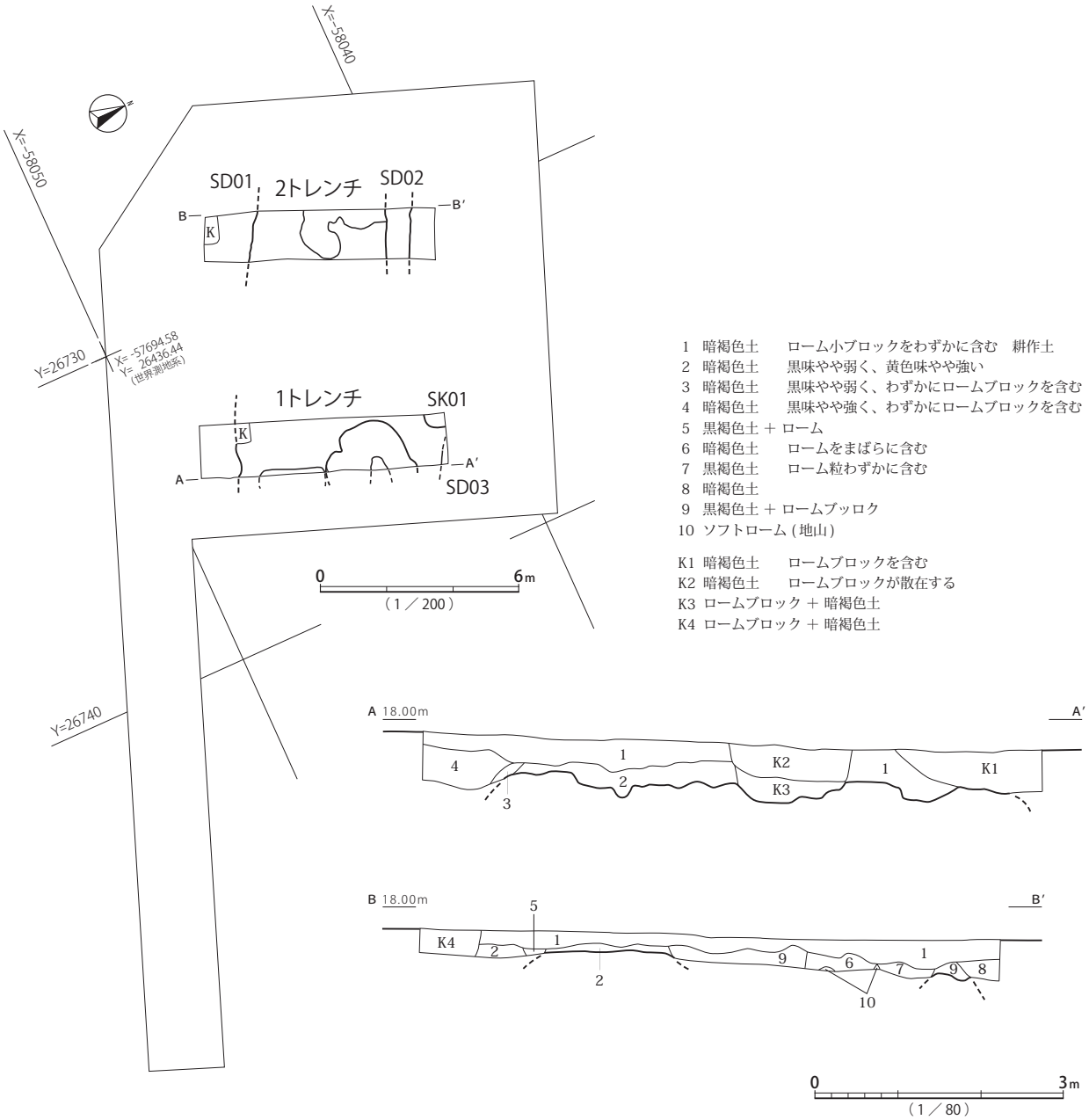
中でも、三入道地区の調査では、弥生時代後期の集落と重複して古墳時代前期の方形周溝と円形周溝が調査されており、方形周溝からは二重口縁壺や S 字状口縁甕が、また、円形周溝からは畿内産ならびに東海産の外来系土器が出土しており、東国における古墳時代草創期～前期の様相を整理する上で、重要な資料を提供している（『市原市海士遺跡群（三入道地区）』2008 市原市教育委員会）。

調査の概要と発見された遺構　調査は、東西にならぶ南北列のトレンチ 2 か所によって実施した。



（市原市地形図 1/10000、平成 7 年より）

第24図　海士遺跡群・山倉前畑遺跡周辺地形図



第25図　海士遺跡群海士地区全体図、土層断面図

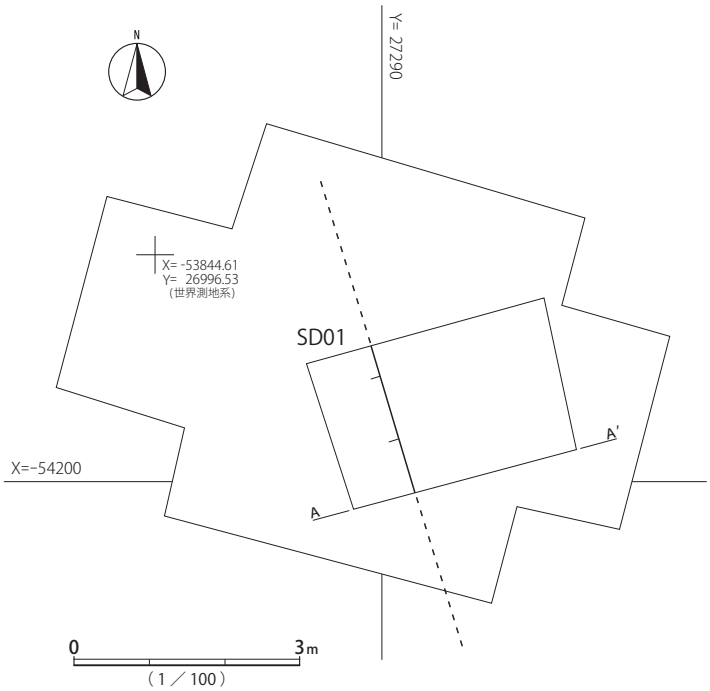
遺構確認面は、表土下 40 ～ 50cm で、地山層は関東ローム層（ソフトローム）であった。調査時点での現状が畑地であったことから、厚さ 30cm 程度の耕作土層が調査区全体を被覆していた。調査区の全体図（第 25 図）に表記した SD01、SD02、SD03、SK01 などは、そのような近現代の撹乱土壌とは異なっており、近代以前の所産と考えられる。また、第 2 トレンチ北隅において確認されたピットについては、層序関係から更に遡る可能性が指摘できるが、明らかとすることはできなかった。尚、当該宅地内からは、古墳時代後期の所産と考えられる須恵器の平瓶や中世の所産と考えられる内耳焙烙が発見されており、今回の調査では明らかとされなかったものの、古墳時代後期から中世にかけての遺跡が周囲に展開しているものと推測することができる。

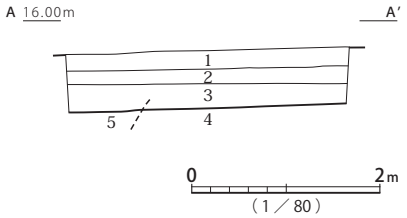
海士遺跡群では、これまで、弥生後期から古墳時代前期と奈良・平安時代の遺構が注目されてきたが、今後は更に、古墳時代後期の遺構についても注意を払う必要が生じてきている。

8　二日市場遺跡 第２地点　（遺構：図版 5）

遺跡の位置と調査の状況　二日市場遺跡第２地点は、市内を南北に貫流する養老川の中流域に展開する沖積平野上に位置している。調査地点の標高は、約 16m である。調査地点は、二日市場の熊野神社境内地にあたっており、拝殿の建替えに伴って確認調査を実施した。遺跡名を「二日市場遺跡第２地点」としたのは、調査地点の北側約 30m の地点で、平成８年に公民館建設に伴って実施した確認調査を「二日市場遺跡」としたことによった。調査地点を含む微高地上は、およそ、東西 200m、南北 100m に渡る白鳳期の「二日市場廃寺跡」として知られる寺院跡である。

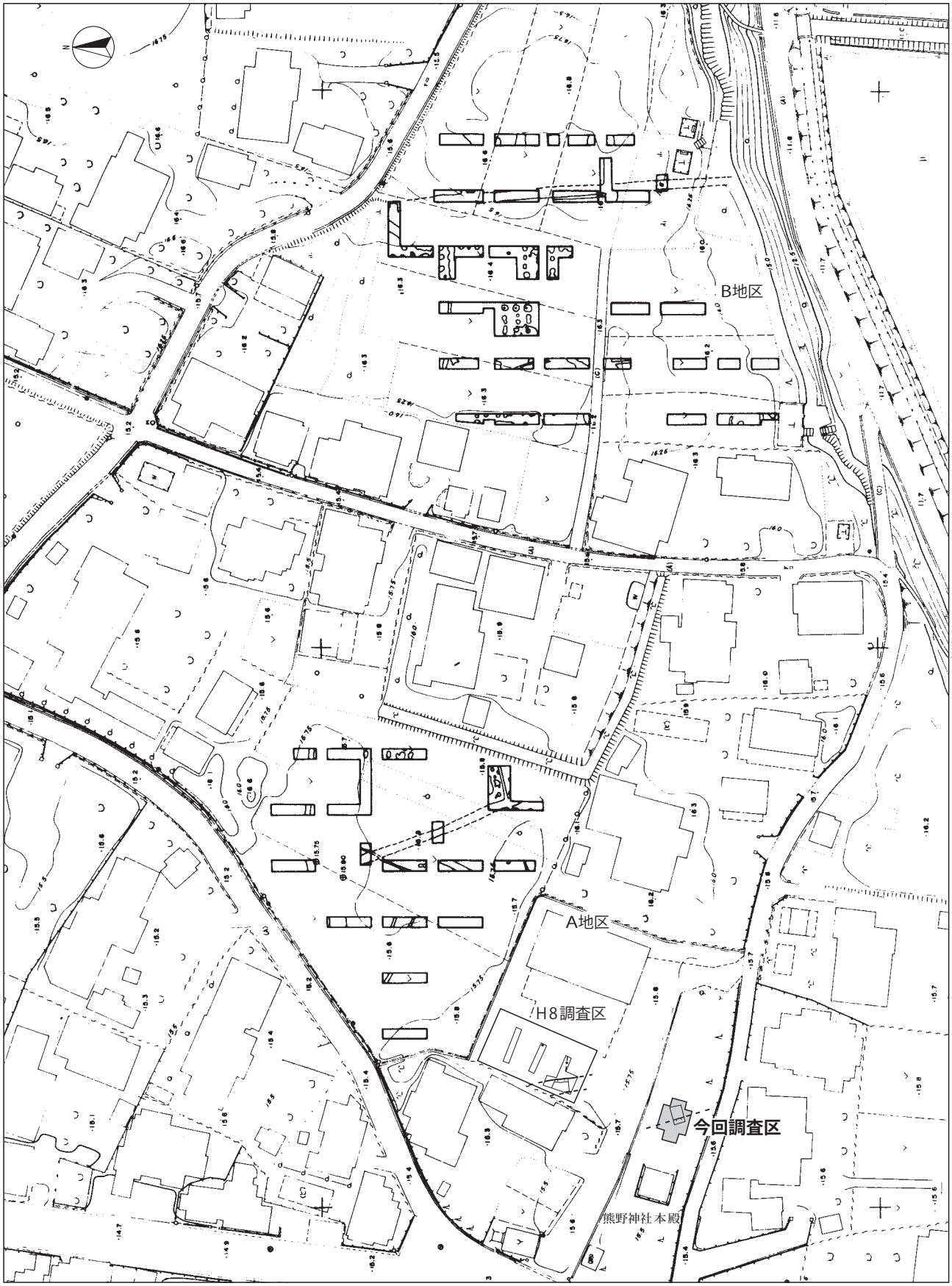
二日市場廃寺跡を初めて紹介したのは、須田勉「房総の古瓦に関する覚書（1)」(『古代第 64 号』1978　早稲田大学考古学会）であった。同書によると、二日市場廃寺跡は、1976 年に柿沼修平が実施した土宇遺跡の発掘調査の折りに、二日市場集落の住民から古瓦が届けられたことによって確認されたものであった。1978 年夏には既に、『千葉県埋蔵文化財包蔵地等一覧』に「二日市場大光廃寺址」として掲載されている。その後、1983 年に千葉県教育委員会によって広範囲にわたる確認調査が実施されており（第 27 図)、微高地上東半に掘立柱建物群を確認した（『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』1984 財団法人千葉県文化財センター)。この範囲は、須田論文が指摘した瓦分布範囲では南端の「本郷」を中心とする部分的な範囲にすぎず、寺院としての伽藍配置も明らかとはなっていない。但し、掘立柱建物や周囲に配された溝の振れをみると、ほぼ座北に従っているもののほかに、やや西に傾くものと大きく西に傾くものとが認められており、寺院地内にいくつかの変遷を予測することができるに至っている。今回の調査では、旧拝殿敷地内に２ｍ ×３ｍの確認トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、遺物は出土しなかったが、座北に対してやや西に傾く溝の存在を確認した。





1　浅黄色2.5YR7/4　山砂客土層　　従前の拝殿建立時表土層
2　暗赤褐色10R3/2　粘性土層　　拝殿整地以前の表土層
　県調査基本土層1～2層相当か (条件が異なる為比較が難しい)
　ブロック状に剥離する粘性土　炭化物が混じる　炭化物臭がする
　やや荒れた感じがする　遺物の包蔵が全く認められない
3　暗赤灰色10R3/1　粘性土 ＋ 砂質土　　上層に砂質土が混じる
　赤褐色粒少量・山砂若干含む　しまりあり　湧水はじめる
　遺物の包蔵は認められない　下層の一部はSD01覆土　分層は困難
4　赤黒色10R2/1　粘性粒状土　　遺物を含まない　しまり強い
　SD01覆土
5　にぶい黄橙色10YR7/4　白色系粘土層　　不透水層　地下水系上層
　地山層　県調査6層相当

第26図　二日市場遺跡第2地点全体図､トレンチ土層断面図



(『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』1984 千葉県教育委員会　から転用・加筆修正)

0　50m
(1／1,000)

第27図　二日市場遺跡周辺地形図

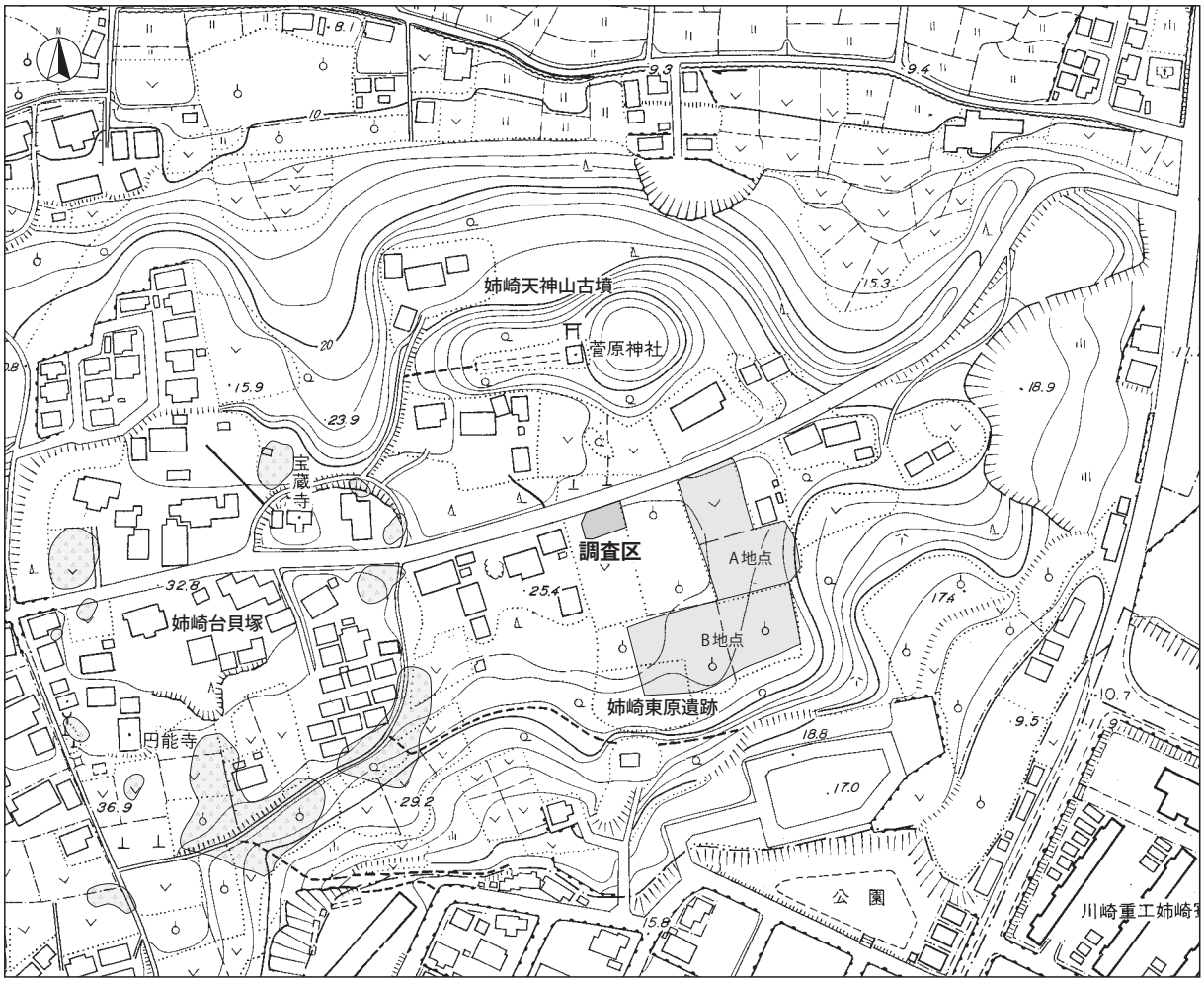
9　姉崎東原遺跡 E 地点　（遺構：図版 5･6 ／ 出土遺物：図版 12）

遺跡の位置と周辺の調査状況　姉崎東原遺跡は 1.5km 北西方向に、東京湾東岸の京葉コンビナート用地埋め立て前の旧海岸線が見下ろせる、標高 37m 前後の姉崎台地北辺部に位置している。遺跡は台地の T 字形を呈した東西方向の横棒部分東側にあり、幅 200 m前後のほぼ平坦な中央部が今回の調査地点となる。今年度、姉崎台遺跡の西部部分から分離して、小字の東原を冠して遺跡名とした。

調査区は東にA地点、南東方向にB地点、南にD地点、北側は姉崎天神山古墳推定周溝部分に隣接する。しかし、弥生・古墳時代に相当する遺構は、今回の確認調査では検出されなかった。

調査地点の西方向 100 mには、北東－南西方向 200 m、北西－南東方向 180 mの、環状を呈する姉崎台貝塚（鬼子母神貝塚）の貝層分布範囲の東辺が位置している。姉崎台貝塚は、東西方向に既存道路が横断するが、平成 6 年当時の道路部分下水道敷設工事の立ち会いでは、道路下に厚さ 1 mほどの純貝層が検出された。しかし縄文時代の遺構も今回は検出されていないので、姉崎台貝塚に伴う遺構は、今回調査区域までは及ばないと推定される。

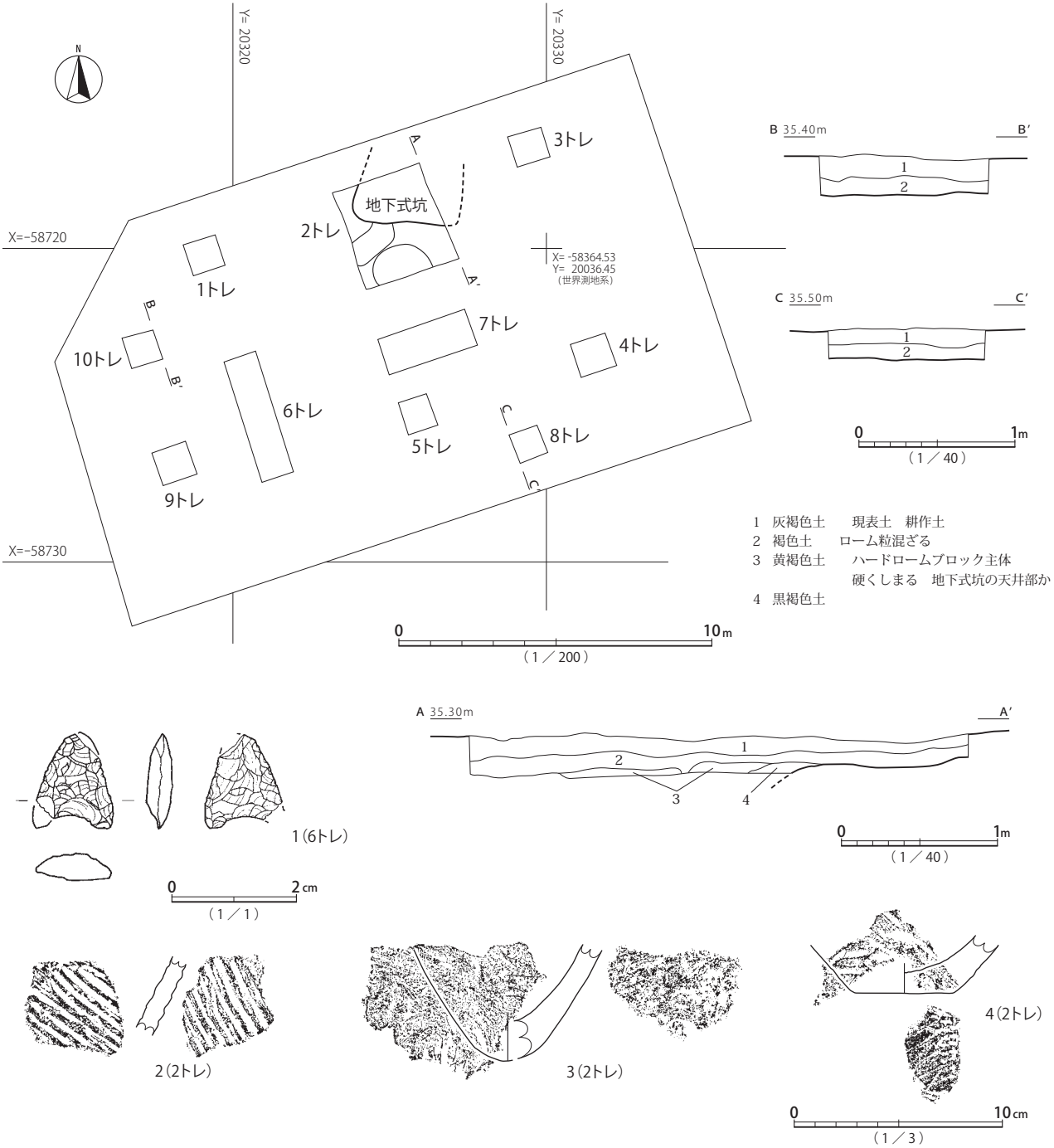
遺構と遺物　検出された遺構は、第 2 トレンチの天井崩落と推定される地下式坑のみであった。包含層は、現耕作土と関東ローム層上部が、耕作により撹乱されて全くない。遺物は細片が多く、図示



（市原市基本図 1/2500、昭和 55 年測図より）

0　100m
（1／3,000）

第28図　姉崎東原遺跡周辺地形図



第29図　姉崎東原遺跡E地点全体図、トレンチ土層断面図・出土遺物

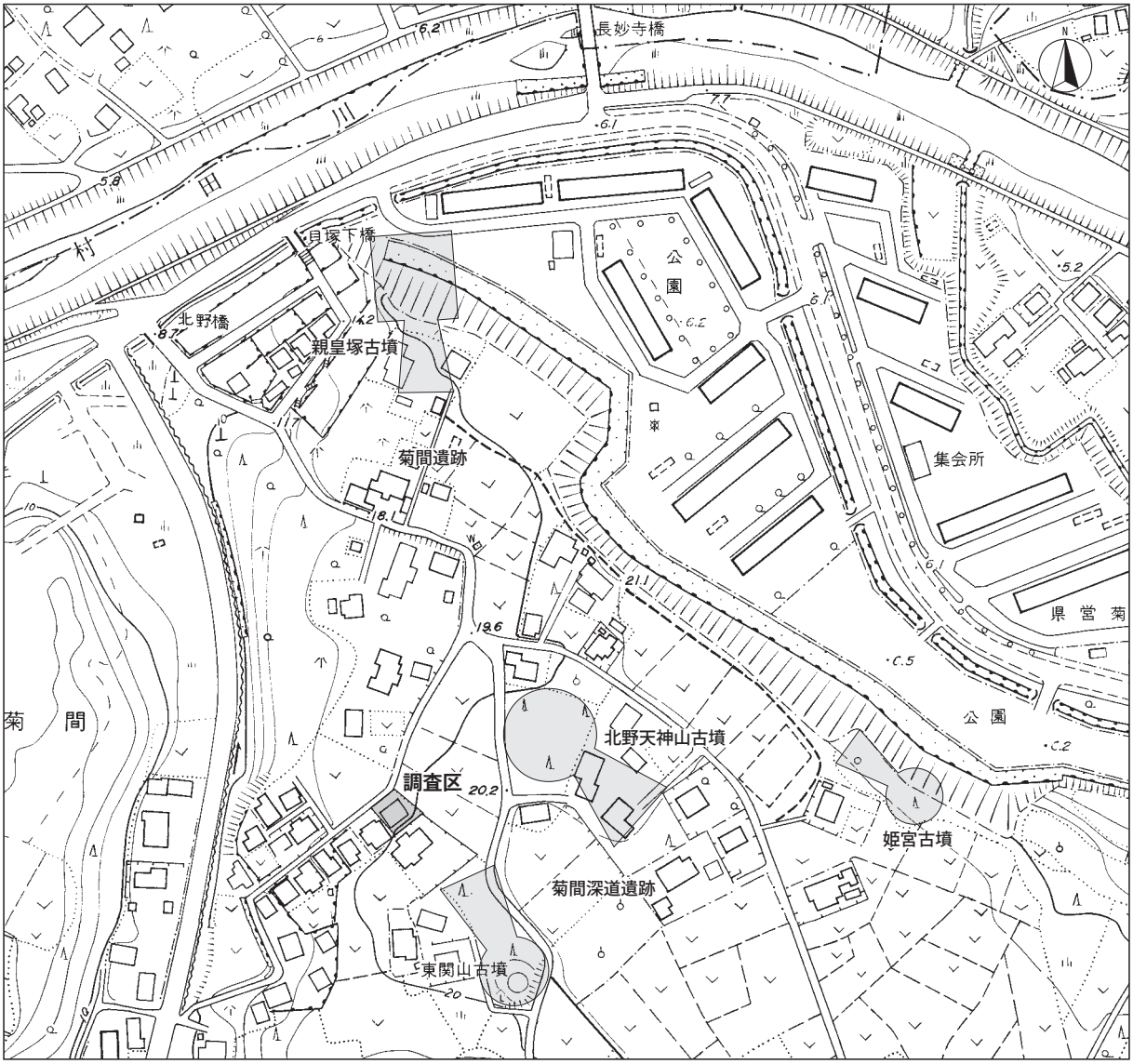
できるものは第 29 図 1 の黒曜石製石鏃、2 ～ 4 の縄文早期後半の条痕文系土器のみである。その他の出土遺物には、弥生土器、古墳時代土師器、奈良・平安時代土師器、中近世陶磁器の小片がみられる。

参考文献

「鬼子母神貝塚」『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』1978　千葉県教育委員会
『市原市姉崎東原遺跡』1990 (財) 市原市文化財センター　(A 地点としたもの)
「姉崎東原遺跡 B 地点」『平成 2 年度市原市内遺跡発掘調査報告』1991　市原市教育委員会
『市原市姉崎東原遺跡 B 地点』1993 (財) 市原市文化財センター
「姉崎東原遺跡 D 地点」『平成 4 年度市原市内遺跡発掘調査報告』1993　市原市教育委員会
『市原市姉崎東原遺跡 C 地点』1994 (財) 市原市文化財センター
「姉崎天神山古墳」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』1994　千葉県教育委員会

10　菊間藩庁跡（菊間遺跡群北野地区）（遺構：図版６／出土遺物：図版８・12）

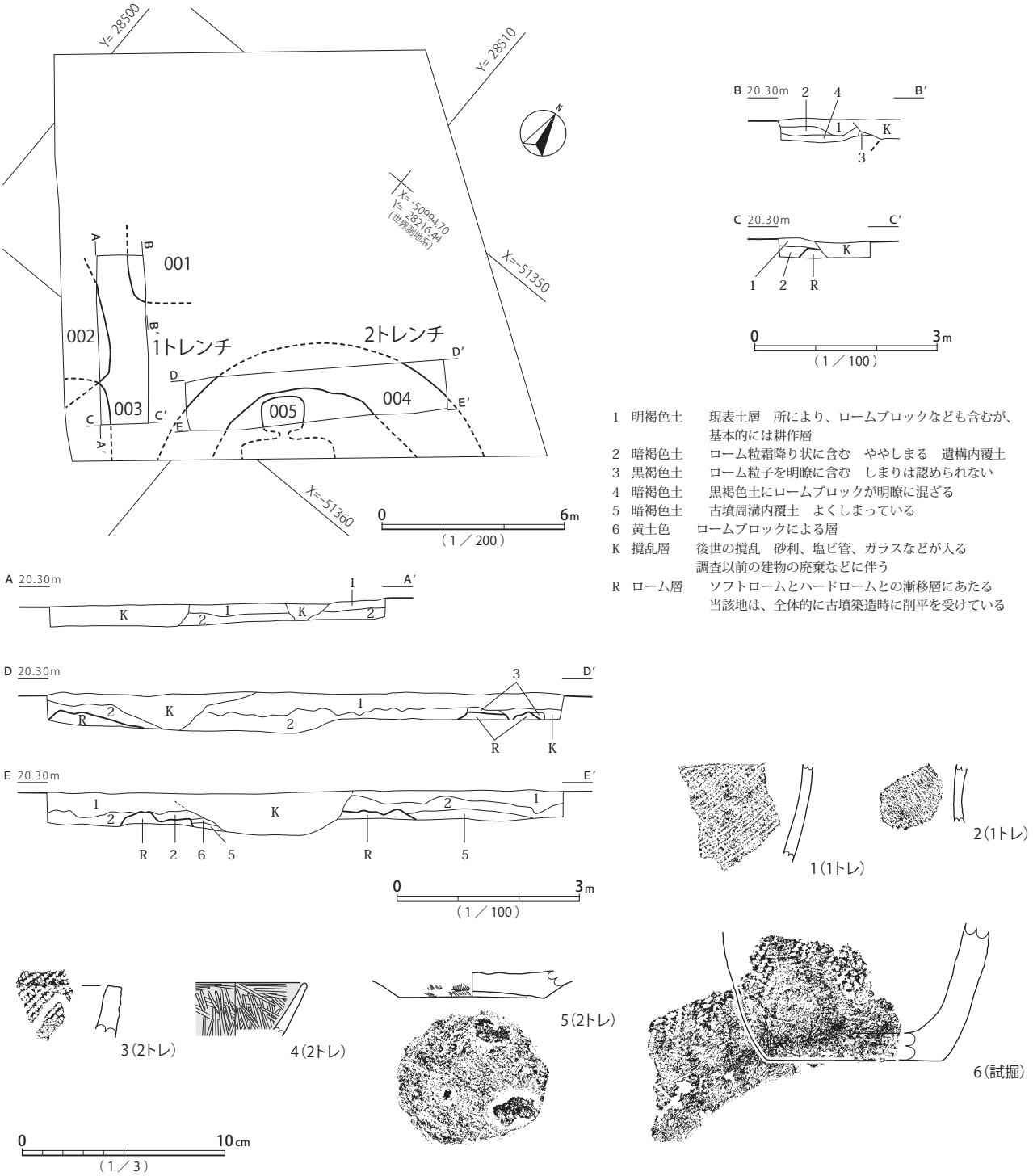
遺跡の位置と調査の状況　菊間藩庁跡（菊間遺跡群北野地区）は、市内菊間字北野 2100 番に所在している。地形的には、市原市の北部を流れる村田川下流域左岸の台地上である。この地区には、『先代旧事本紀』所収の「国造本紀」に見える「久々麻国造」（菊間国造）の奥津城に比定されている菊間古墳群（親皇塚古墳・東関山古墳・北野天神山古墳・姫宮古墳など）が分布しており、調査地点もこの範囲中に所在している。遺跡名とした「菊間藩庁跡」は、近代初頭、大政奉還後の知行替えに伴い、この地に成立した菊間藩の藩庁ならびに武家屋敷群が、この台地上に存在したことに因んだ名称である。藩庁自体は、調査地点より南に 800 mほど入った字「雲ノ境」に置かれていたが、武家屋敷などはこの北野近辺まで展開していた。このことから、当初は「菊間藩庁跡」という周知の名称により調査を実施している。しかし、確認調査の結果からすると、一部、範囲が重複する「菊間遺跡群」の内容にあたっていることから、本報文では（　）付きで「菊間遺跡群北野地区」とした。



（市原市基本図 1/2500、昭和 55 年測図より）

0　100 m
（1／3,000）

第30図　菊間藩庁跡周辺地形図



第31図　菊間藩庁跡全体図、1・2トレンチ土層断面図・出土遺物

確認調査は、直行する二本のトレンチによって行った。表土から遺構確認面までは非常に浅く、かつ、確認面はソフトローム層下面ないしハードローム層であった。これは、菊間古墳群の築造段階において、当該地を含む台地平坦面の土砂が築塚にあたって利用されたためと考えられる。

確認された遺構は、弥生時代竪穴住居跡３軒、古墳時代円墳１基、中世地下式壙（縦壙部分）１基であった。また、これらの確認調査において、縄文土器（中期～後期）、弥生土器（後期）、土師器（古墳時代前期）が出土している。いずれも細片であることから、図示できたものは少ない。調査区は東関山古墳（前方後円墳）に隣接しており、菊間深道遺跡からも、類似規模の円墳が確認されている。

11　山倉前畑遺跡 第２地点　（遺構：図版７／出土遺物：図版８・９・12）

遺跡の位置　養老川中流域の沖積平野に接した標高約 19 mの微高地上に立地する。微高地は畑地・宅地として利用され、周囲の低地（水田）との比高差は 1 m程度である。

調査概要　宅地造成に先行する確認調査で、調査対象面積の 570.83 ㎡に対し、13 本のトレンチ計 57.0 ㎡を設定した。その結果、弥生時代後期から終末期の竪穴建物跡 6 軒（SI01・04・06・09・11・13）、古墳時代前期の竪穴建物跡 2 軒（SI02・03）、古墳時代後期の竪穴建物跡 5 軒（SI05・07・08・10・12）を確認した。

遺構と遺物　2･3 トレンチから SI01･02･03 を確認した。SI01 は楕円形で、短軸 4.4 m程度と思われる。弥生時代後期の高杯が出土し（No.6）、遺構に伴うと判断した。SI02 は浅く、確認面において床硬化面が露出したため、プランは不明確であるが、トレンチの断面観察により、小形の竪穴と推定される。遺物は土師器の小片が数点出土したのみで、詳細は不明確であるが、床面が SI03 に乗っているため、これより新しいことは確実である。

SI03 は隅丸方形を呈し、SI01・02 にくらべ覆土の有機質性が高い。遺物は甕の上位部を逆さにした転用器台（No.7）と、これにはめられた底部穿孔甕（No.8）が出土している。転用器台は外面全体に煤が付着し、底部穿孔甕は体部上位に煮沸による吹きこぼれ痕が付着していることから、甑としての利用をうかがわせる。双方とも在地産の土器と思われるが、口唇部に面の作出を意識した畿内風の影響が見える。草刈 1 式に分類される。

4 トレンチでは SI04 を確認した。詳細は明確ではなく、出土遺物は少ないが、弥生時代後期から終末期の範疇に収まることから、遺構も同時期と判断した。

8 トレンチでは SI05 を確認した。本遺構は覆土内に焼土ブロックが認められ、覆土は全体に褐色味が強い。方形のプランで、鬼高式期の甕（No.9）が出土している。

9 トレンチでは SI06 を確認した。楕円に近いプランで、弥生時代後期の鉢（No.10）を伴う。

10 トレンチでは SI07 を確認した。1 辺 6 ～ 7 m規模と思われる。鬼高式期の小形壺（No.11）・杯（No.12）・甕（No.13・14）が出土した。トレンチ内から弥生土器（No.15・16・17）も出土していることから、弥生時代後期後半の竪穴建物跡も重複している可能性がある。

11 トレンチでは SI08 を確認した。詳細は明確ではないが、平面形状や軸向きから、SI07 に近い時期と想定した。

12 トレンチでは SI09・10 を確認した。SI09 はプラン形状から、弥生時代後期から終末期の範疇で捉えた。SI10 は 1 辺 4 m程の竪穴と思われ、遺物から古墳時代後期の遺構と推測される。

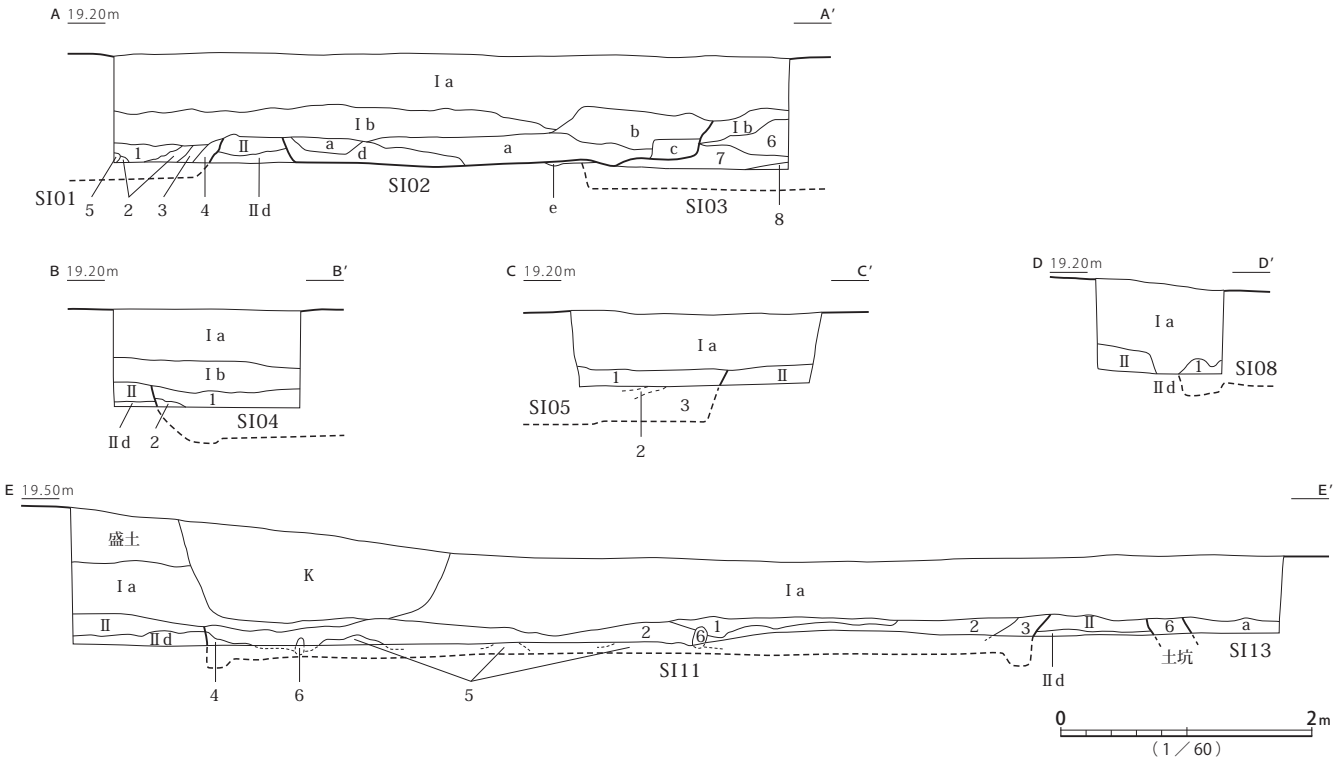
13 トレンチでは SI11・12・13 を確認した。SI11 は焼土の混入が目立ち、焼失住居の可能性がある。覆土は乱れ気味で部分的に褐色味強く、焼失による埋没か埋め戻しの可能性が高い。出土した粗製の短頸壺（No.18）は弥生時代終末期に帰属する。しかし竪穴の形態は SI03 よりも古いため、草刈式に先行する中台式期と捉えた。SI12 は軸向きから SI11 に近い時期と推測した。SI13 は覆土がやや褐色味強く、ロームブロックが散る状況から、人為的埋没の可能性がある。また、本トレンチから鎌倉期と思われるカワラケが 7 点出土しており、中世遺構を捕捉しきれていない可能性がある。

なお、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物の分類については、大村直氏の指導によった。

調査風景　北東から

Y= 27280
Y= 27290
X=-57840
X=-57850
X=-57860
X=-57870
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
9トレンチ
10トレンチ
11トレンチ
12トレンチ
13トレンチ
SI01
SI02
SI03
SI04
SI05
SI06
SI07
SI08
SI09
SI10
SI11
SI12
SI13
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
6
7・8
9
4
11
13
14
15
N
X= -57504.57
Y= 26986.45
（世界測地系）
0
10m
（1／200）

第32図　山倉前畑遺跡第2地点全体図



基本層序

Ⅰa　暗褐色土　やや灰色味かかる　現代の耕作撹乱表土層
Ⅰb　暗褐色土　Ⅰaより若干有機質性強い　現代以前の耕作撹乱表土層
Ⅱ　暗褐色土　やや有機質性強い　古代の表土層
Ⅱd　褐色土　ローム漸移層

A－A′（3トレンチ南壁　SI01・SI02・SI03）

SI01

1　暗褐色土　やや褐色味強い　ローム粒・粘土粒含む
2　暗褐色土　やや有機質性強い
3　暗褐色土　ローム粒含む　1・2より褐色味強い
4　暗褐色土　褐色味いちばん強い　ローム粒多く含む
5　暗褐色土　やや褐色味強い　4cm大ソフトロームブロック含む

SI02

a　暗褐色土　ローム粒含む　2mm大焼土ブロック少量散る
b　暗褐色土　やや有機質性強い
c　暗褐色土　やや有機質性強い　部分的にローム粒含む
d　暗褐色土　aより若干有機質性強い
　　部分的に5cm大ソフトロームブロック少量散る
e　暗褐色土　床面で硬化している

SI03

6　暗褐色土
7　暗褐色土　1～3mm大ソフトロームブロック散る
8　暗褐色土　2mm大ソフトロームブロック少量散る

B－B′（4トレンチ南壁　SI04）

1　暗褐色土　1～5mm大ソフトロームブロック少量散る　3mm大焼土粒少量散る
2　暗褐色土　1～3mm大ソフトロームブロック少量散るが、1より少ない

C－C′（8トレンチ北壁　SI05）

1　暗褐色土　1～10mm大焼土ブロック散る
2　暗褐色土　2mm大・10mm大ソフトロームブロック散る
3　暗褐色土　やや有機質性強い

D－D′（11トレンチ南壁　SI08）

1　暗褐色土　ソフトローム粒含む

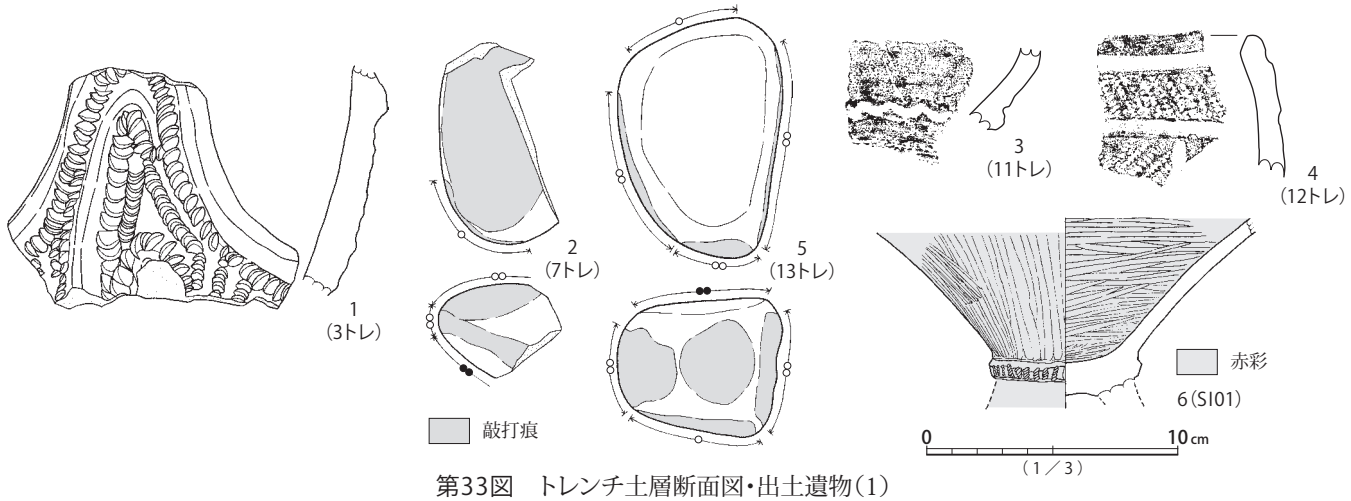
E－E′（13トレンチ南壁　SI11・SI13）

SI11

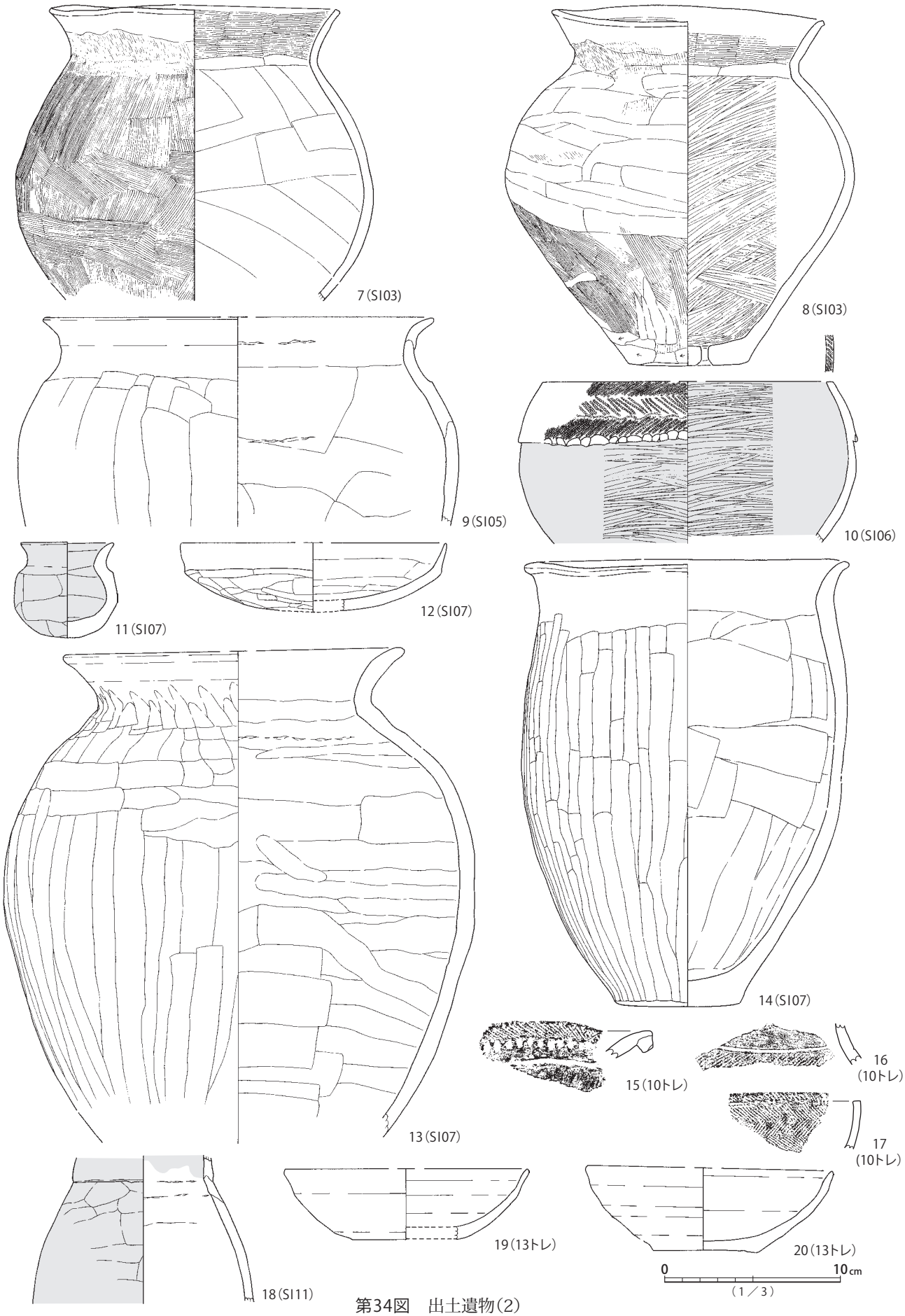
1　暗褐色土　焼土粒含む
2　暗褐色土　焼土粒多く含む　3mm大ソフトロームブロック散る
3　暗褐色土　褐色味強い　2～3mm大焼土粒散る
4　暗褐色土　やや有機質性強い　部分的にソフトローム多く混入
5　暗褐色土　焼土粒含む　5mm大炭化物粒散る
　　部分的に10mm大ソフトロームブロック散る
6　ソフトロームブロック

SI13

a　暗褐色土　ソフトローム粒やや多い　2cm大ロームブロック少量散る



第33図　トレンチ土層断面図・出土遺物（1）


7（SI03）
8（SI03）
9（SI05）
10（SI06）
11（SI07）
12（SI07）
13（SI07）
14（SI07）
15（10トレ）
16
（10トレ）
17
（10トレ）
18（SI11）
19（13トレ）
20（13トレ）
0
10cm
（1／3）

第34図　出土遺物（2）

12　出土遺物観察表

能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
3	1	1		弥生土器	壺か							白色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	褐	外面 S 字結節・羽状縄文・赤彩／内面ナデ	
3	2	1	SI01	土師器	高杯			(8.2)	1/3			白色粒 (～0.5mm)・石英少量	良好	褐～明褐	外面脚部上半ヘラケズリ・下半ナデ・赤彩／内面杯部赤彩・脚部ヘラケズリ	
3	3	1	SI01	土師器	杯	14.4	1/2				4.0	白色粒 (～0.5mm)・石英少量	良好	明褐～橙	外面口縁部ヘラミガキ・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ・黒色処理／内面ヘラミガキ・黒色処理	
4	1	4		弥生土器	壺							雲母・礫 (～3.0mm) 多い	良好	赤橙	外面櫛描きによる波状文を巡らせる／内面ナデ	
4	2	4		須恵器	杯蓋							灰・緻密／白色粒 (～2.0mm) 多い	良好	灰	内外面ロクロナデ	
4	3	4		カワラケ	小皿			3.9	2/3			雲母多い	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
4	4	4	SD01	中世土器	内耳鍋	(29.6)	1/8					砂粒 (～2.0mm)・白色粒 (～0.5 mm)・骨針少量	良好	暗褐～黒褐	外面ヘラケズリ／内面ナデ	
4	5	4	SD01	陶磁器	瓶・壺類							白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	釉：オリーブ／胎土：明黄灰	内外面ロクロナデ・漬け掛け施釉	古瀬戸後期
4	6	4	SD01	陶磁器	こね鉢			(15.9)	1/6			砂粒 (～3.0mm)・白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	明褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	常滑産
6	1	2	SD01	中世土器	内耳鍋	(32.0)	1/12					白色粒 (～2.0mm) 多い、赤褐色粒 (～1.0mm)・雲母少量	良好	暗褐～暗灰褐	外面ナデ／内面ヘラナデ	
6	2	2	SD01	陶磁器	椀か			(4.8)	1/4			緻密／白色粒 (～1.0mm) 少量	良好	釉：淡い緑色／胎土：明灰～灰	内外面ロクロナデ・施釉	青磁 (貿易陶磁)
7	3		SI02	土師器	杯	(12.4)	1/4			(13.6)	(3.1)	白色粒 (～0.5mm)・赤褐色粒 (～2.0mm) 少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	
7	4		SI02	土師器	杯	(14.8)	1/10			(16.5)		白色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	暗褐～褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・体部ヘラミガキ・外面口縁部～内面黒色処理	
7	5		SI02	土師器	杯	(13.6)	1/4				(3.3)	石英微粒多い、白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	暗褐～黒褐	内外面ヘラミガキ・黒色処理	
7	6		SI02	土師器	杯	(14.2)	1/4					雲母・骨針少量	良好	褐～暗褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ／内面ナデ後ヘラミガキ	
7	7		SI02	土師器	杯	(13.4)	1/8				(2.8)	赤色粒 (～1.0mm)・骨針少量	やや甘い	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面ヘラミガキ・黒色処理	
7	8		SI02	土師器	杯	(12.4)	1/4					白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	暗褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面ナデ	
7	9		SI02	土師器	高杯	(16.4)	1/28					白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	明褐～褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラミガキ・黒色処理	
7	10		SI02	土師器	高杯			9.2	1/1			白色粒 (～0.5mm) 多い、骨針少量	良好	暗褐～黒褐	外面ヘラミガキ・黒色処理／内面脚部上半ヘラケズリ・下半ヘラナデ	
7	11		SI02	土師器	高杯							白色粒 (～0.5mm) 多い、赤色粒 (～1.0mm) 少量	良好	明褐	外面ヘラケズリ／内面杯部ヘラミガキ・脚部ヘラケズリ	
7	12		SI02	土師器	甕			6.8	1/2			白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～1.0mm)・雲母・骨針少量	良好	褐～明褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラミガキ・黒色処理	
7	13		SI02	土師器	甕	(13.2)	1/3					白色粒 (～0.5mm) 多い、石英少量	良好	褐～明橙	外面口縁部ナデ・頸～胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ	
7	14		SI02	陶磁器	すり鉢							緻密／白色粒 (～1.0mm) 少量	良好	釉：暗赤灰／胎土：明黄灰	内外面ロクロナデ・錆釉施釉	瀬戸産
8	15		SI02	土師器	甕	(21.6)	1/3			(27.6)		白色粒 (～0.5mm) 多い、赤色粒 (～2.0mm)・骨針少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ・頸部ヘラケズリ後ヘラミガキ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
8	16		SI02	土師器	甕			(9.9)	1/5			白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～1.0mm)・雲母・骨針少量	良好	暗褐～橙	外面胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ・黒色処理・底部ヘラケズリ／内面胴部ヘラナデ後ヘラミガキ	
8	17		SI02	土製品	支脚							繊維質多量に混入　藁か	良好	明褐		280.4g
8	18		SI02	土製品	支脚							繊維質多量に混入　藁か	良好	明褐		167.8g

能満遺跡群 二階台地区第 2 地点

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
10	1	3		弥生土器	鉢							白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	外面羽状縄文・連続押圧 (オオバコ類か)／内面ヘラミガキ	
10	2	3		弥生土器	鉢							白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	外面網目状撚り糸文・連続押圧／内面ナデ	
11	1	4		土師器	杯	(13.7)	1/8					赤色粒 (～1.5mm) 少量	やや甘い	橙～明橙	外面口縁部ヘラナデ・体部ヘラケズリか (摩耗激しい)／内面ヘラナデ後体部下半ヘラミガキ	
11	1	5		陶磁器	すり鉢							緻密／黒色粒 (～0.5mm) 少量	良好	釉：褐／胎土：明黄灰	内外面ロクロナデ・施釉	瀬戸産
13	1			須恵器	杯	(10.5)	1/6			(12.8)		灰～赤灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	暗灰	内外面ロクロナデ	

13	2		SI01	弥生土器	甕							白色粒 (～1.0mm)・雲母多い、骨針少量	良好	暗褐	外面ヘラミガキ・オオバコ類連続押圧／内面ヘラミガキ	
14	3		SI01	土師器	鉢	(11.2)	1/8	4.7	1/1		7.7	砂粒 (～1.0mm) 多い、石英少量	甘い	明褐	外面ヘラケズリ後脚部下半ヘラミガキ・摩耗のためか輪積痕が見える／内面ヘラナデ	
14	4		SI02	土師器	杯	(13.6)	1/8			(15.0)		白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	内外面ヘラミガキ・黒色処理	
14	5		SI02	土師器	甑			(9.5)	1/8			石英多い、白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～1.0mm) 少量	良好	橙～暗褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
14	6		SI02	土師器	甕	(18.0)	1/12	5.8	1/1	17.4	28.7	砂粒 (～1.0mm)・白色粒 (～0.5 mm)・雲母少量	良好	にぶい橙～明褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
14	7		SI02	土師器	甕	(17.3)	1/4			22.7		白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～1.0mm) 多い、雲母・骨針少量	良好	明褐～暗褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ胴部ヘラナデ	内面にモミ痕あり
14	8		SI02	土師器	甕	(24.6)	1/12					赤色粒 (～3.0mm)・雲母・骨針少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ後ヘラミガキ	
14	9		SI02	土師器	甕	(19.1)	1/4					白色粒 (～0.5mm)・骨針・石英少量	良好	明橙	外面口縁～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	
14	10		SI02	土製品	紡錘車							白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	褐～暗褐	表面ヘラミガキ	1/8 残存　10.3 g
14	11		SI03	土師器	杯	(12.6)	1/8				(3.4)	赤色粒 (～1.0mm)・骨針・雲母少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ後ヘラミガキ・黒色処理・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ／内面ヘラミガキ・黒色処理	
14	12		SI03	土師器	高杯			8.8	1/1			骨針・雲母少量	良好	明橙	外面ヘラケズリ／内面脚部上半ヘラケズリ・下半ヘラナデ	
14	13		SI03	土師器	甕			5.4	3/5			雲母多い、白色粒 (～1.0mm) 少量	良好	明褐～橙	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
14	14		SI04	土師器	杯	(11.9)	1/4			(13.2)		白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	外面口縁部ヘラミガキ・黒色処理・体部ヘラケズリ／内面ヘラミガキ・黒色処理	
14	15		SI04	土師器	杯	12.1	2/3			12.5	3.6	白色粒 (～0.5mm)・骨針少量	甘い	明褐	外面口縁部ヘラナデ・体部ヘラケズリか (摩耗激しい)／内面ヘラミガキ (ほとんど残らず)・黒色処理か	
14	16		SI04	土師器	杯	(13.2)	1/8					白色粒 (～0.5mm)・赤色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ・黒色処理／内面ヘラミガキ・黒色処理	
14	17		SI04	土師器	高杯	(13.6)	1/6	8.3	1/1		7.5	白色粒 (～0.5mm)・雲母・骨針少量	良好	明褐～暗灰褐	外面口縁部ナデ・体～脚部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ／内面杯部ヘラミガキ・脚部ヘラケズリ・内外面赤彩	
14	18		SI04	土師器	高杯							赤色粒 (～1.0mm) 多い、白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	明褐	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ・黒色処理／内面杯部・黒色処理・脚部ヘラケズリ	
15	19		SD02	土師器	杯	(13.8)	1/8			(15.8)		砂粒 (～1.0mm) 多い	良好	明褐～褐	外面口縁部ヘラミガキ・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ／内面ヘラミガキ	
15	20		SD02	須恵器	杯蓋	(9.9)	1/12			(12.0)		白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	明灰	内外面ロクロナデ	
15	21		SD02	カワラケ	杯	11.5	1/1	5.0	1/1		3.4	雲母多い、白色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	明橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
15	22		SD02	カワラケ	小皿	(7.9)	1/14	(5.6)	1/2		1.8	赤色粒 (～1.0mm)・白色粒 (～1.0mm)・雲母少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
15	23		SD02	カワラケ	小皿			(4.9)	1/3			雲母・骨針少量	良好	明褐～明橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
15	24		SD02	陶磁器	鉢							礫 (～5.0mm)・白色粒 (～1.0mm) 少量	良好	明灰	内外面ナデ	渥美産 (12C か) こね鉢か、割れ口一部砥石転用か
15	25		SD02	陶磁器	甕	(42.0)	小片					明灰・緻密／礫 (～3.0mm)・白色粒 (～2.0mm) 少量	良好	暗赤褐	内外面ナデ	常滑産
15	26		SD02	陶磁器	甕							灰白・緻密／白色粒 (～2.0mm) 多い	良好	外面：オリーブ 内面：明赤灰	外面タタキ・施釉／内面ナデ	常滑産
15	27		SD02	陶磁器	甕							灰白・緻密／白色粒 (～1.0mm) 多い	良好	外面：暗褐灰 内面：明赤灰	外面タタキ・施釉／内面ナデ	常滑産
15	28		SD02	銭貨	銅銭											天聖元宝 (北宋・初鋳 1023 年) か 2.2g
15	29		SD02	石器	砥石	長さ 5.1		幅 2.1			高さ 1.6					デイサイト・28.6 g
15	30		SD01	陶磁器	甕			(13.4)	1/8			暗灰・緻密／礫 (～3.0mm)・白色粒 (～1.0mm) 多い	良好	赤灰～灰	外面ナデ・底部ヘラケズリ／内面ナデ・降灰 (オリーブ)	常滑産

椎津尾崎遺跡 第 2 地点

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
18	1			カワラケ	小皿か	(10.7)	1/5					白色粒 (～0.5mm) 多い、赤色粒 (～1.0mm)・骨針少量	良好	明黄褐	内外面ロクロナデ	
18	2		003	カワラケ	小皿	(8.4)	1/2	6.6	1/1		2.7	赤色粒 (～1.0mm) 多い、雲母・骨針少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部静止糸切り後無調整	
18	3		003	緑釉陶器	小皿	(8.9)	1/10					灰白・緻密	良好	釉：オリーブ／胎土：灰白	内外面ロクロナデ・口縁部施釉	
18	4		003	陶磁器	おろし皿	(13.7)	1/5					浅黄橙・緻密／白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	にぶい橙	外面ロクロナデ・施釉／内面ロクロナデ・施釉・おろし目	瀬戸産

18	5		003	陶磁器	こね鉢							緻密／白色粒 (～2.0mm) 多い	良好	釉：にぶい赤／胎土：にぶい褐	内外面ロクロナデ・施釉	常滑産・口唇部および外面が摩耗激しい砥石転用か
18	6			陶磁器	片口皿	(26.7)	1/16					灰・緻密／黒色粒 (～1.0mm) 少量	良好	釉：灰黄褐／胎土：灰	内外面ロクロナデ・施釉	瀬戸産・片口部分は割れて欠失
18	7			陶磁器	深皿・大皿類			(11.8)	1/6			緻密／白色粒 (～3.0mm) 多い	良好	明黄白	外面胴～底部ヘラケズリ／内面ナデ	瀬戸産・見込みスベスベしている
18	8		001	陶磁器	香炉か			(12.2)	1/10			白色粒 (～1.0mm) 少量	良好	明黄白	内外面ロクロナデ	瀬戸産
18	9		003	石器	砥石	長さ 12.0		幅 3.3			高さ 2.9					流紋岩　110.0 g
18	10		002	石器	砥石	長さ 7.2		幅 2.7			高さ 2.9				紐で提げられるような括れ状の加工あり	流紋岩　76.0 g
18	11	2		銭貨	銅銭											洪武通宝　4.1 g

島原遺跡

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
20	1	1		土師器	甕			(9.6)	1/3			砂粒 (～1.0mm)・白色粒 (～0.5mm)・石英多い	良好	にぶい黄褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
20	2	2	本	土師器	甕			(7.8)	1/4			白色粒 (～1.0mm) 多い・石英少量	良好	赤褐	外面ヘラケズリ／内面ナデ	
20	3	2		土師器	甕	(20.8)	1/12					砂粒 (～2.0mm)・白色粒 (～1.0mm) 多い	良好	にぶい褐	内外面ナデ　輪積痕残る	
20	4	2		土師器	台付き甕			(10.0)	1/3			砂粒 (～2.0mm)・白色粒 (～1.0mm) 多い	良好	明赤褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
20	5	2		土師器	甕	(18.0)	1/10					砂粒 (～1.0mm)・白色粒 (～0.5mm) 多い、赤色粒少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ・口唇部面取り／内面ナデ	
20	6	2		土師器	杯	(7.0)	1/8					白色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁～体部ナデ	
20	7	2		土師器	杯	(13.8)	1/8					白色粒 (～0.5mm)・雲母・骨針少量	良好	にぶい褐	外面体部下端ヘラケズリ	摩耗激しい
20	8	2		土師器	杯	(13.0)	1/16	(7.8)			4.2	白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁～体部ナデ	摩耗激しい
20	9	2		土師器	杯	(14.8)	1/16					赤色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ナデ	摩耗激しい
20	10	2		須恵器	杯	(12.0)	1/20					灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	黄灰	内外面ロクロナデ　口唇部面取り	
20	11	2		須恵器	杯	(10.0)	1/6					灰・緻密／混ざりほとんどみられない	良好	白灰	内外面ロクロナデ　内面の一部に自然釉付着	佐波理椀模倣杯　おそらく高台が付く
20	12	2		須恵器	杯蓋	(10.6)	1/20					灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	灰	内外面ロクロナデ	
20	13	2		須恵器	甕							明灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	灰白	外面並行タタキ後ロクロナデ／内面ロクロナデ	
20	14	2	試掘	石器	敲石・くぼみ石	長さ 14.5		幅 6.5			高さ 4.7				端面で敲き、平坦面は摩痕あり	砂岩　720.5g

棗塚遺跡 第 5 次

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
22	1	1	SI02	土師器	杯	(16.2)	1/10					白色細粒をごくわずかに含む	良好	にぶい赤褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩／内面ミガキ・赤彩	内面黒色化
22	2	1	SI02	土師器	鉢	(14.6)	1/10					褐色粒を少量含む	良好	にぶい赤褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩／内面ナデ・赤彩	
22	3	1	SI03	土師器	高杯			(9.9)	1/4			粗い赤褐色粒、黒色・白色粒を少量含む	良好	にぶい赤褐～橙	外面ヘラケズリ・赤彩／内面接合部指オサエ・脚部ヘラナデ	
22	4	1	SI03	土師器	甕	(16.0)	1/8					黒色・白色細粒を少量含む	良好	にぶい赤褐	外面ヘラナデ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデか	
22	5	1	SD02	土師器	杯	(17.0)	1/8					黒色・白色細粒をわずかに含む	良好	明赤褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩／内面ミガキ・赤彩	
22	6	1	SD02	土師器	鉢	(16.2)	1/10			(17.2)		赤色・白色細粒をごくわずかに含む	良好	灰褐～にぶい赤褐	外面口縁部ミガキ・体部ヘラナデ・赤彩／内面ミガキか・赤彩	外面黒色化　内外面劣化

姉崎東原遺跡 E 地点

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
29	1	6		剥片石器	石鏃	長さ 1.51		幅 1.22		厚さ 0.40						黒曜石　重さ 0.9 g
29	2	2		縄文土器	深鉢							白色粒 (～0.5mm) 多い・繊維やや多い	良好	橙	内外面貝殻条痕文	縄文早期後葉
29	3	2		縄文土器	深鉢							砂粒 (～1.0mm)・白色粒 (～0.5mm) 多い、繊維多量	良好	褐～橙	内外面擦痕	縄文早期中～後葉
29	4	2		縄文土器	深鉢			(4.7)	1/2			赤色粒 (～1.0mm)・白色粒 (～1.0mm) 多い、骨針・雲母少量	良好	褐～明橙	外面条痕文	底部にアジロ状痕一部あり・早期後葉か

菊間藩庁跡

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
31	1	1		縄文土器	深鉢							白色粒 (～0.5mm) 多い・石英少量	良好	暗褐	条線文	縄文後期

31	2	1		土師器								白色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	暗褐	外面ハケナデ	小片のため器種不明
31	3	2		弥生土器	鉢							赤色粒 (～ 1.0mm)・白色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	明褐	口唇・口縁部に単節 RL 縄文施文後沈線で波線を描く	
31	4	2		土師器	高杯							白色粒 (～ 0.5mm)・雲母少量	良好	明褐	内外面ハケナデ後ヘラミガキ・赤彩	
31	5	2		土師器	甕			7.2	1/1			砂粒 (～ 1.0mm)・白色粒 (～ 0.5mm) 多い、石英少量	良好	明褐	外面ハケナデ・底部ヘラケズリ	
31	6	試掘		縄文土器	深鉢			(8.5)	1/2			砂粒多い	良好	赤橙	単節 RL 縄文縦回転施文	縄文中期前葉か

山倉前畑遺跡 第 2 地点

挿図番号	掲載番号	トレンチ	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
33	1	3		縄文土器	深鉢							金雲母・長石小粒多	良好	明赤褐	外面 口縁は大きな突起で波打ち、粘土紐を貼り付けた凸帯に沿って押引文を施す。内面 口縁部境に稜をつくる。ヘラ状工具で細かくナデ。	阿玉台式期
33	2	7		石器	磨石	長さ (7.9)		幅 (4.5)			高さ (3.7)	砂岩		にぶい黄	上面および側面で敲打、裏面で磨っている。	縄文時代
33	3	11		縄文土器	鉢							白色小粒・石英小粒	良好	黒褐	外面 体部・頸部境に凸帯、その上に沈線による波状文。内面 横方向ナデ。	中期
33	4	12		縄文土器	鉢							褐鉄鉱・金雲母・石英小粒	良好	橙	外面 頸部沈線区画内に単節 RL。内面 密に横方向ナデ。	中期
33	5	13		石器	磨石	長さ 9.4		幅 6.5			高さ 5.4	流紋岩か		褐灰	上面を強く磨り、側面・裏面は敲打痕を残す。敲打部分でも磨っている。全面焼けている。	縄文時代
33	6		SI01	弥生土器	高杯							褐鉄鉱・白色微粒、海綿骨針少	良好	赤褐	外面 粘土紐貼り付けによる中央の段部は布目と推定される横条線を残す押捺。全面ヘラミガキ、赤彩。内面 全面ヘラミガキ、赤彩。	後期
34	7		SI03	土師器	甕	15.9	3/4			20.0		褐鉄鉱小粒多、シャモット・石英小粒	良好	褐	外面 上方向ハケメ後、体部中位に横方向ハケメ。頸部横方向ナデ。口唇は面の作出を意識。全面煤付着。内面 体部下位を斜方向ヘラナデ、上位を横方向ヘラナデ。頸部横方向ハケメ。	草刈 1 式
34	8		SI03	土師器	甕	15.3	1/1	6.8	1/1	19.8	20.3	褐鉄鉱小粒多、白色微粒	良好	橙	外面 上方向ハケメ後、底部外周ヘラケズリ。体部中位以高・口縁下位を横方向ナデ。口唇は面の作出を意識。底部ヘラミガキ。焼成後 1 か所穿孔。内面 全面ヘラミガキ。頸部境を横方向ヘラナデ、頸部横方向ハケメ。	草刈 1 式
34	9		SI05	土師器	甕	(22.0)	1/3			(24.6)		石英小粒・白色微粒、海綿骨針少	良好	明赤褐	外面 縦方向ヘラケズリ、頸部横ナデ。内面横方向ヘラナデ。	鬼高式
34	10		SI06	弥生土器	鉢	(16.4)	1/4			(19.1)		褐鉄鉱小粒・白色微粒	良好	橙～赤褐	外面 薄い複合口縁で、斜縄文 3 列からなる羽状縄文 (LR) を施す。下 2 列間に一重結節文 S 字状 (R) を施す。複合部下端に原体による押捺をする。口唇は面取りし、斜縄文 (LR) を施す。複合口縁以外はヘラミガキ、赤彩を施す。内面 全面ヘラミガキ、赤彩。	後期
34	11		SI07	土師器	小形壺	5.2	1/1	2.0	1/1	5.8	5.3	石英微粒多、海綿骨針微量	良好	橙～赤褐	外面 全面ヘラケズリで丸底にする。頸部を強く横方向ナデ。赤彩。内面 ヘラナデ、赤彩。	鬼高式
34	12		SI07	土師器	杯	14.8	3/4			15.0	3.8	石英微粒多、海綿骨針	良好	明黄褐	外面 丸底でヘラケズリ。口縁部ナデ締める。内面 ヘラ状工具で横方向ナデ。	鬼高式
34	13		SI07	土師器	甕	(19.2)	1/3			26.5		褐鉄鉱大粒・石英微粒、海綿骨針微量	良好	橙	外面 胴部縦方向ヘラケズリ後、肩部横方向ヘラケズリ。頸部縦方向ヘラナデ後、頸部から口縁を横方向ナデ。内面 ヘラ状工具で横方向ナデ。	鬼高式
34	14		SI07	土師器	甕	18.2	3/4	6.6	1/1	18.2	25.2	白色小粒・石英小粒多、海綿骨針少	良好	橙～黒褐	外面 縦方向ヘラケズリ後、頸部横方向ナデ。内面 体部下位を斜方向ヘラナデ、中位を横方向ヘラナデ。	鬼高式
34	15	10		弥生土器	壺							石英小粒・白色小粒多、海綿骨針少	良好	明赤褐	外面 複合口縁は斜縄文 (RL) を施し、下端に指頭押捺。頸部ヘラミガキ。内面 ヘラミガキ。	久ヶ原式
34	16	10		弥生土器	壺							褐鉄鉱・石英微粒	良好	明赤褐	外面 頸部下位に沈線区画内の斜縄文 (LR)。外側はヘラミガキ、赤彩。内面 ヘラミガキ、赤彩。	久ヶ原式～山田橋式
34	17	10		弥生土器	鉢							石英微粒多	良好	黒褐	外面 口縁羽状縄文。口唇部斜縄文 (RL)。内面 ヘラミガキ、赤彩。	久ヶ原式
34	18		SI11	弥生土器	壺					(12.4)		褐鉄鉱小粒・石英小粒	良好	橙	外面 体部斜方向ヘラナデ。頸部に輪積痕を装飾で残す。赤彩。内面 横方向ナデ。頸部まで赤彩。	中台式
34	19	13		カワラケ	杯	(13.6)	1/9	(6.0)	1/6	(13.7)	3.9	石英小粒・褐鉄鉱小粒	良好	にぶい橙	外面 底部右回転糸切痕無調整、口縁をやや強くヨコナデ。内面 見込みナデない。球状でへそも無く、ヨコナデ痕も目立たない。	鎌倉期
34	20	13		カワラケ	杯	(13.8)	1/9	5.8	1/1	(13.9)	4.6	石英小粒・褐鉄鉱小粒	良好	橙	外面 底部右回転糸切痕無調整、口縁をやや強くヨコナデ。内面 見込みナデない。球状でへそも無く、ヨコナデ痕も目立たない。全面煤付着。	鎌倉期

能満遺跡群 地楽寺地区　調査風景　東から

能満遺跡群 地楽寺地区　1トレンチSI01　北東から

能満遺跡群 地楽寺地区　4トレンチ　西から

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02　南から

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02カマド周辺遺物出土状況　南西から

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02土層断面　南西から

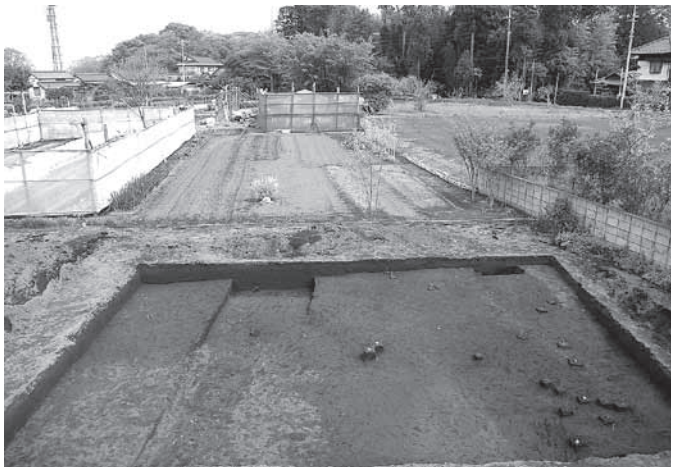
能満遺跡群 地楽寺地区　SI02カマド　南から

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02 P2貯蔵穴　北西から

能満遺跡群 二階台地区　3トレンチ本調査部分　北西から

能満遺跡群 二階台地区　4トレンチ(奥は1・2トレンチ)　南から

能満遺跡群 二階台地区　5トレンチ　北西から



能満遺跡群 二階台地区　本調査範囲遺構確認面　南から

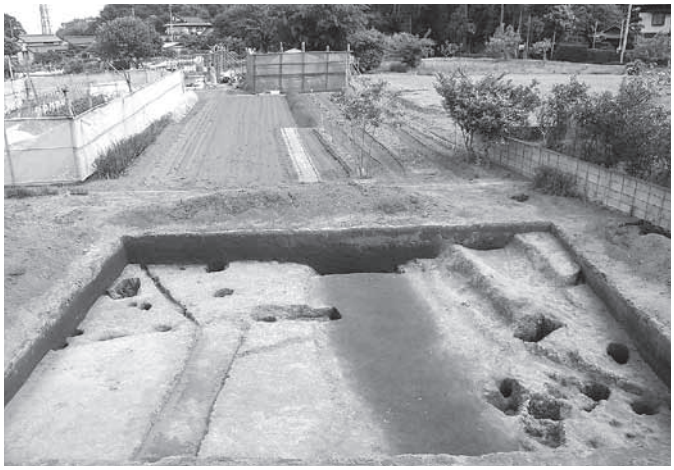
能満遺跡群 二階台地区　調査風景　中央奥の森が能満城主郭跡　南から

能満遺跡群 二階台地区　SD02・SI02P2遺物出土状況　南から

能満遺跡群 二階台地区　SD02土層断面　南西から

能満遺跡群 二階台地区　SI01・SI03　南東から

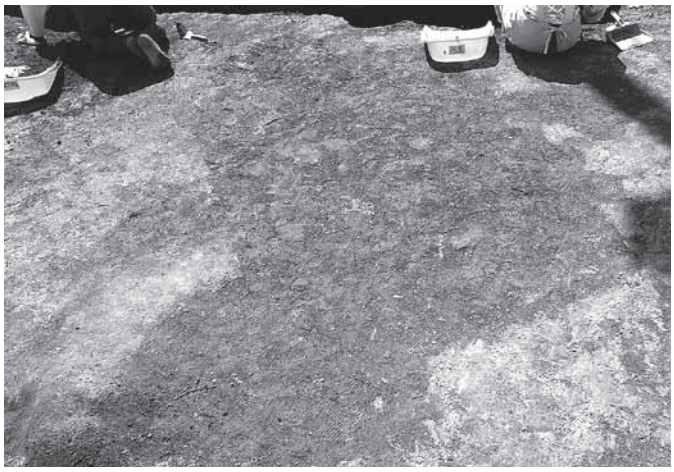
能満遺跡群 二階台地区　SI02・SI04　南東から



能満遺跡群 二階台地区　本調査範囲精査後　南から

椎津尾崎遺跡　遺構確認面　東から

椎津尾崎遺跡　遺構確認状況　西から



椎津尾崎遺跡　002遺構確認面　東から

椎津尾崎遺跡　調査風景　北西から

島原遺跡　1トレンチSI04確認面　南西から

島原遺跡　2トレンチ土層断面　北西から

島原遺跡　SI03カマド　東から

島原遺跡　本調査部分　東から

棗塚遺跡　調査前状況　西から

棗塚遺跡　表土掘削状況　南から

棗塚遺跡　調査風景　西から

棗塚遺跡　2トレンチ土層断面　西から

棗塚遺跡　遺構確認状況　南から

棗塚遺跡　遺構確認状況　北から

海士遺跡群　調査前状況　南西から

海士遺跡群　トレンチ配置状況　南から

海士遺跡群　1トレンチ遺構確認面　南から

海士遺跡群　2トレンチ遺構確認面　南から

二日市場遺跡　調査前状況　東から

二日市場遺跡　トレンチ確認面　北から

姉崎東原遺跡　調査区と姉崎天神山古墳(奥)　南から

姉崎東原遺跡　調査風景　南西から

姉崎東原遺跡　1・5・6・7トレ　北東から

姉崎東原遺跡　2トレ地下式坑天井部確認　南西から

菊間藩庁跡　1トレンチ001遺構確認状況　北西から

菊間藩庁跡　1トレンチ002・003遺構確認状況　北から

菊間藩庁跡　2トレンチ全景　南西から

菊間藩庁跡　2トレンチ004遺構確認状況　南西から

菊間藩庁跡　2トレンチ005遺構確認状況　西から

菊間藩庁跡　調査風景　北から

山倉前畑遺跡　3トレンチ　北西から

山倉前畑遺跡　4トレンチ　北から

山倉前畑遺跡　8トレンチSI05遺物出土状況　西から

山倉前畑遺跡　9トレンチ　東から

山倉前畑遺跡　10トレンチ　東から

山倉前畑遺跡　11トレンチ　西から

山倉前畑遺跡　12トレンチ　東から

山倉前畑遺跡　13トレンチ　西から

能満遺跡群 地楽寺地区　1トレ2

能満遺跡群 地楽寺地区　1トレ3

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02-3

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02-10

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02-11

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02-13

能満遺跡群 二階台地区　SI01-3

能満遺跡群 地楽寺地区　SI02-15

能満遺跡群 二階台地区　SI02-6

能満遺跡群 二階台地区　SI03-12

能満遺跡群 二階台地区　SI04-15

能満遺跡群 二階台地区　SI04-17

能満遺跡群 二階台地区　SD02-21

能満遺跡群 二階台地区　SD02-22

椎津尾崎遺跡　1トレ003-2

棗塚遺跡　1トレ3

菊間藩庁跡　6

山倉前畑遺跡　SI01-6

山倉前畑遺跡　SI07-11

山倉前畑遺跡　SI03-7・8

山倉前畑遺跡　SI03-8

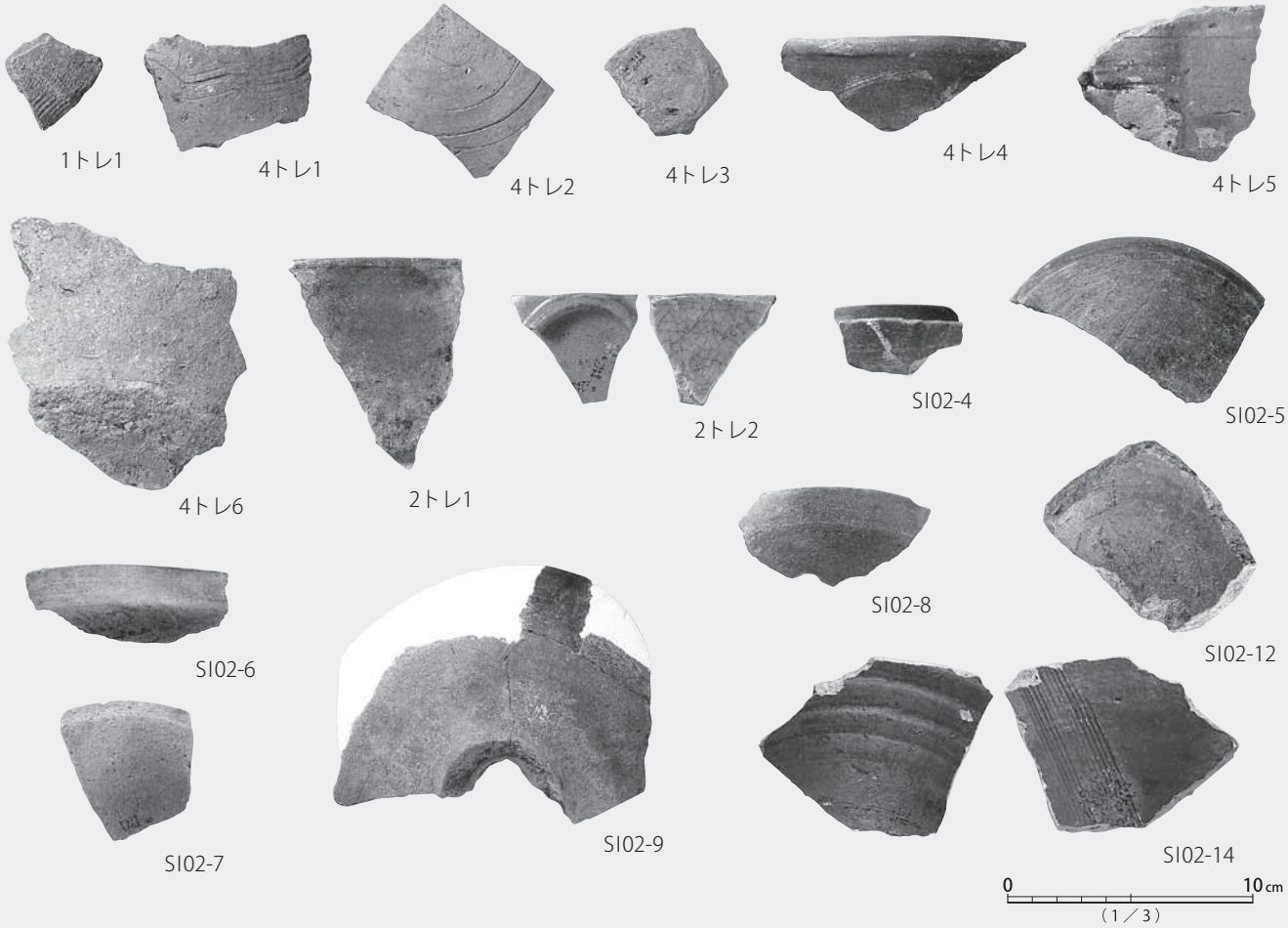
山倉前畑遺跡　SI07-13

山倉前畑遺跡　SI07-12

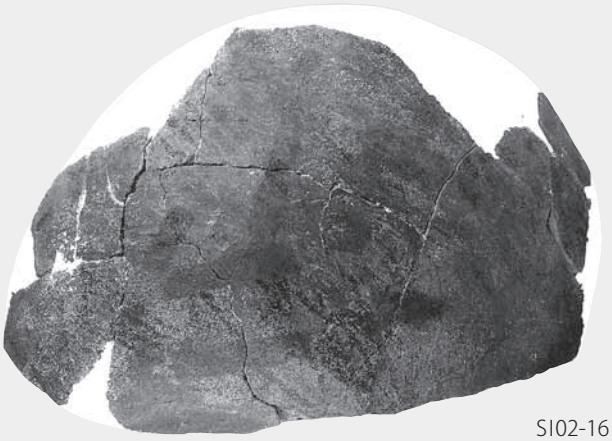
山倉前畑遺跡　SI03-7

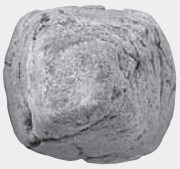
山倉前畑遺跡　SI07-14

能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点



能満遺跡群 地楽寺地区第 2 地点

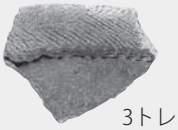

SI02-16



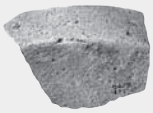
SI02-17

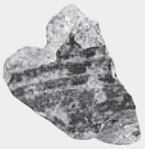
SI02-18

能満遺跡群 二階台地区第 2 地点


3トレ1

3トレ2


4トレ1



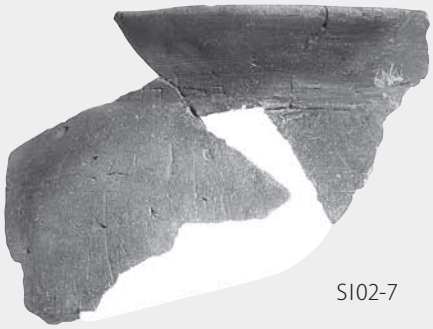
5トレ1

本調査区域一括-1

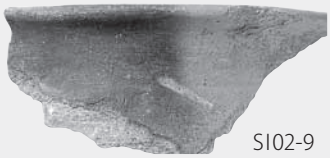
SI01-2

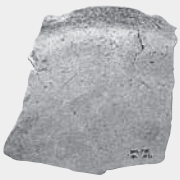
SI02-4

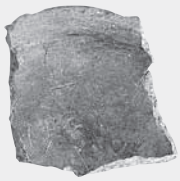
SI02-5


SI02-7

SI02-8

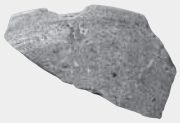

SI02-9




SI03-11

SI03-13

SI04-14


SI04-16

SI04-18

SD02-19

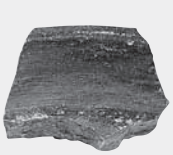
SD02-20

SD02-21

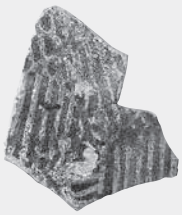
SD02-22

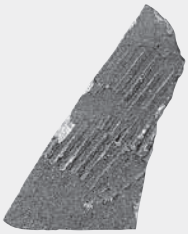
SD02-23

SD02-24



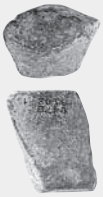
SD02-25


SD02-26


SD02-27

SD01-30

SD02-28


SI02-10

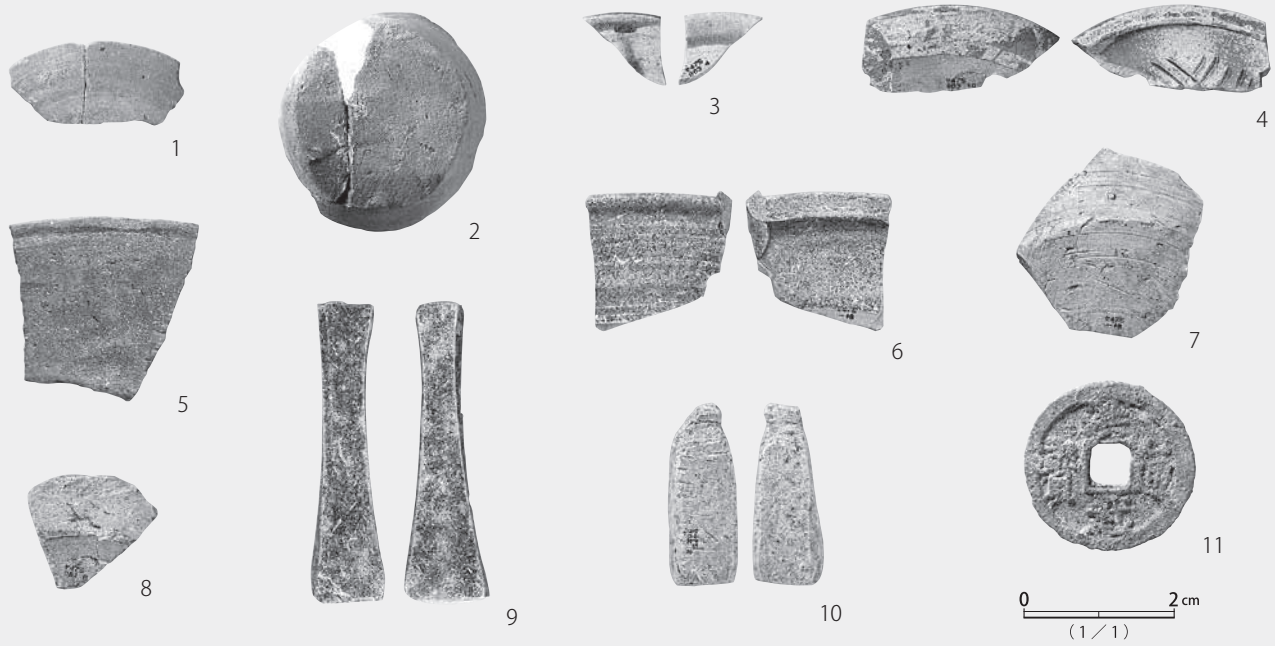
SD02-29

0 10cm
（1／3）

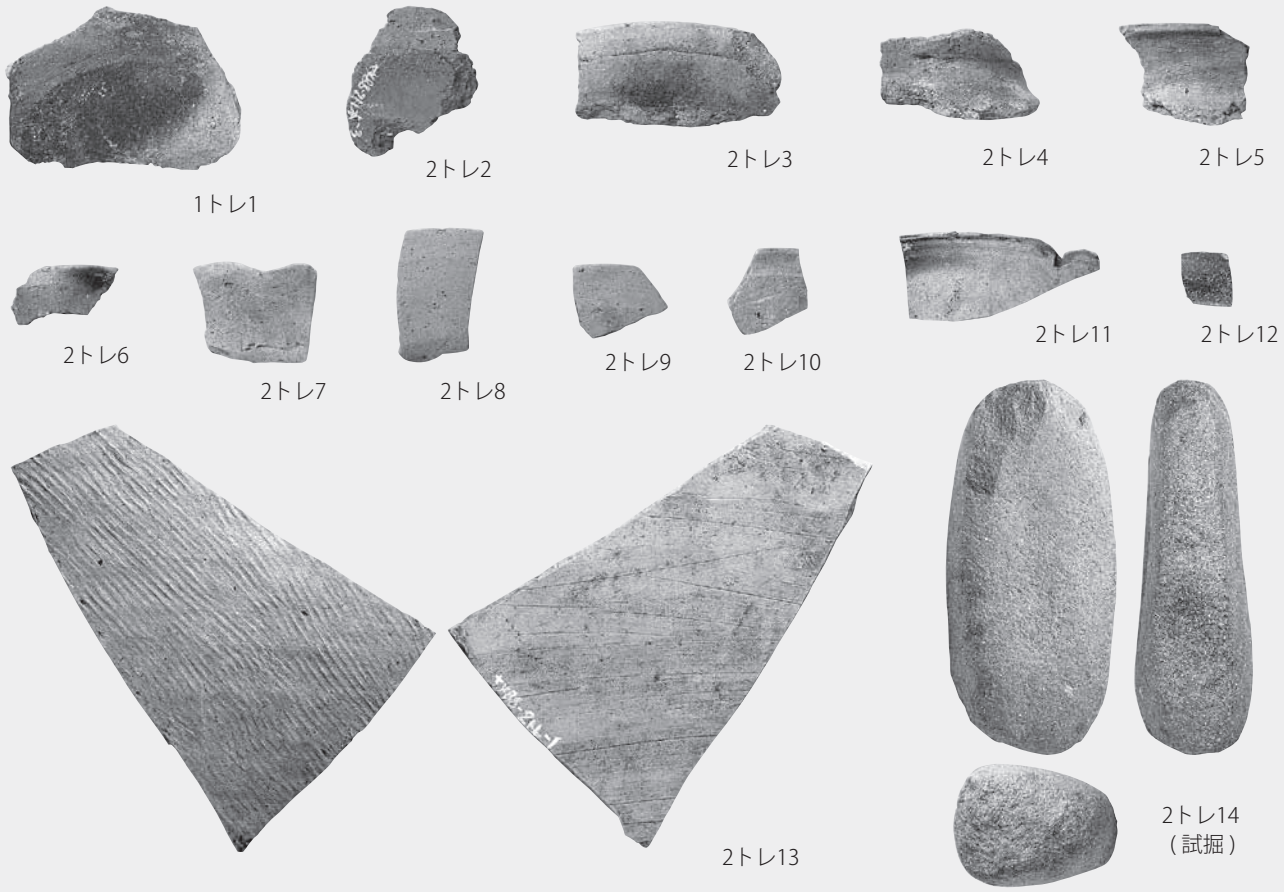
0 2cm
（1／1）

0 5cm
（1／2）

椎津尾崎遺跡 第 2 地点



島原遺跡



棗塚遺跡 第 5 次

棗塚遺跡 第 5 次

巻貝類

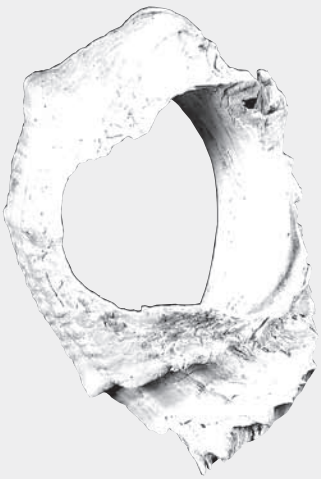
イボキサゴ

ウミニナ

アラムシロ

マルタニシ

ツメタガイ

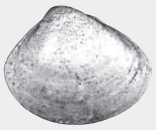

アカニシ

二枚貝類

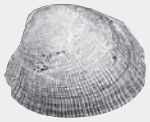
サルボウガイ

シオフキガイ

マテガイ


ハマグリ

カガミガイ

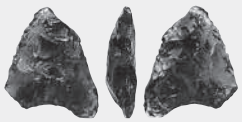

アサリ

軟骨魚類

脊椎骨

貝類 S=1/2
魚類 S=2/1

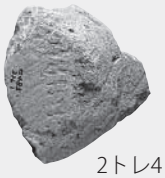
姉崎東原遺跡 E 地点


6トレ1

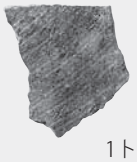
0 2cm
（1／1）

2トレ2

2トレ3


2トレ4

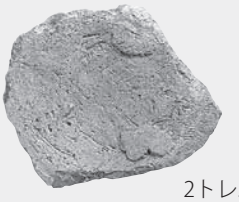
菊間藩庁跡


1トレ1

1トレ2

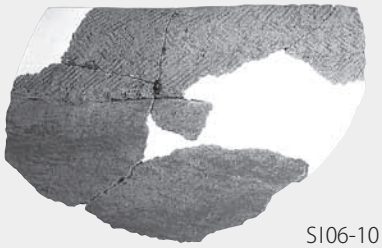
2トレ3

2トレ4


2トレ5

山倉前畑遺跡 第 2 地点

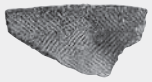
SI05-9


SI06-10

SI11-18

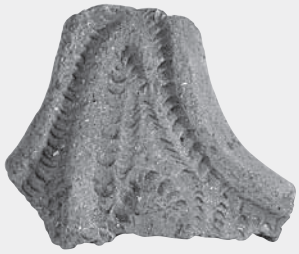
10トレ15

10トレ16


10トレ17

12トレ4

11トレ3


3トレ1

13トレ19

13トレ20

7トレ2

13トレ5

0 10cm
（1／3）

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいせい23ねんどいちはらしないいせきはっくつちょうさほうこく
書　名	平成23年度 市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	能満遺跡群地楽寺地区第２地点・能満遺跡群二階台地区第２地点・椎津尾崎遺跡第２地点・島原遺跡・ 棗塚遺跡第５次・海士遺跡群海士地区・二日市場遺跡第２地点・姉崎東原遺跡Ｅ地点・菊間藩庁跡・ 山倉前畑遺跡第２地点
巻　次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	田所真・木對和紀・櫻井敦史・鶴岡英一・牧野光隆
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒290－0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL　0436(41)9000
発行年月日	2012年（平成24年）3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
のうまん 能満遺跡群 じらくじ 地楽寺地区 第２地点	いちはらしのうまん　じらくじ 市原市能満字地楽寺 607-2・3	12219	セ477	35° 30′ 51″	140° 07′ 53″	20110418 ～ 20110510	36.0㎡／ 357.98㎡ 確認調査 12.0㎡本調査	個人住宅建設
のうまん 能満遺跡群 にかいだい 二階台地区 第２地点	のうまん　にかいだい 市原市能満字二階台 533-7	12219	セ478	35° 30′ 51″	140° 07′ 51″	20110418 ～ 20110510	50.0㎡／ 496.04㎡ 確認調査 54.5㎡本調査	個人住宅建設
しいづおざき 椎津尾崎遺跡 第２地点	しいづ　おざき 市原市椎津字尾崎 1051-4	12219	セ475	35° 28′ 03″	140° 02′ 15″	20110415 ～ 20110428	33.0㎡／ 330.0㎡ 確認調査	分譲住宅建設
しまぼら 島原遺跡	しいづ　しまぼら 市原市椎津字島原 1327-1・2・3	12219	セ488	35° 27′ 54″	140° 02′ 06″	20110912 ～ 20110914	70.0㎡／ 706.0㎡ 確認調査 27.0㎡本調査	個人住宅建設
なつめづか 棗 塚遺跡 第５次	あねさき　しんめいまえ 市原市姉崎字神明前 1954番６の一部、 1954番７、1956番９	12219	セ476	35° 28′ 35″	140° 02′ 49″	20110418 ～ 20110422	33.0㎡／ 331.35㎡ 確認調査	個人住宅建設
あま 海士遺跡群 あま 海士地区	あまありき 市原市海士有木 字海士1723-3	12219	セ483	35° 28′ 47″	140° 07′ 29″	20110509 ～ 20110516	20.0㎡／ 206.0㎡ 確認調査	個人住宅建設
ふつかいちば 二日市場遺跡 第２地点	ふつかいちば 市原市二日市場 602番の一部	12219	セ484	35° 30′ 51″	140° 07′ 51″	20110614	5.7㎡／ 57.0㎡ 確認調査	神社拝殿建設
あねさきひがしはら 姉 崎 東 原遺跡 Ｅ地点	あねさき　ひがしはら 市原市姉崎字東 原 2713番１の一部	12219	セ485	35° 28′ 25″	140° 03′ 15″	20110726 ～ 20110729	24.0㎡／ 244.79㎡ 確認調査	個人住宅建設
きくまはんちょう 菊間藩庁跡 (菊間遺跡群 きたの 北野地区)	きくま　きたの 市原市菊間字北野 2100番２	12219	セ487	35° 32′ 24″	140° 08′ 40″	20110907 ～ 20110909	16.5㎡／ 165.42㎡ 確認調査	個人住宅建設
やまくらまえはた 山倉前畑遺跡 第２地点	やまくら　みやまえ 市原市山倉字宮前508 番１・３、509番１・３	12219	セ490	35° 28′ 53″	140° 07′ 51″	20111212 ～ 20111216	57.0㎡／ 570.83㎡ 確認調査	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
能満遺跡群地楽寺地区第２地点	城跡・包蔵地	古墳・中世	竪穴建物跡２軒、溝跡１条	弥生土器、土師器、須恵器、カワラケ、中世陶磁器	古墳時代後期の竪穴建物跡の一部を本調査し、遺構の保存状態が良好なことを確認した。
能満遺跡群二階台地区第２地点	城跡・包蔵地	弥生・古墳・中世	竪穴建物跡５軒、溝跡３条、土坑２基	弥生土器、土師器、須恵器、石器、中世土器、陶磁器	能満城跡に先行する時期の中世の大型溝跡の一部を調査した。
椎津尾崎遺跡第２地点	包蔵地・貝塚	中世	方形竪穴状遺構４基、不整形土坑２基	中世土器、陶磁器、石器、銅銭	隣接する第１地点よりも、方形竪穴状遺構の集中化がみられた。
島原遺跡	包蔵地	古墳・奈良・平安	竪穴建物跡４軒	古墳時代・奈良・平安時代土師器、須恵器、石器	古墳時代終末期から奈良・平安時代にかけての集落を確認した。
棗塚遺跡第５次	包蔵地	古墳、中近世	竪穴建物跡３軒、溝跡２条、貝層	古墳時代土師器、石器	姉崎の低地において古墳時代後期の集落を確認した。
海士遺跡群海士地区	包蔵地	中世以前	溝跡３条 、土坑１基	なし	なし
二日市場遺跡第２地点	包蔵地	奈良・平安	溝跡１条	なし	二日市場廃寺に関連する可能性も考えられる溝跡を確認した。
姉崎東原遺跡E地点	包蔵地	縄文・中世	地下式坑１基	縄文土器、石器	地下式坑を確認した。
菊間藩庁跡（菊間遺跡群北野地区）	包蔵地・城館跡	弥生・古墳・中世	竪穴建物跡３軒、円墳１基、地下式坑１基	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器	菊間古墳群において新たな円墳を確認した。
山倉前畑遺跡第２地点	包蔵地	縄文・弥生・古墳	竪穴建物跡13軒	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、石器	弥生時代後期～終末期および古墳時代前期・後期の集落跡を確認した。

要約

今年度は例年よりも多く、9遺跡10地点を調査した。

能満遺跡群では、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴建物跡を調査し、中世の溝跡も検出した。溝跡は鎌倉期にまで遡る可能性があり、戦国期の能満城跡に先行するものとみられる。椎津尾崎遺跡では、中世の方形竪穴状土坑を検出し、隣接する第１地点からの遺構の分布を確認した。また、島原遺跡では、古墳時代終末期と奈良・平安時代の竪穴建物跡４軒を確認した。棗塚遺跡では、姉崎の砂堆上において古墳時代後期集落の存在を初めて確認した。菊間藩庁跡は、弥生時代後期の集落跡を確認するとともに、菊間古墳群において新たな円墳を確認した。山倉前畑遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと、古墳時代後期における遺構密度の高い集落遺跡であることが判明した。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集

平成23年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成24年3月26日　発行

編集　市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489
TEL　0436(41)9000

発行　千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1
TEL　0436(22)1111

印刷　株式会社　弘　文　社
市川市市川南2-7-2